響　14号

塾教育研究会（JKK）

目 次

一、2011 年度の活動報告 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 布浦 万代 1
2011 年4月から 2012 年 3 月まで
二、特集1・・・「社会が必要とする塾とは」 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
1. 教育アドバイザーからの提言 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
2. 私学及び塾関連業者の方々からの提言 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
3. 安田氏の提言より(塾ジャーナルからの転載) ・・・・・・・・・・・・ 27
三、特集2・・・「公と私との関係の変遷」
1.「学習塾と行政との関係(接点)について」・・・・・・ 皆倉 宣之 35
2.「学力って何だろう」 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 平松 享 37
―都立高校の土曜講師として―
3.「一期一会の授業」 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 種村 洋 40
―都立高校の土曜講師として―
4.「共栄スーパー学習ジムについて」 ・・・・・・・・・・・ 濱 実 42
―校内塾 講師として―
5.「公立小学校における授業実践」 ・・・・・・・・・・・・ 菅原 明之 44
6.「緊急人材支援育成事業に取り組んで」 ・・・・・・・ 青沼 隆 46
―雇用促進法の対策実施塾として―
四、実践報告
1.「オランダの教育について」 ・・・・・・・・・・・・・・・ 皆倉 宣之 49
2. 万葉の旅 「常陸国の防人の歌碑を訪ねて」・・・・ 布浦 万代 61
3.「教育コーチング」 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 仲野十和田 72
4.「今塾は何をすべきか」 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 林 政夫 76
5.「たった一人のために」 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 平林 一之 95
五、会員プロフィール ・・ 99
六、特別寄稿
1.「さらば吉本隆明・・・・・・・・吉本さん」 ・・・・・・・・・・ 青木 司郎 119
2.「吉本隆明異論」 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 皆倉 宣之 125
3.「私が塾から学んだもの」 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 米澤 幸三 134
七、連載「万葉の風」その1 ―大津皇子と山の辺の道― ・・ 布浦 万代 147
八、Exam forces students to cram irrelevant facts Julian Dierkes 150

Ｈ２３年度ＪＫＫ活動報告

ＪＫＫ副代表　布浦万代

昨年 6 月 26 日、五反田文化センターに於いて総会が開催され、2011 年度の活動計画・予算が決定しました。それに基づきJKKの活動の方向性も大きく変わった 1 年間でした。特記すべきは、JKKの活動をよりし易くするために予算の計上が弾力的に行われたこと、入会者が増えたこと、何よりも会員による研修会や実践報告が活発であったことです。3 月 11 日に起きた「東日本大震災」により、余儀なく計画を変更した活動もありましたが、JKKの目指す方針に概ね活動が出来た 1 年であったと思います。願わくば、総会も含め研修会や実践報告会などへの会員の参加がもっと多くなれば、JKKの活性化につながることを痛感しました。

★H23 年４月１１日　　＜幹事会＞

◇時間：午前 10 時～午後 1 時　　場所：ルノアール 秋葉原店

◇議題：①リヒテルズ氏講演会延期について
②万葉の旅、中止もしくは延期について
③総会の開催にあたって
④響き発行について
⑤震災への対応
⑥23 年度の活動について

★H23 年 5 月 17 日　　＜幹事会＞

◇時間：午前 10 時 30 分～午後 1 時　場所：ルノアール 上野しのばず口店

◇議題：①総会の打ち合わせ
②響きの発行について
③総会当日の研修会の件
④その他

★H23 年 6 月 7 日　　＜幹事会＞

◇日時：午前 10 時 30 分～午後 1 時　場所：ルノアール上野忍ばず口店

◇議題：総会の内容確認
①22 年度活動報告
②22 年度会計報告
③23 年度活動計画案
④23 年度予算案
⑤その他

★H23 年 6 月 26 日　　＜23 年度総会＞

◇時間：午前 11 時～午後 12 時 30 分

◇場所：品川区・五反田文化センター　第一会議室において

◇出席：皆倉、布浦、平林、仲野、林、中村、小林（以上 7 人）

委任状：13 人

合計 20 人（83%）。会員の過半数の出席をもって以下の議案を検討決議した。

◇議題

①第 25 期活動報告

皆倉代表より、別紙の内容を報告され、出席者一同より承認された。

②第 25 期会計報告

会計担当の江川幹事が都合により欠席のため、仲野幹事が代理として報告した。

収入が会員数よりも多いがその理由について。

支出の明細がわからない。

会計が代わるが、引継ぎはどのようになっているのか。

等、質疑が行われた。

③第 26 期予算案

今年度より、ＪＫＫの活動をしやすいように予算を計上することにした。

小林幹事より、予算案の説明が行われた。

予算案の計上は､今年度が初めてなので弾力的な運営をお願いしたい。

サーバーの使用料について。

等、質疑が行われた。

④第２６期活動案

皆倉代表より、別紙の活動案が提案された。

活動内容に関して、活発な質疑が行われた。

⑤担当交代

幹事の任期は２年だが、事務局長の梶原幹事、会計の江川幹事が、任期途中で休会されたので、この二人の職務を補充する必要があり、事務局長を小林幹事、会計を仲野幹事がき受けることになった。本人承諾のもと出席者一同に承認された。なお、事務局長、会計の任期は、休会された二人の残りの１年である。

以上の議題、全てが決議され、定刻に終了した。

★H23 年 6 月 26 日　　＜研修会＞

◇実践報告：「学道の勧め（学び方を教え、ともに人間としての成長を果たす)」

青藍学院　代表　林政夫氏

◇日時：６月２６日（日）午後１時３０分～４時２０分

◇場所：五反田文化センター　第一会議室

★H23 年 8 月 16 日　　＜幹事会並びに暑気払い＞

◇時間：午後６時～７時１０分

◇場所：京個室辻が花（上野）

会費：各自負担

出席：皆倉、布浦、平林、林、小林　以上５名　欠席：仲野

傍聴：ディルケルさん

◇以下の議題が活発に協議され、決定ならびに承認された。

①入会希望者審議

山下洋輔さんがＪＫＫ入会を希望しているので、本人の略歴を小林より紹介者され、満場一致で入会を承認した。

②入会申込書　改定案

現在の「入会申込書」は、一部不備があると小林が指摘をし、別紙（添付ファイル）の案に決定した。生年月日・性別の記載が必要かどうか、活発な意見が交換され、生年月日は年代にし、性別は不要となった。

③メーリングリストについて

送信先のアドレスの確認

幹事会：kanji-jkk@jkkone.org

会員：jkk@jkkone.org

重さ：送信は１Mb 以下とする。重いファイルは圧縮して送信する。

内容：平林氏から、「幹事会」に送信するメールは、全員が必ず読むべき内容なので、連絡事項や事務的な内容の配信だけにしたらどうか。特に思想信条・政治的な内容の配信は、制限したほうがいいと提案がされた。

事務的な内容の配信だけでは、かえって味気の無い内容になる。

現在の６人の幹事会のメンバー間であれば、そういう内容の配信がされても問題は生じないという意見交換があり、現状でよいとなった。

その他：会員への配信のメーリングリストが閑散としているので、月に３・４回は配信ができるようにしたい。配信する内容を検討する必要がある。

④機関誌「響」の進行状況

林編集長より報告があった。
投稿を依頼している以下の６人からは執筆の承諾を得ている。
（敬称略）皆倉、布浦、仲野、小田、諫山、森本
平林さんからディルケル氏の記事「アジアの塾」を特別寄稿して戴くという報告があり英語・日本語の二ヶ国語で記載する。
傍聴者として参加していたディルケルさんも承諾した。
原稿締め切りは８月３１日。最終校正９月１３日。９月２０日の幹事会で報告したい。
サイズ：Ｂ５版　印刷は、仲野さんの印刷機をお借りしたい。

⑤研修会
９月９日　林氏の「学道の勧め」
１１月２３日・２４日　万葉の旅
１０月はスケジュールがつまっているので研修会は行わない。
１１月１５日、幹事会の当日、「リヒテルズ直子氏の勉強会」を行う。
平林氏から１２月第１か第２日曜日に､「森本さん開塾５０周年を祝う会」を開催するという報告がある。

⑥その他
平林氏から、総会開催は２年に１回でよいのではないか、会員の満足する会の運営を心がける必要がある、と提案がある。
総会の意義を重んじ、総会は毎年開催すべきである、と却下される。
以上、活発な意見交換がなされ、協議検討事項は全て終了する。

★H23 年 9 月 9 日　　＜私塾ネット＆ＪＫＫ研修会＞

◇場所：ナカジュク板橋教室
◇ＪＫＫ会員　林氏　講演　「学道について」

★H23 年 9 月 20 日　　＜幹事会＞

◇時間：午前 10 時 30 分　◇場所：上野ルノアール
◇議題　①9 月 9 日研修会の報告
②機関誌「響」について
③「万葉の旅」について
④10 月～3 月の研修について
⑤JKK 後継者の育成について
⑥その他

★H23 年 11 月 13 日　　＜私塾協同組合連合会全国研修大会＞

◇時間：午後 2 時～　◇場所：オークラフロンティアホテルつくば

◇JKK 代表 皆倉氏 講演「塾教育と NIE」～子どもたちの世界を広げるために～

★H23 年 11 月 15 日　　＜幹事会＞

◇時間：午前 10 時～11 時　◇場所：北トピア 8 階 801 号会議室

出席：（敬称略）皆倉、布浦、平林、林、仲野、小林（6 名）

◇議題 ①機関誌「響」の報告：林

②年賀広告：皆倉　塾ジャーナルに年賀広告１５，７５０円を載せること。満場一致で可決。　JKK が何をやる団体かわかるような一言がほしい。

③塾百年史の購入５，０００円　満場一致で可決

④万葉の旅：布浦

集合場所の確認、宿泊者の確認、日程の若干の変更

柏の日本レンタカー前集合；午前 7 時

皆倉、平林、林、小林、清水の５名

⑤会員の活躍の場、交流の場を作るべきという提案：林

時間がなく、今後の検討課題となる。

⑥次回の幹事会　　平成 24 年 1 月 24 日（火）午前 10 時～、場所未定

★H23 年 11 月 15 日　　＜研修会＞

◇時間：午前 11 時～午後 2 時　◇場所：北トピア 8 階 801 号会議室

大変に見晴らしのいい部屋でした。座椅子も座りやすく 4 時間座っていても腰の疲れを感じません。

◇参加者：（順不同・敬称略）11 名

山下、上本、清水一郎、清水真理子、青沼、皆倉、布浦、仲野、林、平林、小林

◇テーマ：オランダの教育を探る

～わが国の教育改革への参考資料となりうるか～

初めての顔合わせの方もいるため、各自簡単な自己紹介から始まりました。

コーディネータ：平林氏から、今回の研修会の意義について報告・説明がありました。

５月２９日（日）社会教育運動家のリヒテルズ直子氏を招聘して JKK 主催の講演会を予定していた。その最中に３月１１日、日本大震災が勃発したので、急遽開催を延期した。来年、リヒテルズ直子氏に講演をお願いする予定であるが、単なる講演会で終わらせないため、またＪＫＫがリヒテルズ氏の提案等にどう取り組んでいくのか、そういうことを踏まえて予習・復習をしたい。その一環として本日の研修会を開催したと、趣旨の説明がありました。

報告：皆倉代表

今回の研修会は､皆倉さんから｢オランダの教育ならびにイエナプラン｣の説明が約１時間２０分行われました。

その後、平林氏の司会で、各自が持っている問題提起や質問が発言されました。研修会は３時間に及びましたが、あっという間に時間が過ぎました。

★H23 年 11 月 23 日～24 日　　＜万葉の旅＞

第２回ＪＫＫ研修「万葉の旅 常陸国の防人の歌碑を訪ねて」参加 13 名

23 日：若舎人辺廣足館跡（行方市念木)、橘郷造神社一帯（行方市羽生）
歌碑（ふるさとコミュニティーセンター内・潮来市福島）
歌碑（鹿島神宮前)・神宮内巡り、 藤原鎌足神社（出生の地）
根本寺（松尾芭蕉訪問の寺)、　アトンパレスホテル泊

24 日：港公園の展望塔より鹿島臨海工業地帯を遠望、茨城県立カシマサッカースタジアム&サッカーミュージアム見学、学英舎訪問、等

★H24 年 1 月 24 日　　＜幹事会＞

◇時間：午前10時～午後2時　◇場所：上野・ルノアールにて

出席者(敬称略, 順不同);皆倉･布浦･小林･仲野･林･平林の幹事6名。(欠席者なし)

◇議題・決定事項

①総会の日時が決定。6月10日(日)　午後1時～5時（予定）
会場については現時点では未定

②次回の幹事会の日時　3月20日(祝) 13：00～１泊２日かけて討議
宿泊所：グランドプリンスホテル新高輪

③次回の「幹事会」は、時間をタップリとって、JKKの今後についてじっくり討議しようということに決定。

④次々回の幹事会・・・5月15日(火) 上野・ルノアールにて＜予定＞

⑤『響』14号　担当幹事；林　政夫【青藍学院】

⑥第３回『万葉の旅』の日時が決定。
今年は、大伴家持が国司として5年間を過した富山県高岡市(越中)と氷見市を訪問することに決定。期日：9月22日(祝)～24日(月)2泊3日

⑦リヒテルズ直子さんの勉強会（第２回）を2月～4月にかけて再度開催の予定。日時・場所等、決まり次第、事務局からのMLで案内。

★H24 年 3 月 20 日～21 日　　＜研修会＞

◇日時：3 月 20 日（祝・火）◇場所：代々木オリンピックセンター研修棟

◎第１部：午後 1 時～5 時 00 分

参加者：（敬称略）皆倉、布浦、平林、林、中島、小林（以上 6 名）

内容：ＪＫＫの活性化ならびに組織のありかたについて

司会・進行：小林

JKK の今後のさらなる発展、活性化をどうするかという問題提起から、JKK25 年の歴史を振り返り、活動が活性化していた時期、停滞した時期等、それぞれの原因を分析した。

各自の活発な発言の元に、ＪＫＫの目的を実現するために３つのグループ化が提案された。

１．実践研究（仲野）

２．理論研究（皆倉、平林）

３．自己啓発（林、中島）　（　）内は中心者。

会員は、上記の３つのグループいずれかに本人の希望によって１つ以上のグループに所属する。複数のグループに所属することは構わない。

運営は、各グループのメンバーで検討して、それをＪＫＫ全体に反映させる。なお、平林氏からＪＫＫサロンを開催したいという趣旨が述べられた。また、小田氏が実践していた「環境部会」の復活を希望する意見も上がった。

◎第２部：午後 6 時～8 時 30 分

・参加者：（敬称略）皆倉、布浦、平林、林、中島、小林（以上 6 名）

・内容：学習塾が成り立つ基盤は何か

司会・進行：林

憲法で教育権を取り上げている。その中で塾は教育にどう関わっていくべきなのか。

現実の入試制度の中で塾が成り立っている。入試の枠の中で塾として何を変えなくてはならないのか。入試問題を変えるのか、入試制度（システム）を変えるのか。自分の立場で消化できるものと、外部（社会や行政等）に向って発信するものとを区分する必要がある。等々、活発に参加者から発言された。

◇日時：3 月 21 日（水）午前 9 時 30 分～11 時 30 分

◇幹事会：皆倉、平林、林、仲野（以上４名）、オブザーバー：中島

◇議題　①総会の件

②機関誌響の件　　等が協議された。

＜特集１・・・「社会が必要とする塾とは」＞

＜その１＞

人間は自分なりに信念を持って生きているつもりでも、気がつかないうちに思ってもいなかった方向に走っていたり、いつの間にか道に迷ったりするものです。時々周りの状況を見ながら軌道を確認し、修正する必要があります。
その点塾も同じこと。今回は塾のことを誰よりも知っていて、その状況を示してくれる、日本を代表する３人の教育アドバイザー、森上展安氏、安田理氏、百瀬昭次氏に**「教育アドバイザーからの提言」**として塾の状況、あり方、進むべき方向について語って頂きました。

＜その２＞

また、**「私学及び塾関連業者の方々からの提言」**として私立中学高校の先生方、塾にかかわるテスト、教材、情報誌に携わる皆さんから、塾人が自分では気がつかない外からの眺めをお聞きしました。長くやっていればいるほど当たり前に思っていたことが実は当たり前ではなかったり、よそも同じだろうと思っていたことが実はその塾の特殊性であったり、良くも悪しくも自塾の常識・世間の非常識、とならないよう参考にさせて頂きます。
ご協力いただいた私立学校、塾関連業者の皆さまには心から感謝申し上げます。

＜その３＞

教育アドバイザーのお一人、安田理先生が塾情報誌に掲載なさったご意見を先生のご承諾の下この特集に掲載させて頂くこととなりました。たくさんの含蓄のあるお言葉を味わいつつ、一つの道しるべとして参考にさせて頂きたいと思います。2007 年塾ジャーナル新年号の**「自分の影響力を活かしてほしい」**と 2008 年塾ジャーナル新年号の**「『コンビニ』経営から見た塾」**と題した２点です。

＜特集１　教育アドバイザーからの提言（インタビュー）その１＞

森上　展安　氏　（森上教育研究所代表）

森上　展安（もりがみ　のぶやす）氏のプロフィール（ホームページより）

森上展安氏が、創立以来 11 年塾長を勤めていた学習塾 ぶQ（武久鴻志会・東京中野）のオーナー交替に伴い独立して昭和 63 年 3 月に創立。

その経験とりわけ御三家 100 名受験 74 名合格の実績をふまえ、中学受験塾の経営コンサルティング、さらには中学受験に関する種々のリサーチやソフトウェアの製作、また私立中高一貫校経営のコンサルティングを始めとする私学支援事業を目的としています。 尚、2004 年から父母向けセミナー「わが子が伸びる親の『技』研究会」（oya-skill.com）を開催している。また、2012 年 5 月から進学 WEB サイト「読む進学」（http://www.yomu-shingaku.com）を開設。

１．あるべき塾とはどういうものだとお考えですか。

先日、元の塾の教え子の集まりがありました。２つのグループで一つは３０歳代後半、もう一つは４０歳代前半のグループです。いずれのグループの子ども達（？）も超難関校をでて一流企業や中央官庁、あるいは医者や弁護士をしている人達です。その中での話です。ある女医さんは自分の長女は中学受験をさせない、と言っていました。その理由はと聞くと、昔のような塾がなくなったと言うのです。今は皆企業塾になっていて勉強させるだけで先生が授業中全人格で子ども達に語りかけるようなことがなくなったと言うのです。ここ数年３５歳から４５歳の年齢層で失業者が５０万人に達しています。こういう不況もさることながらこの頃の塾は昔の塾とスタイルが変わって来ていることが大きな変化です。

２．どんな塾が望まれているとお思いですか、具体的に

まず一つは M 算数塾です。基本的には教えない。自分で分かるまで手を貸さな

い。先生はあくまでサポートに徹する。宿題はなし。その場だけで考える力を養う。そういう塾があります。そのシステムでは子ども達は喜んで勉強する。自分で考えさせる。分からないところはヒントだけを出して考えさせる。お家の人の話ではそういうやり方で子ども達は勇気づけられて帰って来るそうです。内容的にも４年生ではサピックスで学習する５年生の範囲までやってしまうというのです。

次にM氏がやっている塾。此処は良い問題だけを厳選してやらせているのです。それぞれの単元に必要な、かつ典型的な問題だけを選んで生徒達にやらせるのです。何でもかんでも数をこなせばいいというのではなく、どうしても必要な問題だけをやらせることに手を掛けているのです。

また、K 氏の塾。生徒を友達同士４～５人のグループに分けて、生徒が自分たちで相談したり話し合ったりして、お互いが切磋琢磨しながら進んでいく授業です。これはピアプレッシャーという考え方を取り入れたもので、特に下位層の子ども達にフィットするシステムだと思います。

H 学習会というところがあります。幼児対象の塾ですが２０人くらいの生徒を４～５人のグループに分けて先生一人が付いて２～３分おきにやることを変えてやらせているのです。コストを掛けずにやる方法を考えています。実際今は学生さんはバイトがなくて困っています。つまり人材はあるのです。小集団で子ども達が主体的に関われるようなシステムはこれからは出てくると思います。

結局は成績が伸びて、仲間がいて、親が喜び、いいサポーターがいて、いい教材があって、手頃な料金であることではないでしょうか。

３．日本に塾が必要な理由について

体験的経験的に言うならば、これまでは「なくてはならなかった」からであったのだと思います。

わが国はこれまでずっと家計の力で学業や文化の達成を可能にしてきたので、それ以外ではないからです。

少なくとも西欧では宗教的にキリスト教が社会基盤として公共善としての「知」を支える考え方も、そして学校も整備してきましたが、わが国にそういった思想がなく、学校は「上」から整備されるものとしてあったのでしたから。

しかし今、家計の力は往時程ではありません。社会的介護が必要なように社会

的教育も必要となっています。

その意味では塾が家計に依存する以上、そしてまた産業化を志向し実現化した今、サービス産業としてこれまでのような高成長は難しいですね。
合従連合が行われるでしょうし、IT など使用した省力化も行われるでしょう。

一方で人材に注目した時、江戸から明治の移行で知識階級が没落し、その多くは教育で身を立て、これが私塾私学の人材供給になったわけですが、われわれの世代でも 60 年代、70 年代はそうでした。人材が業界に大量に入ってきました。

一方で今、35 歳～44 歳の無業者 50 万人の中にそうした人材はいないのかどうか、私は塾としては再び大きなチャンスではないか、と思っています。

但し、肝心の子どもがいなくなりつつあります。結婚をしない、できない方の大量発生です。家族の変容が激しいのです。従って NPO という形態でも活用して「新しい公共」ではないですが、次世代の人材を育成する仕組みが必要とされていると思います。

つまりそれは従来の塾とも、また学校とも違うかもしれませんが、もう一度、公共にとって必要な人材育成とは何か、家族のあり方とあわせて新しい"ジュク"の必要が生まれつつあると考えています。

****

森上教育研究所
〒102-0074　千代田区九段南 3-4-5　フタバ九段ビル 3Ｆ
TEL ： 03-3264-1271　FAX ： 03-3264-1275
e-mail：morigami@pp.iij4u.or.jp
ホームページ：http://www.morigami.co.jp

■中学受験から高校受験、大学受験までわかる進学 WEB サイト『読む進学』がオープン！■
会員登録はこちらから→ http://www.yomu-shingaku.com

****

＜特集１　教育アドバイザーからの提言（インタビュー）　その２＞

安田　理　氏　（安田教育研究所代表）

安田　理（やすだ　おさむ）氏　プロフィール

東京都出身。早稲田大学卒業後、（株）学習研究社入社。『中学コース』編集長を務めた後、受験情報誌・教育書籍の企画・編集にあたる。教育情報プロジェクトを主宰、幅広く教育に関する調査・分析を行う。教育情報編集部長を最後に同社を退社。

2002 年、安田教育研究所を設立。講演・執筆・情報発信、セミナーの開催、コンサルタントなど幅広く活躍中。

１．一般的な塾の現状をどう見ていいらっしゃいますか。

保護者の塾の選択の仕方が数字中心になっていると思います。つまり前年度より合格実績の良い塾を選んでいるように思います。E 塾とか I 塾のようなソフトタイプの塾より S 塾などの実績のあるところへ親の注目が集まっているようです。企業への就職のためを考えてか親も数字中心に考えているようです。

美術や音楽系の習い事も少なくなったよう。親に余裕がなくなったのでしょう。また家庭文化もなくなったような気がします。褒めて育てるとか友達親子になって子供を叱れない親が増えました。ある学校の先生の話では親が子供を呼び捨てにする家庭ほど子供がしっかりしているということでした。内田達郎氏によると昔は子供が最初にお金を手にするのはお買いものなどの家のお手伝いをしてそのお駄賃として貰ったものでした。ところが今では子供は何もしなくても最初からお金を持っているので、お店でもお客として甘やかされていると。

つまり子育てがなされていないのが現状で、これをカバーしているのが塾ということです。

２、子供にとって塾はどうあるべきか

大手塾と個人塾では異なると思います。大手塾は成果主義ですから、先生たちはあまりに忙しく、パソコンに向かう時間やほかの先生たちと雑談する暇もないというところもあります。個人塾はもっとそれぞれの塾の価値観を大切にして社会性を持たせ

るべきです。親でもない、学校の先生でもない第三者の大人に接することの少ない現代の子供たちにとって塾の先生は貴重な大人です。治安の悪化、核家族化、地域の分散、お客様も玄関で立ち話をして家の中までは入ってこない。つまり子供が大人と接する機会が少なくなったのです。塾の先生は安心して子供と接することのできる大人なのです。また、受験という観点からすると合格という結果も大切ですが、それまでのプロセスで親子がどんな関わり方をするかが問題なのです。受験生の親は３０代後半から４０代だと思いますが、親自身も子供との関わり方がわからない。親の考えはどうしても光の当たる場所を選ぶ傾向になる。特に母親は性能のいいカーナビを与えようとしている。大切なことはカーナビが壊れたらそこでどうするかを考えられる子供を育てなければならないはずです。なのに母親はより性能のいいものを与えようとするだけだから、今の子供はカーナビが壊れたら前に進めない。自分で学ぶ力を育てなければならないのです。また大手塾では入試用に問題を解く訓練をするけれども、その結果辞書の引き方がわからない子、人に伝えるように話せない子、勉強の仕方のわからない子などが出てきています。塾は学習の仕方や学び方を教えなければなりません。さらに最近では子供が自分で遊ぶ力がなくなったように思います。何もない空き地、何も決まっていない時間が創造性を生むのです。その意味では塾も子供の自主性を育てる場を提供できるところになってほしいものです。

３．国や社会にとって塾とは

社会の一員として責務を果たせる人間をつくる場といえると思います。学校では色々なしがらみがあってこれがなかなか難しいものです。例えば会社でも発言を控えざるを得ない時も多くあります。私などは安田研を始めたとき金なし、従業員なし、後発でお客なしでとても大変でした。でもその分ここでのびのびと生きていくためには安田色を出す必要があります。今は独りよがりになる危険性を持ちながらもやりたいことをやることができます。その意味では安田という人間を客観的にみる視点が必要ですが。塾の先生もこれと同じことではないでしょうか。しがらみのない塾の先生の言葉が今必要な時です。個として確立している先生が自分を出していく。これが大切なことでしょう。これがないと何か事があったとき、国民全員が一斉に同じ方向に流れてしまいます。危険なことです。塾は社会のニーズに合わせるのではなく個々の塾の旗を立てるべきでしょう。

＜特集１　教育アドバイザーからの提言（インタビュー）　その３＞

百瀬　昭次　氏（百瀬教育研究所代表）

百瀬　昭次（ももせ　あきつぐ）氏のプロフィール

1937 年長野県松本市生まれ。1960 年北海道大学理学部物理学科卒業。日本製鋼所入社。1968 年鋼の凝固の研究で日本鉄鋼協会「俵論文賞」を受賞するが、教育の荒廃に着目し、教育活動に入るため退社。

1976 年百瀬創造教育研究所を設立。現在「ももせ方式」を提唱し、教育委員会、学校、塾他各種団体と協力しながら、「教育改革」ならびに青少年の育成を中心に「21 世紀を担う人材づくり」の推進キャンペーンを展開。

教職員、児童、生徒、親、一般企業人を対象に講演、セミナーでも活躍。著書多数。「杉並区教育を変える会」顧問。

１．先生は塾必要論をおっしゃいますがその理由は

塾は江戸時代から人材を育ててきました。以下に人材を育てるかというのは学校も塾も同じこと。人間教育ができるのであればどこでやっても同じこと。人としての基本トレーニングをしっかりやっておくと将来につながります。いい種をまけばいい将来につながるのです。塾では社会に必要な人材を育てるという役割があります。

２．今の学校教育をどう思いますか。

子供というのはその自尊心が確立すればおのずと教科指導ができるのです。将来を担う子供をいかに育てるかという視点を持って行われるのが教育です。ところが今の学校では多くの場合それがなされていない。目的意識をどこに置くかが大切なのです。教師とは次世代の人材を育てるという最高の仕事です。したがってそれに見合った生き方を探求すべきです。人間の黄金期を育てる（関わる）のは最高の幸せです。教科指導と人間教育は車の両輪のようなものですが、今は両方ダメになっています。塾は入試という目的があって取り組む。そのために人間教育をする。本来の意味の人間教育を自在にできるのが塾です。

３．どういう教育の仕方が望ましいのでしょうか

人間関係の原点が利他であるべきなのに利己になっていることが問題。そのためにはいかに信望のある先生を育てるか、これは学校でも塾でも同じこと。また、教科書の最大の欠陥は寄せ集めの文章を細切れにして読ませていること。共通したベースを持っている人の作品を並べることが大切。しかも細切れでない一貫した文章を通して読ませることが大切です。原理原則にかなったことをするということです。一冊の本を読み切ることが大切なのです。もちろん教師は子供の黄金期という大事な時期にかかわっているという意識は常に必要です。そしてそのことは親にも言えることです。親は何かに取り組む姿勢を子供に示すべきです。その意味では仕事を成し遂げる姿勢をしっかり見せることが大切ですね。親の役割は重大です。ですから親も子供の教育に関する本を一冊マスターしなければならないのです。モノづくりは人づくりでもあります。例えば鉄鋼を作るとき素材を製錬して固めるわけですが、材料の成分をそろえる、不純物を取り除くなどどれだけいい素材をそろえるかが大切です。原石をどうするかが大事なのです。このことは人間も同じです。人間の場合は胎児教育です。胎児の間に母親がしっかり語りかけることです。そうでなければ母親が一冊の本をしっかり音読するだけでもいいのです。人間としてどうあるべきか、何を大切にしなければならないかを書いてある本を読めばいいのです。

４．塾で気になることは。

先生の意識や価値観が問題です。親と子は一対で一人前。先生と生徒も一対で一人前なのです。自分だけがあるわけではないのです。相手があってこその自分です。会社も同じことです。社員が育たなければ会社も育ちません。どうやって人を育てるか、それを意識しているかが問題です。

５．理想的な塾とは。そのために塾に望むこととは。

人間としての生き方、人間としてのプロ意識（人間としてのプライド、持ち味）を持たせる塾です。自分の存在価値をわからせる塾です。たとえ学校でやる人間教育が充実したものになっても、塾はもっと充実した人間教育ができるはず。それが塾の使命でもあります。

また夢と希望を持つことを基本とした将来を担う人材を作る塾であってほしい。今の勉強では将来身につくことは何もない。漠然としていてすぐに忘れてしまうものばか

り。たとえば徹底的に書きまくるとか思いつくことをどんどん書いていくということをやらせるべき。書いている途中で自分が考えていることが自然に出てくるものです。いかに創意工夫をさせるか、いかに知的好奇心を持たせるかが問題なのです。すべての成功はそこから始まっています。

また、子供に必要なことは自尊心を確立させることです。スタンダールは「人生におけるあらゆる不幸は自分自身に対する間違えた考え方をしていることから起こるのだ」と言っています。

塾も進化の時代に入ってきました。２０００年に一度のチャンス到来です。いい時代になってきました。これまでの「ダメ」が「いい」になる時代、これまで「ない」と思っていたものが実は「ある」といえる時代です。

なお、百瀬先生へのお問い合わせは下記へ

****

百瀬創造教育研究所

代表者　：　百瀬 昭次

〒168-0063　東京都杉並区和泉 4-48-14-301

TEL：03-3316-1433　FAX：03-3316-1433

e-mail：info@momose-souzou.com

ホームページ：http://www.momose-souzou.com

****

＜私学及び塾関連業者の方々からの提言＞

ＪＫＫ「響」アンケート

ＪＫＫ「響」編集委員会

【質問事項】

１、今の社会における学習塾の現状についてお尋ねいたします。（１つだけお選びください）
①必要ない　②已むを得ず必要　③条件付きで必要　④必要不可欠

２、上で③とした方、その条件とは？

３、塾へのＤＭについてお尋ねいたします。（およその数字で結構です）
① ＤＭの戻り率は現在およそ何％位ですか
② ５年前 or10 年前（どちらかに○）はおよそ何％位でしたか
③新規塾へのＤＭ発送率はおよそ何％位ですか

４、あなたが感じる、困った（あるいは問題があると思われる）塾（または塾長）とは？

５、塾を訪れて一番目につくのはどんなところか

６、あなたが親なら塾選びにどんなところに注目しますか、記号を○で囲んでください（複数回答可）
①　合格実績　②　教育方針　③　周囲の環境　④　設備　⑤通塾時間
⑥　授業料　⑦ 先生の質や人柄　⑧　塾の規模　⑨　個別か集団か

７、これはと思う塾、我が子を通わせたいと思う塾はどんな塾？（出来るだけ具体的に）

８、これから望まれる塾、これから伸びる塾とは？

私学の先生方、塾関連業者の方々にアンケートをお願いいたしました。

＜私学　Ａ＞

１、　③条件付きで必要

２、　学校だけでは学びきれないものを学ぶことができる場であること。

３、　（未記入）

４、　特定の大学・高校・中学と強い関係があり、優先入学できるといった嘘で保護者を騙す。（最近はほとんどなくなりましたが…）入塾した後に、チラシには書いてない費用を請求される。経験不足で教える技量が低い学生講師の授業が多い。

５、　入口周辺の自転車がきちんと整理されているか。
ポスターは貼ってあるか。（新しいもの）受付の対応は明るく丁寧か。

７、　この塾で英語を習うと確実に伸びるといった独自の教育システムと実績を持っており、先生によってシステムが異なったり、授業の質が低下したりしないこと。授業料が適正であること。

８、　学校は文科省のしばりがあり、独自の教育とは言っても限界がある。塾はしばりがない分、本来学ばなければならないが学校では学びきれない（または学ぶ時間が足りない）ところを鍛えてくれる塾は社会から必要とされると思う。（例）生きた英語を身につける。数学などの思考力を身につける。学んだ事を人に伝える力を伸ばす。

＜私学　Ｂ＞

１、　③条件付きで必要
２、　学校で指導が不足している場合
３、　（未記入）
４、　学校が駄目だから塾がやってやるというような塾主導の考え方を持った塾
５、　生活指導面もしっかり指導しているかどうかなど。
（靴が揃っている。整理整頓されているなど）
６、　①合格実績、②教育方針、③周囲の環境、④設備、⑤通塾時間、
⑥授業料　⑦先生の質や人柄
７、　先生の人柄、評判
８、　４のような考え方ではなく、社会全体の中で大人として生徒を成長させられる塾。

＜私学　Ｃ＞

１、　④必要不可欠
３、　①およそ５％、②5 年前、およそ３％、③およそ２％
４、　塾生がいないと思われるのに塾対象説明会に参加したり、明らかにお土産目当てで参加される塾がみられる。
５、　合格校の状況（地域や驚愕・男子・女子などの学校区分）
　受付まわり、掲示物の貼り方など、校舎の美的センスなど
６、　②教育方針、⑥授業料、⑦先生の質や人柄
７、　塾長及び各講師が生徒一人ひとりの成績だけでなく、人間育成させる教

育方針を持ち熱心に指導する塾経営を華案が得ている塾。

８、　保護者は、学校が生活指導、子供の成長を考えた指導ができていないことに不安を感じています。これからの塾は成績向上・合格実績は勿論のこと、生活指導・人間育成を考えた教育方針を持って指導・経営を考えなければ保護者から選ばれる塾にならなくなっていくと考える。

＜私学　Ｄ＞

１、　③条件付きで必要

２、　現在の日本にある塾の位置づけ（進学実績偏重）でない塾のあり方。

３、　①およそ１％、②（未記入）、③およそ５％

４、　日本の教育システムも問題点に気がついていない、研究していない塾（長）。子供たちに知識の詰め込みを行い、志望校合格のみの目的の塾。

５、　塾の看板、塾の外の入り口、教室の雰囲気で質問４がクリアされているかどうか。塾指導者との会話の内容（教育に対する志があるかないか）。

６、　②教育方針、⑤通塾時間、⑥授業料、⑦先生の質や人柄、
⑨個別か集団か

７、　日頃から学ぶ姿勢があり、日々教育改善の努力を怠らない塾指導者のいる塾。日本の教育・世界の教育を良くしたいという志を持ち、良くするための具体的な行動をとっている塾。

８、　子ども達が豊かな生き方、考える力を身につけるための教育を考えたときに、大学進学のための教育から脱却しなければならないと考えます。そのときの塾の位置づけが見えてこないのでご一緒に考えさせてください。

＜私学　Ｅ＞

１、　④必要不可欠

２、　子どもの能力・関心は多様。現在の日本の公教育だけではフォロー出来ない。

３、　全国 600 以上の塾へ送付しているのが戻るのは住所変更の数件のみ。

４、　特に感じない。情報を把握し、対応も洗練されている先生が多い。

５、　挨拶（子どもや職員の方と）、整理整頓、送付したポスターや資料が活用されているかなど。

６、　①合格実績、②教育方針、⑨個別か集団か

７、　確かな教育方針を持つ、生徒の才能を見抜く優れた先生のいる塾。

８、　塾は勉強（知）のためだけの場でなく、挨拶など（徳）も重んじて人格的成長も尊重すること。視野を広げる、つまり知識獲得と生き方を考える場所となること。

＜私学　Ｆ＞

１、　④必要不可欠

３、　①およそ１４％、②５年前、およそ２５％、③　？

４、　塾対象の説明会に来校されて、「本当に塾生さんはいるのかな？」と思う事があります。

５、　本棚のテキスト類、生徒さんの様子

６、　①合格実績、②教育方針、⑥授業料、⑦先生の質や人柄

７、　先生が熱心

８、　地域の口コミで生徒が集まる塾。

＜私学　Ｇ＞

１、　必要不可欠

３、　（未記入）

４、　子どもが質問しずらい塾。子供に注意する際に感情的で子どもがなぜ注意されたのか説明もしていただけない塾

５、　入口周辺の様子。生徒たちの様子や先生方、事務の方の表情

６、　①合格実績、②教育方針、③周囲の環境、⑦先生の質や人柄、
⑨個別か集団か

７、　子供の現時点での成長を考えていただき、無理なく可能性を伸ばしてい

ただけるような助言や援助を具体的にしていただけるような塾。

８、　教育産業の中においても特に学校教育との接点が大きいと考えられるので、将来の日本の社会を支え、豊かな感情と広い視野を育ててくれるような塾。

＜私学　H＞

１、　必要不可欠

３、　（未記入）

４、　横柄な塾。偏差値重視で一人一人の塾生のことを大切にしていない塾。

５、　先生方の様子（気持ちよく挨拶して下さったり、生徒達と丁寧に関わっている様子
を拝見すると好印象です）

６、　③周囲の環境、⑥授業料、⑦先生の質や人柄、⑨個別か集団か

７、　子ども達への教育を単に成績をあげるためのマニュアル的に考えているのではなく、もっと深く考えている塾。人間的な成長という観点でもみてくれる塾

８、　個別に一人一人の成長やニーズに対応できる塾ではないでしょうか。

＜私学　Ｉ＞

１～３、（未記入）

４、　話題が入試基準のみ、あるいは学校についての情報がステレオタイプの人
（最新の情報に疎い人）

５、　窓口や担当者の対応。指導でお忙しいのは分かるが・・・。

６、　②教育方針、⑥授業料、⑦先生の質や人柄、⑨個別か集団か

７、　強烈な個性（指導力と情熱）を持った塾長が統率する塾

８、　志望校と生徒とのマッチングを丁寧に指導できる塾。
「塾」とは究極の個別指導であるべきではないでしょうか。

＜私学　H＞

１、　④必要不可欠

３、　①およそ０．６%、②およそ３．３%、③　およそ１００%

４、　態度が大きく、挨拶に来ないと催促され、すぐに来ないと、いう塾。つくば市内では（塾は）約６５塾ありますが、そういう塾が３塾ほどあり、対応しています。時に中３生が少なく、通塾生を見かけないところが多いようです。

５、　通塾生の靴のだらしなさが一番目立ちます。また机の上に飲み物を置いて学習している塾が若干見受けられます。

６、　②教育方針、⑦先生の質や人柄、⑨個別か集団か

７、　①親子ともに進路相談をしてくれる塾　②通塾を卒業（進学）しても相談や報告に行ける塾　③依頼心を取り除き自立させて自主的に学ばさせてくれる塾　④進路決定後も継続して学習に取り組んでくれる塾（入学準備）

８、　①生徒の学力如何を見抜き的確に伸ばしてくれる塾　②人間教育をしてくれる塾　③面倒見の良い塾（中学校にはあまり期待できないから？）

＜塾関連業者 A＞

１、　④必要不可欠

３、　（未記入）

４、　自分の理念や信念を万物共通理念だと錯覚し、それを保護者や生徒達に押しつけるだけの塾（長）。

５、　スタッフの挨拶の元気さ（ていねいさ）

６、　②教育方針、⑦先生の質や人柄

７、　スタッフが一丸となって子ども達の精神状況や学習状況を細かく把握し、何でも相談したと本気で思える塾。

８、　学習はもとより、心のケアをしてくれる塾。さらにはヒューマンスキルも同時に高められる塾。

＜塾関連業者 B＞

１、　④必要不可欠

３、　①およそ５％　　②およそ５％　　③　０％

４、　（未記入）

５、　受付の美化。　講師の態度。

６、　⑦先生の質や人柄

７、８、　（未記入）

＜塾関連業者 Ｃ＞

１、　④必要不可欠

３、　①およそ２０％　　②１０年前、およそ１５％　　③　（未記入）

４、　取材時間に伺ったのにまだ塾に来られていないことが過去に何度かありました。

また授業時間ギリギリに塾長が来られるところもあり、これは問題かな？

５、　教室内がきれいに掃除されているか、先生方の机の上が整理されているかです。

６、　②教育方針　　⑤通塾時間　　⑥授業料　　⑦先生の質や人柄

７、　最後まで（成績が少しでも上がるように）あきらめずに生徒に対応してくれる塾。いくら教えても成績が伸びない・・・とあきらめてしまう先生はダメですね。

８、　７、で答えたような内容。　塾の方針が“ブレ”ない塾。　信頼できる塾。

＜塾関連業者 Ｄ＞

１、　④必要不可欠

３、　①およそ３％、②１０年前、およそ１％、③およそ２％

４、　授業中に騒いでいる子を注意せず、まじめな子が嫌になってやめてしまう塾。教師の力量が明らかに不足している塾。

５、　生徒や先生が明るくはっきりと挨拶を交わしているかどうか。

清潔感のある雰囲気が漂っているか、雑然としているか、明るいか暗いか。

６、　（未記入）

７、　帰宅してから塾の先生や授業のことを楽しそうに子供が話していれば、かなり良い塾だと思います。

８、　短期的な目標（例えば中間・期末テストの結果）に偏って浅い学習しか施さないのではなく、大学入試までを見据えて骨太の指導を行い、自分で、自宅の机で勉強する習慣が身につけられる様な塾は伸びると思います。

＜塾関連業者　Ｅ＞

１、　④必要不可欠

３、　①およそ５％　　②１０年前、およそ３％　　③　およそ１０％

４、　時間管理、経理関係がちゃんとしていない。
昔のままの指導内容、形態に固執している。

５、　教室がきれいかどうか。生徒が学習するのに最適な設備環境が整っているかどうか。

６、　②教育方針、④設備、⑦先生の質や人柄

７、　勉強だけでなく、生活や躾の指導もしっかりしている塾。

８、　生徒のレベル、層に合った指導、カリキュラムを提案できる塾。
都立であれば都立のみといったように明確にターゲット層を絞った塾。

＜塾関連業者　Ｆ＞

１、　②やむを得ず必要

３、　（未記入）

４、　学校主催の塾対象説明会で御土産や飲食、交通費を目的に参加する塾や塾を称した、たかり屋。

５、　滅多に行きませんが、机や壁の落書きは気になります。学校も同様ですが、授業に魅力があったり、工夫があったりすれば、まずないだろうと思っています。

６、　①合格実績、⑤通塾時間、⑥授業料、⑦先生の質や人柄

７、　小規模でも高い合格実績を出している塾には敬意を持ちます。私にこどもがいないので、実感はありませんが、指導される先生の授業を拝見し、こどもとの相性を判断した上で、できれば、そのような先生に教われる塾を勧めます。ただ、どこかオススメはない？と訊かれたら、知っている先生のいらっしゃるところを紹介します。でも、それでもうまくいくとは限らない、というのが実感です。

８、　通塾費が安くてこどもが楽しく通えて成績を大きく伸ばしてくれる塾。いつでも変わりはないと思います。ただ、塾は世の中に存在を望まれるものではないようにも思います。以前に比べると、塾を一流企業のひとつのように捉えて就職している新卒の学生が増えているらしい状況には違和感を持ちます。これから伸びる塾は公立中高一貫校の合格実績の高いところでしょう。塾全体がそのようにシフトすべき、と思っているふしがあるので誘導されるように感じます。同様の理由で、高校入試では国立私立難関より公立進学重点校の合格実績の高いところ。それに学力の低い生徒を伸ばすところとの二極に分かれる気もします。

＜塾関連業者　G＞

１、　④必要不可欠

３、　（未記入）

４、　・先生方の熱意が感じられない塾
・未だに小学生に睡眠時間を削ってガンバレと言っている塾
・室内空気が汚れていると感じられる塾

５、　・生徒の気力のなさ
・親のクレーマー化
・偏差値の物神化

６、　⑦先生の質や人柄

７、　・わが子の向学心を呼び起こした塾　　理想塾（志木、新座）
・発達障害に理解のある塾　　クオレ学習塾（巣鴨）
・わからないところからさかのぼって教える塾　　池袋理数セミナー

８、　師と友に相互によい影響を与えられた塾

＜塾関連業者 Ｈ＞

１、 ④必要不可欠

３、 ①およそ５％　 ②５年前、およそ５％　 ③ およそ１５％

４、 自分の過去の実績ばかりを話す。

過去の成功体験に固執して、現在の成功例を学習しない。

５、 最初に対応していただいた方の表情や対応。

６、 ①合格実績、 ②教育方針、 ⑦先生の質や人柄

７、 第一志望校の合格率が高い塾。

明確な教育理念を持って経営している塾。

子どもの性格や能力にあわせたアドバイスがもらえる塾

８、 先生に活気があること。人材育成にも力を入れていること。

新しいやり方や商品などにもアンテナを立てて、必要に応じて取り入れる勇気を持つこと。

＜塾関連業者 Ｉ＞

１、 ④必要不可欠

３、 （未記入）

４、 経営ばかりを主に考えている塾、生徒のことは二の次・・・

難しいですが、教育と経営のバランスでしょうか。

５、 受付や教室、職員室が整理整頓されているかが気になります。

６、 ①合格実績、 ②教育方針、⑤通塾時間、⑥授業料、 ⑦先生の質や人柄

７、 子供の性格などに応じて指導してくれる塾

８、 生徒、保護者から感謝される塾

＜特集１　その３　安田氏の提言より＞

２００７年　塾ジャーナル新年号より

「自分の影響力を活かしてほしい」

安田教育研究所
代表　安田　理

社会性を育てることにもかかわって

塾の先生と話をしていると、塾ないし自分の仕事の範疇について、二通りの考え方をする人がいる。

一つは、塾の仕事はあくまで学力を付けること、受験塾なら合格させること。それ以外までやろうとするの「おこがましい」と考える先生だ。確かに、一番の仕事はこれであろう。これがまともにできない塾であれば、たちまちお金を出している保護者から見捨てられてしまうであろう。また、週２回から３、４回、それも２時間程度であれば、学習以外にまではとても手が回らないというのも現実である。

もう一つは、勉強の合間に勉強以外の話をしたり、休日や夏休みに野外に連れ出すといったイベントをしたりすることで、子どもの全人格的な成長にかかわろうとする先生だ。塾の仕事のメインがこれというわけではなく、塾長個人の願望・資質による部分が大きいのであるが。当然、後者は受験塾ではなく補習塾に多い。

私も最近までは、塾は前者をしっかりやることこそが本分で、それでいいと思っていた。

が、このところあまりにも親が子どものしつけができていない、親がわが子にきちんと話ができないでいるので、塾の先生を頼りにしたくなってきた。塾に来ている生徒はまだいい方であろうが、それでも先生方もこのことは実感しているのではないだろうか。

話し方ができていない、人の話を聞けない、室内を汚す、ものを大切にしない、疲れている、体がシャンとしていない……一昔前の生徒と比べると愕然とするくらいいろいろな面で心配ではないだろうか。

それでも、彼らの周りには注意してくれる人がいなくなっているのだ。

そもそもいまの家庭は、おばあさんの時代と比べたら格段に家に他人を入れなくなっている。保険や化粧品などのセールスの人は勿論、近所の人を家に上げることもしなくなった。お父さんが会社の人を連れ帰ることもなくなった、親戚との行き来もず

いぶん少なくなっている。そんな状態である。家によその大人が、親戚・近所の子が、来なくなっているのだから、いまの子が同年代以外の人とどう話したらいいか、どう接したらいいか、わからなくなっているのも当たり前の話である。当然、親に代わって話を聞いてくれる、注意してくれるおじさん、おばさんもいない。

そうした時代に、生徒が接する数少ない大人が塾の先生なのである。それだけに塾の先生の影響力はとても大きい。このことから、私は塾の先生にその影響力を行使していただきたいと思うのである。

20 年後の社会を考えたとき、生徒たちにどんな大人になってもらいたいのか。それは単にその子が社会的に成功するというだけではなく、よりよい社会になっていくためには一人ひとりが人と共に生きられる、また社会に対して責任を果たすように育てることが必要と思うのである。

親を焦らせないで

昨年あたりから、子育て・中学受験を扱った雑誌が数多く刊行されている。それらの特集を読むと、中学受験は「家中で闘うもの」、「中学受験こそ父親の出番」、さらには「間取りで合格が決まる」……といった具合で、中学受験に向かう親たちの熱は一段とヒートアップしている。投下されるお金・労力・時間もそれぞれが一段と増加している。人によっては、中学受験させなければ、わが子は人生の「負け組」になるかのような悲壮感すら漂うほどである。

そんな心理状態であるから、塾の先生が「お子さんは〇〇科が弱点ですね。これを克服しないと合格ラインには届きませんね。」と言えば、すぐ個別指導塾へ入れるか家庭教師をつける。「学校から帰ってから塾に来るまでの時間をどう使うかが合否を分けますよ」と言えば、帰宅するのを待ち構えて一休みする時間も与えず用意したプリントをやらせる。「来年は史上最高の受験率になる。全滅組が続出する。」と言えば、帰宅した父親が付きっ切りで深夜まで勉強をみる。

私のところには、受験前の相談だけでなく、入学後の相談も持ち込まれる。最近気になるのは、長期の受験生活の途中で戦線離脱してしまう子ども、親子関係が壊れてしまう家族、何でもかんでもやってもらうことになれて自分で決められない子ども、せっかく合格した中学なのにたちまち不登校になるケース……そうしたことが増えていることだ。

親の必死さに子どもがついていけない。子どももいつの間にか当初の前向きだった気持ちが「ただ勉強がシンドイ」に変わってしまう。受験生活の伴走者がいつの間に

か「鬼」になって変わってしまう。

最近も子どもの口からこんな言葉を聞いた。「合格しても、ぼくは絶対ママを許さない。」

受験に成功しても、子育てに失敗

これが実に多くなっている。

将来の展望が開けず、なんとなくせちがらく生きにくくなっている社会環境。いまさら塾の先生が奮起を促さなくても、既に親たちは子どもの将来に十分危機感を持っている。むしろ逆に余裕がなくなっている。長い目で子どもの成長を見られなくなっている。

「なんとしても合格させなければ」、「合格すれば何事も解決する」……そんなふうに思っている親が多い。

だからこそ塾の先生には、親を煽らないこと、焦らせないことをしてほしい。ドンと構えさせて欲しい。そうしないと、つぶれる子がドンドン出てしまう。親子関係がおかしくなる家庭が目に見えて増えてしまう。

是非、長い目で見て子どもの成長につながることをアドバイスしていただきたい。

自分の目で各学校の良さを発見して

学校が受験生を選ぶ時代から、受験生が学校を選ぶ「逆受験戦争時代」になり、学校は受験生を抱えている塾の意見・反応に敏感にならざるを得なくなっている。

多くの塾の先生が、学校の先生の訪問を受けたり、学校に出向いたりしていることと思う。「お客様」扱いをされたりしているのではないだろうか。また、アンケートに感想を書いたり、口頭で意見を求められたりすることも多いと思う。

私もそうしたアンケートの文面を見たり、塾の先生方と一緒に学校の先生と懇談したりする機会が結構ある。本当に真摯に学校側に改善すべきところを指摘しているものがあると、ここまで考えてくれているのだと頭が下がる。が、中には、「何様のつもりだ」と思ってしまう文面もある。懇談会でも横柄な口の利き方をする人がいる。「カンチガイ」人間がいることがとても気になる。

塾の先生の発言で近頃多いものが、「こんな進路実績ではとても勧められないね。」といった類のものだ。前年春の大学合格実績が即翌年の応募者数に比例する時代であってみれば、進路実績が出ていない学校は保護者に勧めにくいのは事実だ。私も一概

にこれを否定するわけではない。

が、学校はそんなことは先刻承知である。努力しているが、生徒のレベルからいって簡単には結果が出ないのだ。わかりきったことを指摘するのでなく、教科の専門家として具体的なアドバイス、提案をしてほしいものである。

また、塾の先生にお願いしたいのは、先に述べたような時代であるからこそ、各学校の持っている良さを自分の目で発見し、それを保護者に伝えていただきたいのである。それができないで、あとで文句を言われないように、大学合格実績と偏差値とで無難な学校を選んで勧めているのであれば、プロとは言えないのではないか。

数字による指導だったら新米でもできる。預かっている子どもの学力特性、性格、そうしたものを踏まえた指導ができてこそプロではないのか。

良さを発見する眼力を養うとともに、見つけた良さを学校に伝え、各学校の独自性を育てることにつなげてほしい。

そうしたことを塾の先生がしていかなかったら、ここ１、２年きわめて盛んになったマスコミ報道での「大学合格ランキング」と「偏差値」といった数字が指標の学校選択にますますなってしまう。

受験生とも学校とも近いところにいる塾の先生だからこそ、是非こうした役割を果たしていただきたいと思うのである。

２００８年　塾ジャーナル新年号より

『「コンビニ」経営から見た塾 』

安田教育研究所
代表　安田　理

中３生の卒業論文

ある私学から中学生の卒業論文集が送られてきた。中３生全員のものが掲載されている分厚いものである。最初の方に優秀賞をもらった作品が載っている。その一つに、「生活に溶け込むコンビニエンス・ストアを考える」というものがあった。

私自身、コンビニは毎日のように利用しているので、関心があって読んでみた。読みやすく、おもしろかった。何より、日頃から漠然と思っていたことが、この卒論を読んだことで頭の中で整理された。

この卒論では、コンビニの抱える様々な問題点（コンビニ食の人体への影響、「賞味期限」切れで廃棄される膨大なゴミの量、24 時間営業にともなう労働問題、商品を頻繁に入れ替えるための物流による二酸化炭素排出など）も指摘されている。がここでは、そうしたことには踏み込まず、「ビジネスとしてのコンビニ経営から塾を考える」という視点で話を進めてみたい（普通は対比として設定することなどありえない関係だから、逆に発見することもあるのではないかと思う）。

また、この卒論に触発されて、セブン&アイ・ホールディングスの鈴木敏文 CEO の書かれたものにまで手を出してみた。卒論と鈴木敏文 CEO の著作から得られたことを私なりに整理してみよう。

コンビニの特性は文字通り「便利性」

最初にコンビニの特性を整理してみる。コンビニは、言うまでもなく「コンビニエンス・ストア」の略である。「コンビニエンス」つまり「便利性」を追求した店である。その「便利性」とはどこにあるのか。

① 24 時間 365 日営業という「時間的便利性」
② 家の近く、オフィスの近く、通勤・通学途中の道筋にあるという「空間的便利性」
③ 調理する必要がなくすぐ食べられる食品、急に必要になりがちな日用品といった「商品的便利性」

④ 気楽に入れる、待たされないという「購買行動面での便利性」

⑤ 銀行振込み、宅配便の受け付け、チケットの予約といった各種サービスが 1 箇所で済むという、待たされる銀行や遠方のチケット売り場に出向かなくていいという「サービス面での便利性」

といったことが挙げられるであろう。

①都合のいい時間帯に学べる、②学校・稽古事の帰りに寄れる、③間近に迫った定期試験・検定対策にも対応、④明るく清潔で安全な教室　といったように考えれば、塾の「便利性」もコンビニと共通なのではないか。

「狭さという制約」がコンビニを性格づける

「便利性」以外の特性で最大のものといえば言うまでもなく店舗の狭さである。この「狭い」という特性から、様々なコンビニならではのビジネス上の工夫が生まれている。

その際たるものが、「単品管理」というビジネスモデルである。「単品管理」とは「商品毎に売れ筋と死に筋をタイムリーに把握し、発注精度を高めること」である。狭いという制約があるがゆえに、「死に筋(売れないもの)を置いておくわけにはいかない、狭い店舗で少しでも売上を伸ばすためには「売れ筋」を切らすわけにもいかないということである。少しちょっと付け加えるならば。鈴木ＣＥＯはこんなことを言っている。「『完売』は『売り手の満足＝客の不満足』である」。

私のオフィスの近くには２軒のセブンイレブンと１軒のファミリーマートと有名チェーンでない１軒の店があり、そのときそのときの行動方向で使い分けている。私がいちばん驚いていることは、セブンイレブンでは２軒とも店員はすべて中国人であることだ（経営者夫婦を除く)。それがあの多種多様で複雑なサービス業務までこなしているのである（寿司をレジに持っていったら、「温めますか」と言われたことがあるが)。仕事のマニュアル化がものすごく徹底している(大手塾のマニュアル化も著しい)。

話が少し横にずれたが、コンビニのもう一つ重要な特性の一つに、置かれている商品は店によってそんなに違わないということがある。飲料類はチェーンが違ってもどこでもほぼ共通。食べ物は仕入先こそ違うが（もちろんチェーンが同じなら一緒である)、お弁当・おむすび・パンといったようにジャンル的には共通している。値段もそれほど差はない。つまり他の小売業態と決定的に違うのが、「価格競争の比重が低い」ということである。

一方塾は、先生方は既に実感しておられるだろうが、このところ塾に通わせられな

い、通わせられても中３の２学期からという家庭が急増している。実は塾はコンビニとは対照的に「価格競争の比重が高い」世界である。

また、コンビニは日本語がたどたどしい中国人ですむことでもわかるように、客への対応が商売の雌雄を決する一般の小売業態からするとこの点でも特殊である。私がそうであるように、このコンビニでなければならないというこだわりは少ない。

この点でも塾はコンビニとはまったく違う。対応がまずければ授業の質がよくてもすぐに退塾してしまう。

塾における制約は「時間」

コンビニは時々刻々のデータから顧客のニーズをつかんでいる。それは、「過去の顧客のデータから明日の顧客のニーズを探る」作業であり、「商品の売れ行き動向だけでなく、その背後の心理を読み解く」作業でもある。

塾も、顧客（塾生・保護者）に日々接している。そうした中で塾生・保護者から発せられた言葉に注目しているであろうか。これらこそ塾生・保護者のニーズを掴み取る最適な材料ではないのか。同じ商品の並ぶコンビニですら、立地が違えばニーズが異なるのである。ましてそれぞれに立地も塾生の学力レベルも様々な塾においては、塾ごとに塾生・保護者のニーズは大きく異なるはずである。受験状況全体の動向でなく、自塾ならではのニーズを的確に捕まえないことには、「明日の顧客」は捕まえられないのではないだろうか。

次に、コンビニにおける「狭さという制約」は、塾においては何かという具合に考えてみた。塾における制約と言えば「時間」ではないだろうか。難関校狙いの進学塾でなければ通塾は週 2 回か 3 回が普通であろう。与えられている時間は 10 時間も 20 時間もあるわけではない。限られた時間をどう有効に使うのかが塾における重要課題なのである。週わずか１桁の時間なのであるから、「死に筋」の授業があっていいわけはない。

コンビニを通して見える大手塾と個人塾の違い

では個人塾の「売れ筋」とは何か。最近の大手塾は、明るい教室、安全な通学路、親切な顧客対応、授業の品質保証、クレーム対応……といった面で企業化がものすごく進んでいる。個人塾が同じ土俵で争っても勝ち目はない。

が、大手塾がこうした企業化を進めざるをえない背景には、正社員・講師が若年で

あり、経験不足であるという弱点が隠れているのである。一人一人の中に長期にわたる指導経験の蓄積がない。そのために塾生一人一人に即した指導ができない、自分自身の経験、言葉では導いていけないのである。

このように考えれば、個人塾は逆に、先生が自分の経験をフルに生かすこと、自分自身の言葉で語ることこそが「売れ筋」なのである。大手塾の若手が伝えられない、子どもの教育に携わることについての「熱い思い」、多くの子どものその後の成長を見てきた経験からの「真摯なアドバイス」、わが子に埋没しがちな親への「広い視野からのアドバイス」…そうしたものこそが財産なのである。

大手塾のチラシのように数字で塾生を獲得するのではなく、自分がこれまで培ってきた「財産」でこそ勝負したい。

こう見てくると、コンビニと大手塾は類似性が高く、個人塾はその対極にあることがわかる。ごくごく簡単なリポートであるが、コンビニを考えることによって、逆に個人塾の特性が明らかになったということで報告させていただいた。

＜特集２　総論＞

「学習塾と行政との関係(接点)について」

京葉学舎(千葉県：千葉市)
ＪＫＫ代表　　皆倉　宣之

学習塾と行政、特に文部科学省（旧文部省）との関係は、ゼロ（塾は眼中に無い亜状態）から敵視へ、そして無視（放任）へ、そして是々非々の関係という流れをみることができる。

学習塾は公教育の隙間をついて竹の子のごとく生まれてきたがゆえに、また、個人が細々と近所の子どもたちを集める程度の規模（寺子屋的）であったがゆえに、当初は行政の目に止まりにくかった面もある。

しかし、高度経済成長期に入り、高校進学率が急上昇するにつれ、また、団塊世代の子どもの数が増えるにつれ高校入試が激化し、「15 の春を泣かすな」という標語が生まれるまでになり、中学浪人の恐れさえ出てきた。そこで引き起こされてきたのが塾通いブームである。

当然塾へ通うには授業料が必要となる。しかし、経済の成長は主婦がパートで一定のお金を稼げる条件をも作り出してくれていた。これが 70 年代である。このころは、まだ塾の影響力は一部にしか及ばず、学校で堂々と業者の模擬テストを行い、その結果で進路先を決めるという構図になっていた。学習塾はそれほど行政に意識されていなかた。

このような状態が一変するのが 80 年代に入ってからである。この年文部省は 9 年ぶりに第 2 回「児童・生徒の学校外学習活動に関する実態調査」(いわゆる「塾実態調査」)に着手するとともに、10 月には学習塾への対応策を検討するため「「児童・生徒の学校学習活動に関する調査・研究協力会議」を発足させた。

86 年 4 月、「塾実態調査」を発表。結果は、小学生 180 万人、中学生 270 万人の計 450 万人が通塾。前回に比べて中学生は 10%増の 49%。小学生の低年齢化が進み、1～3 年生は 9 年間にほぼ倍増した。

通塾の効果を親たちは、「学校の勉強がよくわかるようになった」(37%)、「塾の先生は熱心に教えてくれる」(33%)、「勉強に興味や関心を持つようになった（30%）となっている。

マスコミはこれらから、「公教育のひずみ反映」（日経）とか、「学習塾の学校化が定着」（読売）とか、「飽塾」（朝日）と論じた。

このころ、私立中学受験が急速に高まってきた。理由は、公立中学校におけるいじめや暴力がはびこり、荒れに荒れていたからである。

こういう最中に灘中学合格 NO１を誇るといわれた神戸の浜学園が、「公立学校は子どもをダメにしているから、塾へ通いなさい」という趣旨のチラシを配布し問題化。

ついに文部省は 87 年 1 月 31 日、文部事務次官通達（いわゆる「補習の勧め」通達）を各都道府県知事・教育長宛に発信。

内容は、「学習塾通いに関連して種々の弊害が指摘されているので、それへの対応を積極的に行って欲しい」というものであった。ここに塾との敵対関係が生まれた。

その後、臨教審の答申を受けて新学力観が提起され、学校週 5 日制への意向が始まり、91 年には初めて文部省と学習塾団体との会議が行われた。

このあたりから文部省の対応は、塾の敵対から塾を放任する方向へと舵を切ったといってよい。

そして、99 年の生涯学習審議会の答申に至る。ここではこの答申を巡って、マスコミは「文部省が塾を容認」という風に受け止めるのが多数であった。しかし、文部省は容認するなどとは一言もいってないという態度であるし、塾側としても容認して欲しいなどとは頼んだ覚えは無い。したがって、両者の関係は、是々非々主義の関係にあるといってよい。

その後、200３年の PISA の結果を受けてから、さらには全国学力テストが実施されるようになってから、この是々非々主義は、各地の教育委員会で現実化し、土曜補習や夏期休暇などにおいて塾の学校参入を要請する方向で具体化している。

ただ、この間の学習塾の様変わりも大きい。それは大手塾と中小塾との格差の拡大である。昔のような小さな町の塾は各駅に展開するチェーン塾に淘汰されつつある。行政も大手塾を相手に学校教育に利用できないかを模索しているようである。

＜特集２　その１＞

「学力って何だろう」

イデウスホームスクール（東京都：港区）
進路研代表幹事　　平松　享

「中学のとき、先輩の偏差値はいくつでしたか？」新入生の質問に、私はドキッとしました。他の先生たちも驚いた様子です。私の母校、都立八潮高校の、2 年前の土曜講習開校式でのことです。

八潮高校は、普通科の合格基準では底辺に近い高校。その前年には、入学した生徒の約 2 割が中退、専門学科を含めて、欠員のもっとも多い都立になりました。入試でも 2 年連続して定員割れを起こすなど、募集は悪循環に陥っていました。

卒業以来つながりのなかった私を母校に呼んでくれたのは、06 年 5 月に進路研第 124 回定例会（表題「新しいタイプの高校を点検する」）の講師を務めてくださった、当時、橘高校校長の大室文之先生です。先生は 09 年に八潮に転任されていました。

先生が考えた再建プランのひとつが、学校と塾の教員による「アドバンスシステム」。年間約 30 回の土曜午前に、希望者に向けて、国数英の講義を学校と塾が 1 回ごと、ほぼ交互に行う講習で、10 年度の新入生からスタートします。09 年は、これを柱に募集活動に力を入れました。

狙いは当たり、10 年度の応募者数は３年ぶりに定員を上回りました。「アドバンス」参加希望者は、入学者の 4 分の 1 にあたる 62 人。開校式では、大学に合格した卒業生が自らの体験を語りました（写真）。新入生のキツイ質問は、そのときのものです。

受け入れ側はあわてていました。当初、40 人と見込んで組んだ体制を 60 人に直すのはそう簡単ではありません。参加者のほとんどは中学の国数英の内申が 3 以下。2 や 1 の生徒も大勢います。当然、少人数指導ですが、それには人手が要

ります。でも、お金の目途が立ちません。

思いついたのが学生ボランィアです。早稲田大学で教職のコマを持つ知り合いの先生に頼んで、講義の時間に割り込ませて貰い、募集のＰＲをすることになりました。大室校長に伝えると「私も…」とおっしゃいます。翌週、300 人近い学生の待つ大教室へ 2 人で乗り込みました。

登壇して学生たちの顔をみると、坊っちゃん、嬢ちゃんばかり。「ムラッ」と来て、つい「教員になれたとしても、皆さんが卒業したような結構な学校で教える機会は、当分ないと思うよ」と言ってしまいました。「だから八潮の経験は役に立つ」と分かって欲しかったのですが、その前に、教室の空気が凍りつきました。

続いて大室先生が、交通費も含めてギャラは一切出ないこと、ネクタイ、スーツ着用のこと、茶髪、ピアスは禁止、みなし公務員として守秘義務があることなどの勤務条件を伝えると、学生たちの目から光が消えて行くのが分かりました。私は作戦の失敗を確信しました。

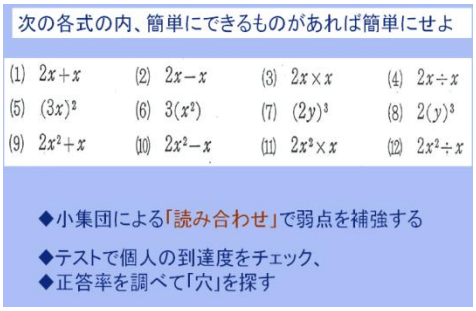
ところが後日、7 人の学生が協力を申し出て来ました。会ってみると、みんな明るい、いい子ばかりで、「八潮で教えたい」という気持ちが溢れています。デビューの日の校長室には、厳しい条件も覚悟のうえという表情が並んで、私は満足でした（写真）。

一方、塾の先生は稲穂塾の平林先生に英語を、ナカジュクの亀井先生に国語を担当して頂き、小生は、友人の元都立高校教員と 2 人で、数学を教えることになりました。時間割は 62 名を 3 クラスに分け、６５分授業で国数英 3 コマ。先生は各回 3 コマの授業を持ちます。初年度は、学力差の大きい数学で、習熟度クラス編成を行いました。

学生はノーギャラでも、塾の先生は有給です。当初、学校は後援会の支援をあてにしていたようですが、直前になって、教育庁の「（前略）外部指導者活用支援事業」に認められ、公費の支給が決まりました。3 コマで 1 万円という、公立としてはなかなかの高給です。ただし、学生に昼食をおごったり、奨学金を出したりして、平林先生も私も、あまり残らなかったようです。

08年度の都立全日制普通科の中退率は約1.6%、八潮の1年生は、その10倍近い割合だった（転校を含む）と思われます。都の調査では、中退者の6割近くが、学業不振や学校生活不適応を理由にあげています。八潮でも、1年の勉強に付いていけない生徒が多かったようです。

数学は、高1で「ゆとり」から一転、教科書がぐんと難しくなります。中学の理解や技能が不十分なところに、高度な内容を無理に詰め込めば、消化不良を起こす場合もあるでしょう。その結果、試験の赤点が重なり、朝起きられず、やがて…。



私は、個々の弱点を補強することが、中退防止につながると考えました。

そこで数学では、左のような問題を5〜6名のグループで読み合わせ、お互いの弱点を確かめる方法を取りました。

多くの場合、他人の弱点は、自分の弱点でもあり、それに気付くことが、苦手意識を取り除く有効な手段となることを、塾での経験から、私は心得ているつもりでした

しかし、はじめから思わぬ障害に出くわしました。計算の答えが分かっても、それを言葉に出来ない生徒がいるのです。外国籍の生徒で、計算力は十分ですが、日本語は苦手です。やむなく、学生ボランティアを一人つけることになりました（写真）。ほかに、緊張感からか、トイレに行ったまま帰らない生徒もいました。

ど真ん中にでかでかと「小学校の問題できません」と書かれた答案を見付けたときも驚きました。授業の前に毎回、オリジナルの計算テストを実施しますが、11月ごろにはそのネタも尽き、苦し紛れに小数の乗徐など、小学校の問題を付け足して出題したときのことです。この生徒は、同時に出題した中学や高校の問題は、ほぼ正解しています。

私は混乱しました。小学校の算数ができなくても高校の数学は出来る、などということがありうるだろうか。その後、この生徒は学校の成績も非常に優秀であることが分かりました。

「学力って何だろう」。私はいま、あらためて考え始めたところです。

＜特集２　その２＞

「一期一会の授業」

神保町セミナー（東京都：千代田区）
種村　洋

題名も作者も忘れましたが、２０代で読んだ小説の中に「頭のまわりのハエを追え」というセリフがあり、私はこのセリフがなぜか気に入り「澄んだ目でものを見よ」と自己流の解釈をしていました。

都立八潮高校のアドバンスシステム講師を引き受けたのが昨年３月。騒然とした日々、テレビでは金子みすゞの「こだまでしょうか」が静かに流れてました。

私が担当したのは高１、高２の英語、隔週土曜の午前に６５分授業を３コマ、高２は志望に応じ文系、理数のコース編成でしたが、英語科では後にこのワクをはずし、両学年とも学力別クラス分けを実施、ボランティアのサポートにも助けられ少人数でのグループ指導も可能となりました。私は比較的基礎学力の安定した、その意味ではあまり手のかからないクラスを受け持つことになりました。しかし、この時点で、予想を超えた高いハードルが待ち受けていようとは思いもよりませんでした。

生徒からの自主登録による講座にもかかわらず、登録生全員がそろうことは一度もなく遅刻や早退、モノ忘れが目立ち、加えて授業中の私語や姿勢の悪さも気になりました。どうやら学力以前に毎日の生活態度にも問題があるようで、悲しいかなダラダラとした印象ばかりが目についてピリッとした緊張感が伝わってこないのです。宿題などもほとんどが梨のつぶ手で、当初描いていた設計図はたちまちにして白紙と化し、大幅な手直しを迫られました。夏休みを過ぎ二学期に入ると学校行事との兼ね合いもあって一段と空席が目立つようになり、こちらの思いとは裏腹に暗礁に乗り上げてしまった感をぬぐえませんでした。

ところが､期せずしてこの厳しい状況がその後の転機を促すことになるのです。私の意識にも変化が生れました。長年塾で生きてきた私は、一人でも生徒が休まないように、少しでも学習成果が上がるように、先々の大学受験にも十分対処できるように……こんな欲ばったことばかりを念頭にそれまでの指導にあたっていたのです。

私はリスクを承知の上で、考えを切りかえました。指導効率や授業内容の継続を断ち、誰がいつ参加してもいいような一回限りで完結する授業を組み立てるこ

とにしたのです。その都度、出席数もメンバーも異なるうえ、次回に出席する保証もないのであれば、その場限りの、いわば“一期一会の授業”を目ざすことにしたのです。

幸いにも以降回を重ねるにつれ出席数も安定し、顔なじみも増え、一部からは「これから英語をがんばるぞ」との殊勝な声も聞こえてきました。残念ながら、この手前で私の手から漏れてしまった生徒の存在を否定できません。塾の論理からすれば生徒数の確保もおぼつかず、完全に失格です。

しかし一方で、生徒数にこだわらず授業内容一本に絞りきれるこの恵まれた環境での指導を体験し、私は「教育としての英語」を強く意識するようにもなりました。

今振り返ると、教える立場の私が「教える」ことよりも「学ぶ」ことを痛感した一年でした。しかし、同時にこんなことは私の中で最初からわかっていたはずでした。それなのに頭のまわりのハエを追いはらうことができずにだいぶ遠回りをしてしまったそうです。

４月１４日､遅咲きの桜が舞い散る中で､アドバンスシステムも３年目を迎え、全学年が一同に会し今年度の開講式が行われました。会場の受付あたりでは新高３生の一団が下級生の世話で忙しそうにしていました。よく見ると全員が顔見知りの懐かしい面々でした。「そうか、君達、今年もアドバンスに登録したんだな。またがんばろうな･･･」　そんな感傷にひたりながら､八潮のアドバンス講師を引き受けて本当によかったとの思いにつつまれました。

＜特集２　その３＞

「共栄スーパー学習ジムについて」

－校内塾　講師として－

ハマ塾（東京都:渋谷区）
濱　　実

私、濱は渋谷と駒込とこれからお話しするお花茶屋の 3 箇所で塾を経営しています。お花茶屋はスーパー学習ジムという名前で 6 年間、共栄学園の中で続けました。昨年 3 月の大震災を受け、「学校の教員以外が授業をしている間に、万一震災が起きた場合、学校として責任がもてない。」という理事会決定がなされ、今年 3 月一杯で学校内での授業は終了しました。

スーパー学習ジムは葛飾区お花茶屋にある共栄学園の中にあった学習塾です。学校の教室を使い、コンピューターも、コピーもコピー用紙までも学校の施設は何でも使えました。施設使用料は月額 1 万円。生徒数に関係なく 1 万円のみです。

学校内に塾があるメリットは、まず第一に、塾の月謝が安く抑えられるということです。私の場合、渋谷、駒込教室の 45%の金額でした。経済的に余裕が無い家庭の生徒にも塾に通えるということです。

次に、通塾時間が要らないということです。1 日の時間を有効に使え、通塾時の誘惑や危険を回避できるのです。

第 3 に部活との両立です。私の場合、3 時 30 分から 6 時 30 分までの間に、勝手に来て、自分で時間の管理をし、勝手に帰るという方式にしました。初めは通常の塾のように時間を決めクラス授業風にやっていたのですが、生徒から学校の授業の質問が多く、結果的に、塾のカリキュラム 3 割、質問と学校の課題 7 割という風になり、部活の関係で時間もフレキシブルになっていきました。6 年間かけてこういう形態になってしまったのです。生徒にとってはこの形が一番いいようでした。

決められた科目以外の質問にも対応しました。また、入試は勿論、色々な話もしました。これは塾なら普通のことで、学校内にあることのメリットではないかもしれませんが、ひょっとしたら経済的に塾に通えない生徒が塾に居ると言うことを考慮すれば学校内でのメリットと言えるでしょう。

最期に中間、期末対策がしやすいということです。定期テストの時期、範囲の情報はすぐ入ります。個別指導ですので、弱いところを集中して練習さ

せられます。

学校側としては生徒の力の底上げがある程度可能になります。また、帰宅部の生徒が放課後ふらふらするのを多少は抑えられるというところでしょうか。

また塾としてのメリットは 4 月のオリエンテーションで学校が学校内塾を紹介してくれるため､4 月の段階で､生徒がどっと入ってくるということです。これは助かりました。また、宣伝コストもゼロです。

学校内塾のデメリットといえば、生徒が友達と一緒に帰りたいという誘惑に負けやすいと言うことぐらいでしょうか。

小中高生の発育にとって集団学習と、個別学習は車の両輪のように両方不可欠なものです。集団学習は学校で集団行動、集団の中での個の認識、協調性などを勉学を通して身に付けていきます。

個別学習は自分はどういう人間なのかを見つけていく過程なのですが、学校での一元的位置付けだけでは偏ったものになってしまいます。

子どもの社会は極めて狭いものです。両親、学校の先生、部活の顧問、数人の友達、地域の知り合い。数人の友人以外どこまで深く本人に関われているでしょうか。一緒に食事をし、会話する家庭は何割あるのでしょう、部活にはいっているのか、顧問は個人的相談に乗ってくれるか、など考えると、数人の友達以外誰も居ない場合も結構あるのではないかと思えるのです。

大人が回りに一人も居ない状況は恐ろしい状況です。学校の先生は成績をつける存在であり、心から信頼して相談できる相手とは限りません。塾の教師が唯一利害関係の無い大人なのかもしれません。ここが分からない、この問題が解けないという質問から、何々ちゃんの話になり、個人的な話に入っていくことは自然にあることです。こちらも仰々しく構えずに、かといって逸脱せずに、普通の会話として方向を示してやれば、十分なのです。話を聞いてあげるだけでも 8 割方解決です。

中小塾はこうした心の発育に大きく貢献しています。そして、学校内に塾を置くことで経費が節減され、一人でも多くの生徒が塾に入れればこれにこしたことはないのです。特に公立中高に学校内塾を置くことは、現代の教育において不可欠だと私は思います。

現在、共栄学園の中には塾はありませんが、共栄の近くに場所を借り、学校の外で授業は継続しています。ただし授業料は急に上げられませんし、経費は普通にかかるので経営は厳しい状況です。

＜特集２　その４＞

「公立小学校における授業実践」

菅原進学教室（東京：江戸川区）
菅原　明之

協会からの依頼をうけ、平成 16 年 5 月 31 日より東京都江東区立八名川小学校にて、小学 4・5・6 学年の算数習熟度別の授業を実施いたしました。

当初、子どもたちの学力を伸ばし中学入試の問題まで解けるようになればという認識がありましたので、ある程度学習塾の指導方法を前提にして実践するものだと思い、できるだけ多くの問題を解かすようにとプリント集を作成しましたが、表題に「できるんだテキスト」としたところ、「できる子どものため？」という解釈になり、子どもたちから再度回収したことから指導が始まります。

しかし、プリント集を作成するにあたっては理由がありました。それは、私が算数の授業見学した際、先行学習をしている子どもは退屈し、モチベーションの低い子どもは授業に参加せず、仮にこれが学習塾の授業だとしたら致命的なものになると鬼気迫る思いがいたしました。習熟度が高い子どもたちを指導するということもあり、苦肉の策としてプリント集を作成したのです。

公立小学校の授業は問題解決型の指導です。問題解決型とは、難しい問題を与え演習し定着させることではありません。例えば、折り紙を 2 つに折って長方形にします。折り目がある辺上の任意の点から、隣り合う一方の辺に任意の点をとり直線で結びます。そして、その線にそって鋏で切り取ります。切り取った三角形を調べ、二等三角形とは何であるのかを認識させます。また、二等辺三角形をどのように描いたらいいのか、円の半径を利用しながら描くことができないかなど、創意工夫して体験を通して理解させていく指導が、公立の小学校で実践されている問題解決学習です。他にも平行線の同位角が等しいことを分度器で調べたり、任意 3 点を結び三角形を描きそこから平行四辺形が幾つ描けるかを考えさせたり、台形・平行四辺形・ひし形・長方形・正方形などの定義を子供たちに調べさせながら認識させるなど、改めて初等教育の重要性を感じます。

さらに重要な点は、自分の考えを発表するということです。問題を解き、他の子どもたちの意見を考え、自分が感じたこと考えたことを練り上げ、ノートにまとめ発表するということです。これは、学習塾の指導とは大きく違い、都内で実施される中･高一貫校の予想問題の布石を垣間見ることができます。

しかし、問題点もあます。それは、あまりにも授業時間が短いということです。45 分という時間の中で、教室の移動などを含めると実際に授業をするのは 30 分程度と非常に短い状況です。これでは、単元の終盤は時間との戦いとなり演習・定着は不可能です。

公立小・中学校の「学力」における認識は「教科書の内容を深く掘り下げ、こどもたちが高い思考力を培う」ということがテーマであり、学習塾が考える「問題集を演習し得点能力を高める」ということとは全く視点が異なっています。然るに、「学力」に対する考え方は 2 種類あるのだということを明白にすべきだと思うのです。よく学習塾不要論を唱える有識者がおりますが、子どもたちの自主性や家庭の機能が果たされていることが不可欠な条件で、バブルというフィルターを通った家庭環境では彼らのロジックも矛盾が生じていることでしょう。先にも述べましたが、公立小・中学校の現状では単元内容の演習・定着は難しく、それを補完する学習塾の役割は必須であり「演習・定着により得点能力を高める学力の養成機関」として公に認知されるべきだと思うのです。

しかし、こんな斬新なことを公立小学校が習熟度別指導で始めたら学習塾は脅威ではないでしょうか。それは、習熟度の高い児童・生徒に、発展・補充学習の指導内容や教材を使用し、また特定教科において授業時間の拡大、さらには児童・生徒の平均的な習熟状況を把握し地域の教育意識も考慮にいれた指導法を模索し、各学校の特色を生かした指導法を考案します。さらに、都道府県レベルで共通テストなどを頻繁に実施し、定点的に到達状況を把握し、指導内容の改善に努めるようにします。けれども、そのためにはかなりの時間と労力を要することでしょう。

全ては学習塾の手法ですが、私立学校の中高一貫教育を真似て都立高校の進学型の中･高等学校一貫校を平然と実施するのですから､いとも簡単にこんなことは咀嚼するでしょう。

＜特集２　その５＞

「緊急人材支援育成事業に取り組んで」

伸栄学習会（千葉県：浦安市）
青沼　隆

長びく不況や経済構造が変革する中、雇用情勢は厳しさを増しています。平成21年、当時の自民党政権は雇用保険を受給できない方を対象とした職業訓練と、生活保障のための給付制度（緊急人材育成支援事業）を創設しました。ところが、当時、同事業の訓練実施機関が現れなかったため、厚労省と経産省から社団法人全国学習塾協会と全国学習塾協同組合（AJC）に対して、同年春過ぎ頃、「塾は昼間、教室が空いているので本事業に協力して欲しい」との要請がありました。その後、両団体が調整して、AJCが窓口となって、本事業推進に協力することになりました。

この職業訓練は訓練生にパソコン･ビジネス文書･総務･経理･営業等など再就職に必要な知識を６ヶ月間で修得してもらうものです。訓練生の受講資格は正社員ではないこと、受講料は無料、一定の要件（本人や世帯全体の年収、資産を持たないことなど）を満たせば、月額10万円の給付金を受給できます。一方、訓練を実施する塾や企業（訓練校）には、訓練生１人当たり毎月10万円の奨励金が支給されます。訓練校は、授業開始３ヶ月前くらいに申請を行い承認を得る必要があります。教室のスペース、講師の要件、カリキュラムなどにはかなり面倒な基準が設けられています。

私がAJCからこの話を聞いたのは、平成21年の７月頃でした。AJC会員としては遅い方であったように思います。すでに、一部の会員は10月開校に向けて具体的な申請手続きを進めているようでした。当初、この話を聞いたときには、正直なところ、訓練内容が学習塾のコンテンツと全く異なっており、学習塾の講師では対応が不可能であること、対象が大人でその多くが失業者と聞いており、学習塾の顧客層とはかけ離れていること、申請手続きが繁雑、初期投資もパソコンなどかなりかかること、募集が失敗した場合かなりの赤字が発生することなどから消極的でした。

ただ、AJC 森理事長などから、国の重要施策である失業解消に多少なりとも貢献できることなどを聞かされ、また、大人への教育が伸栄学習会にできるかどうか試してみたいという好奇心もあり、11 月開講に向けて準備を進めることにしました。

講師の手配、訓練カリキュラムの作成、申請書準備などは AJC がすべて行ってくれました。これらを 1 つの塾で対応することは不可能です。最盛期には AJC 会員 70 強の教室がこの事業に参画していたとのことですが、単独で開講できる陣容やノウハウを持った塾はなく、伸栄学習会も含めてすべて森理事長をはじめ AJC のバックアップによって成り立った事業と認識しています。

ただ、訓練開始とともにさまざまな壁に当たりました。その中で最も大きな問題が、本事業をどのように位置づけるかという点でした。講師はすべて AJC が派遣してくれ、カリキュラムもすべて AJC が作成してくれます。従って、副業として捉えれば大きな問題は何らありません。しかし、伸栄学習会として捉え直すと、例えば、講師の中には伸栄学習会の体質と馴染まない方もいます。訓練生との対応にも文化の違いを感じる方もいます。それに授業の質に問題ある方もいます。でも講師はすべて AJC からの派遣です。細かな問題は目をつぶらざるを得ません。まして、講師の育成や伸栄学習会らしさを出すことは不可能です。

それらを勘案すると、１教室で副業として行うか、あるいは、講師を雇い入れて複数教室を展開するか、いずれかの判断が迫られます。教科が多岐に渡るため、各教科に専任社員を割り当てた場合、１教室では一ヶ月分の授業を充当できないので、どうしても複数教室が必要になります。種々検討した結果、副業としてではなく独自の事業として展開することにして、最終的に 6 教室を展開することになりました。

この事業を通じてさまざまな経験をすることができました。失業者や社会的弱者といわれる方々の実態も垣間見ることができました。ある中年の男性からは、「自殺するか、一家離散になるか、あるいは生活保護者になるか瀬戸際にいる。」という言葉もお聞きしました。さまざまな学びがありましたが、大人も子どもも、「学びは大きな喜びでエネルギーになる」ことを改めて認識しました。論語の冒

頭に、「学びて時に之を習う。亦、説ばしからずや。朋有り遠方より来る。亦、楽しからずや。（物事を学んで復習する、なんと楽しいことではないか。友達が遠くから自分に会いに来る、なんと嬉しいことか）」という一説があります。改めて、この言葉をかみしめた次第です。

その後、平成 23 年 9 月に緊急人材育成支援制度は廃止され、新たに求職者支援制度が発足しました。ただ、この制度改定により、訓練校の数が絞られることになり、訓練校に支払われる奨励金も訓練生一人当たり月額 10 万円から 6 万円に減額されました。大規模校に有利な改訂となったこともあり、現在では AJC の大半の訓練校が撤退しました。伸栄学習会も同様で、規模縮小に向かっております。

何れにしましても、このような貴重な経験をできたことに、森理事長をはじめ AJC スタッフの方々に深く感謝申し上げる次第です。

＜実践報告 その１＞

オランダの教育について

～多様な学校教育の紹介～

京葉学舎（千葉県：千葉市）
皆倉　宣之

オランダの教育・社会評論であるリヒテルズ直子氏をお招きしようとの計画が昨年の3.11で中止になって以来、JKKでは次回お招きするまでに皆で勉強会をしておこうということになりました。昨年11月15日北トピア8階801号会議室にて「オランダの教育を探る」と題して研修会が行われました。その際に出された皆倉氏のレジュメをご紹介します。

（一）はじめに

随分と昔のことだが、長いことオランダに駐在していた大学時代の友人が、オランダの教育の素晴らしさを語ってくれたことがあった。ところがその時は、「あ、そう」ぐらいにしか感じ取れなかった。いまにして思えば、もったいないことをしたと後悔するわけであるが、昨年の秋に再びオランダの教育について詳しく知る機会を得た（時を同じくして、イギリスの国語教育についても触れる機会もあった。このことについては、機会があれば後日触れたいと思っている）。

それは、オランダにお住まいのリヒテルズ直子さんの存在を知り、著書に接し、かつ彼女から直接にお話をお聞きできたことから始まる（なお、去る7月18日の法政大学でのシンポジウムでもお会いできて、「イエナプランスクール」について詳しいお話を聞くことができた）。

オランダの教育の特徴を一言で表現すれば、徹底した多様な教育を行なっている、ということである。それを支える骨子は、「学校をつくる権利」と「親が学校を選ぶ権利」と「教育内容の自主性」の三つである。

以下に、オランダの初等教育が如何に多様であるかということと、それを保障するシステム、それらの歴史的背景等について、ご講演やご著書から学んだことを整理して述べてみたい。

（二）初等教育の多様性

１．小学校についての概略

オランダにはいわゆる通学区と言われるものがない。したがって、いろいろな特徴のある私立あるいは公立の小学校の中から、親は自分の子どもを通わせる学校を選ばなければならない。

学校をつくるには 200 人集まればいいので、学校の規模は小さい。平均 221 人というのが小学校の平均の生徒数である。1 学年のクラスの生徒数は、低学年だと 25 人というのがほとんど標準になっていて、高学年だと 30 人から 35 人ぐらいまでというのが現状。そうすると、大体 1 学年当たり 1 クラスずつ、あるいは低学年だけ 2 クラスぐらいというのが学校の規模である。

規模の小さな学校がそれぞれの特徴を持って互いに近い位置にあるので、「じゃあ、うちの子どもをどっちにやろうか」と親が選ばなければならない。学校を選ぶ親たちのために、各市はパンフレットのようなものを作っていて、「はい、一般校にはこれだけありますよ。カトリック校だとこれだけありますよ」というふうに分けてつくっていて、その中で校長先生の名前なり、学校の様子なり、それからそれぞれの学校が理念として出しているもの、特徴として出しているものを挙げてあったりする。あるいは「うちは、これはもう本当に移民のための学校ですよ」と。だから、学校は「移民教育の特別のプログラムを持っていますよ」とか、そういうことをどんどんどんどん発信しなければいけなくなる。それゆえに、まさにお店のようなもので、「うちはこういう教育を売っております」というような状況で、親はその中からうちの子どもにいいのを選んでいくというような状態になっている。

では、親が学校を選べるとはどういうことか。親は子どもにいい環境でいい教育を受けさせたいという願いをもっており、だからいつもアンテナを張って学校を見ている。そして、その学校が子どもにとってよくないと判断した時には、他の学校に移してしまうことができるのである。親が学校を選べるということによって、自分の子どもを守ってやることができるというのは大切なことである。

なお、オランダには検定教科書はない。

２．公立学校と私立学校との関係

ところで、公立学校と私立学校との関係はどうなっているのだろうか。驚くべきことに、両者の間にほとんど差がない。私立に通おうが公立に通おうが、授業

料は同じ。生徒一人当たり政府からの補助金はいくらというのは、公立校に通おうが私立校に通おうが全く均一である。だから、毎年 10 月 1 日に学校の校長先生がその学校に通っている生徒の数を計算して、その計算した生徒数の頭数によってその学校の翌年の予算が決まる、というふうになっている。

いずれにしても、親にしてみれば私立に行かせるか公立に行かせるかというのは、ほとんど差のないことである。私立の学校は、確かに親の寄付金を少しだけなら取ってもいいことになっているけれども、むやみに高い金額を取るとなると、親のほうから強い反発が予想される。また、学校そのものがどんな子どもでも受け入れる「開かれたもの」というイメージを失うとよくない、といった理由などから、私立校が提示する寄付金の額は、大体子ども一人当たり平均して年間でも２万円ぐらいである。それを越えるというのはほとんどない。しかも寄付金に関しては、社会階層の低い、例えば生活保護を受けているような家庭に対しては、これは免除するというようなことを大抵の学校がやっている。

３．公立学校

ところで、公立学校の自由度についてであるが、日本の学校のように画一的な学習指導要領があって、それに従って同じことをやっているかというと、そうではなくて、公立校でも敢えていろいろな学校教育の方法を取り入れようとしている。一応は市が運営を握ってはいるけれども、実際の教材を選ぶのはどうするかとか、クラス編成をどうするかなどというのは、毎日教育活動に携わっている校長先生と教員による教職員チームが決めていくというパターンがほとんどである。

しかも、市は公立の学校をつくる際に、そのエリア（地域）を見る。この地域にはもうすでに私立のモンテッソリー校があるとか、イエナプラン校がある、というようなことになると、ここは普通の公立の学校をつくっておけばいいというふうになり、逆にあまりそういう特徴のある学校がないエリア（地域）だと、市が率先してイエナプラン協会に話を持っていって「ここにイエナプランの方から学校をつくりませんか」とか、あるいはカトリック教会の全国学校協会などに話を持っていって、「カトリック校がここにないし、人口的にはカトリックの人が多いのですけどつくりませんか」というようなことで調整をしていく。

親によっては、自分の住んでいる地域に自分の子どもに合った学校がないから、うちの子どもはぜひフレイネの学校に入れたいのだけども、フレイネに入れるには隣町まで行かなければいけない、あるいは、毎日 20 キロぐらい車で連れて行かなければいけないということになると、これについて申請を出すと市が交通費の

一部を負担してくれる。それだけ教育の多様性が保障されているということだろう。

４．教育内容の自主性について

教育を実践する上で最も重要なことは、学校の裁量権の部分である。オランダの教師たちは、自分たちの思っているとおりの学校教育を行うことができる。

実際に裁量権というのがどういうところに生きてくるのかというと、目の前にいる子どもが非常に特殊な問題を持っている。どうも落ち着きがない。この落ち着きのない子を落ち着かせるだけでも大変だ、というようなことがよくある。この子どものために普通の教材を使おうとしても使えないから、ちょっと別の教え方をして、とりあえずある程度レベルを落としてこのぐらいを目的にしてやったらいいんじゃないかというようなことは、実際の学校現場では割合よくおこる。そういう場合に、オランダでは、教師の対応を非常にやりやすくしてある。

具体的な問題が起きた時に、その子どもが発達することに基準を置いてあるのであって、全ての子どもが１つの目標や知識の総体を同じように学ばなければいけない、という風には決めていない。理科ならばこれとこれとこれを覚えなければいけない、算数だったらこの計算とこの計算とこの計算ができるようにならなければいけない、全ての子どもがそこまでいかなければいけない、というふうにはやっていない。文部科学省は、子どもたちが小学校を終える時には、このぐらいを標準にして皆さん指導してくださいよ、というようなおおよそのミニマムな目標達成基準は決めている。つい先頃、科目ごとの達成目標だけは立てられました。そうしておかなければ、全国的な教育水準が保てないという問題もあるからである。とはいえ、国は目標水準の目安は指定しても、憲法上方法については一切口を挟んではいけないという原則があるので、口出しはしない。それはそれぞれの学校の方針、学校の教師たちが決めることである。このように一人一人の子どもが成長し進歩するのであれば、その進歩していることを文科省なり、インスペクターの人達に証明することさえできれば、「方法」は自由であるということが原則的に認められている。これは、大変すばらしいことである。

５．いろいろなオールタナティブスクール

さて、オランダにはいろいろな種類のオールタナティブスクールがあり、それらが多様で非常に具体的な方法を持っているので、それらについて紹介してゆきたい。

（1）ダルトンスクール

この学校は、子どもの自主性を伸ばすのに力を入れている。

たとえば、一週間の課題の決め方だが、教師が子ども一人ひとりに科目ごとに個別の課題を出して、それぞれの課題について子ども自身が色分けして計画を立て、これを先生に見せて、それで先生とその子どもの間の約束ができた、ということになる。

こういうやり方をすることによって、一人ひとりの子どもがそれぞれ別々の課題をもらって、しかも自分で自分の計画を立てて、先生と約束しているのだから、守らなければいけない、というふうに展開してゆく。これがダルトンスクールの基本的なやり方である。

生活指導に関しても同様である。たとえば、掃除に関しても、教師は子どもに対して「はい、あなたこれをやりなさい」と言うのではなくて、子供同士がお互いに合議していく中で決まってゆく。こういう中で子ども自身の自主性が育ってゆく。

ここでは、それぞれの子どもが自分の進度に合わせた課題を与えられる。それぞれの子どもが受ける課題というのが別々にある。だから、ある子どもはどんどんどんどん伸びていくけれども、ある子どもはゆっくりやらないと分からない。同じテーマでも子どもの程度によって、別の教材を使えるように教室の中に用意してある。

こうすると、確かにできる子とできない子と格差がどんどんどんどん広がってゆくのではないかという心配もあるが、できない子どもに対してはちゃんとその子どもにあったゆっくりとしたスピードで進んでゆくことができるというのはよいことだ。このようにしてどの子も成長してゆくし、どの子もそれなりのスピードで発達してゆく。しかも、教科ごとに進度の違う子供に対応できるような教材が用意されているから、たとえば、ある子どもは算数が非常によくできるのだけど、他の教科は弱いということであれば、その弱い方に力を入れなければいけないということがある。こういうことは実際によくあるわけだから、そのために個々の子どものために個別化された教材が、具体的にたくさん用意されている。

ダルトンスクールの特徴の一つに、信号機の利用がある。赤と黄色と緑の信号機。赤の時は、子ども達は黙って私語をしないで、自分の与えられた仕事をやらなければいけない時。黄色の時というのは、先生が説明をする時に注意を払わなければいけない時。緑の時は、先生に自分の子どもの方から手を挙げてどんどん発言したりしていい時、というふうにルールが決まっている。そういういろいろ

なルールを作って、先生がその時その時に規則というのを押しつけていくのではなくて、子どもがぱっと見てそれなりに判断していけるような装置がたくさん用意してある。ダルトン教育のモットーは、「自由」、「共同」、「責任」、「自主性」である。その中でも、特に「責任」と「自主性」が強調されているようである。

（2）イエナプランスクール

この学校は、オランダには一番遅れて紹介されたオールタナティブスクールにもかかわらず、現在ではオールタナティブスクールの中で一番数の多い教育になっている。

この学校の一番の特徴は、同じ教室の中に普通だと 3 学年くらいに分かれる年令の違う子どもたちを一緒に入れて指導するところにある。大体低学年の 1、2、3 年生を同じグループにして、それから 4、5、6 年生と 7、8 年生というふうに、違う学年を一緒にするのである。

そしてさらに、そのクラスの中に、必ず違う年齢の子供たちを混ぜたグループを作る。毎年新しい子が入ってくると、今までいた子ども達に「じゃあ、やり方を教えなさい」と言って、生徒同士で教え合いをさせる。こうすることによって子どもたちの社会性の発達をねらっている。

さらなる特徴は、輪を作って教えるということ。生徒同士がお互いに顔を見合わせる。その中に教師が加わって、生徒たちと非常に近い距離にいて、教師はひそひそ話ぐらいで話し掛ける。

教師があるグループに関わっている間、それ以外の子どもたちは周囲にある机で自分に与えられた課題をこなしている。年少者は年長者に助けられながら勉強する。

典型的なイエナプランの学級の風景は、国語の時間を例にとると、ある子どもは文字カードを使って文字の勉強をし、他の子どもは本を読んでいたり、また他の子どもは自分で何か書いていたりする。みんなそれぞれ違うことをひとつのグループの机の中でやっているわけである。教師は一斉に授業をするのではなくて、そういう子供同士の相互作用を見ながら、それぞれの子どもたちの進路に従って教えてゆくのである。

オランダでは一般に、学校活動への親の参加を非常に奨励しているが、イエナプランは特に保護者が学校の活動にかかわることに積極的に勧めている。色々な行事のたびにお母さんたちがしょっちゅう学校に出入りしている。

なお、この学校では、集会を大事にしている。校舎の中にある一種の講堂、催

しを行う場所で、毎週の週末、金曜日の午後の時間に、各学年交替で出し物を用意したりしている。流行っている歌をみんなで歌いましょうとか、詩を作ってみんなで詩を朗読しましょうとか、あるいは小さな寸劇をやりましょうとか、そういう簡単な 30 分ぐらいのものを各学年が持ち回りで週末の行事として､金曜日の終わりの時間にやる。

（3）モンテッソリースクール

この学校は、教材（道具）に非常に特徴がる。

数について、それがどういうものかというのを、子ども自身が手にとって発見することができるというような教材もある。色の違いや形の違い、さらに地球がどうなっているかについて学ぶための独特の道具もある。こういうような具体的なものをたくさん用意しているのがモンテッソリーの特徴である。

モンテッソリーの場合は、道具が何よりも特徴だが、学年、年齢の違う子ども達を一緒にしたクラスというのを作っているという点においては、さきに述べたイエナプランと同じである。ただし、イエナプランとの違いは、モンテッソリーでは、子どもの進度にしたがって年令の異なる子どもを同じグループで教えるという方法を取っていることである。

字を覚えるための教材にも特徴が表れている。字を覚える時は、最初から書きなさいというのではなくて、まずとにかく字をなぞらせる。板の上にかかれた字はザラザラしている。そのザラザラしたところを指でなぞって、そして次には砂の入ったお盆の中で砂浜に字を書くように書いてみせる。そういうことを何回も何回も繰り返す。子どもによっては、そういうことを何回も何回も繰り返さなければいけない子どもがいる。そういうことをやった後で「はい、じゃあここに紙と鉛筆がありますよ。ここに書いてご覧なさい」というふうに、非常に細かい段階を踏んで教えていくのである。

（4）まとめ

小学校がこういうふうなオールタナティブスクールのやり方を取り入れて、一人ひとりの子どもに合ったことをやっていくと、結局卒業する頃までには一人ひとりの子どもの特徴や進度がつかめてくる。日本的に言えば学力差になるのかも知れないが､オランダでは一人ひとりの子どもの特徴･適性がつかめてくる､というふうに考えている。たとえば、算数がすごく好きな子もいれば、学力とは少し違うけれども人間関係の上手な子もいるだろうし、社会性の発達が非常に高い子

もいれば、音楽が好きな子もいるというふうに、子ども自身が自分を発見していくプロセスがすでにこの段階で強調されているのである。

（三）多様な学校教育を担保するシステム

教師たちに自由裁量権を与えてしまったら、あるいは教材を勝手に選ぶようにしてしまったら、検定教科書をやめてしまったら、学校教育の質が落ちるんじゃないか、あるいは勝手な教育を行なうのではないか、ということが懸念される。つまり、学校に自由裁量権を大きく認めた場合、学校教育の質をどう維持していくのか、ということである。オランダの場合、それをどのようにして克服しているのか。

第１は、学校の選択権を保護者に与えていることである。

学区制を置かないことによって、親が自分の子どもに最も相応しいと思う教育を選べるということが考えられる。自分が選ぶから、自分が選んだのだからこそ、学校に問題があれば、学校の教師と一緒に考えようとする姿勢が生まれてくる。これは、自分が学校を選んでいるからできることであって、押しつけられるとできないことである。だから、学校の選択権を保護者に与えることが、学校の質を維持する上で大変重要な役割を果たしていると考えられるのである。

学校を選択した保護者たちにどういう権限が与えられているかということも重要である。ひとつの例を挙げると、校長及び教職員の人事に関して保護者に大きな発言権が認められているが、これも非常に大切なことである。

第２は、「インスペクター制度」である。インスペクター機関は、政策や規則を決めている文科省とは全く独立したものである。これは、オランダに限ったことではなく、ほとんどのヨーロッパの国々がやっていることである。その中で、特にオランダのインスペクター制度の特徴は何かというと、オランダでは学校の多様性の程度が非常に高いので、それぞれの学校に目標を定めさせて、それぞれの学校が定めた目標について、その目標を達成しているかどうかという評価をまず学校自身にやらせる。また、学校は自己評価の結果、実践状況がよくなければ何らかの改善策を取らなければならない。そういう自己評価と自己改善のプロセスをそれぞれの学校はどのように設定し実行しているか、ということに重点を置いている。

それをインスペクターが見て、納得できる形で話し合いをしながら「ああ、こういうふうにやっているのだったら結構ですよ」とか、あるいは「あなたの学校は

こういう目的でこういうことを教えているというけれども、この子とこの子はそういう教育で発達していないのはなぜなのか」というようなことを監査してゆく。そうした学校の実践が保護者やインスペクターなど外部の人によくわかるような、透明性を高くしておくための装置が用意してある。それは具体的には、一定の項目を網羅しておかねばならないとされる「学校要覧」「（４年ごとに更新される）学校計画書」の提出、また、子ども一人ひとりの入学時から継続された進度記録、などである。

第３は、「サポート機関」である。例えば親が「この学校はもうだめだ」といって子どもを他の学校に転校させその学校の生徒数がどんどん減っていった場合、あるいはインスペクターがやってきて、「この学校は今非常に質が悪くなっているよ」というような評価をした時に、誰がその解決をしなければいけないかというと、実際に学校で教育活動をやっている校長と教師たちなのである。オランダには、そうした事態が起こった時に先生たちを支える機関として、「サポート機関」が各地に置かれている。

約 30 年ほど前に、国の教育行政の一環として、各市町村レベルに一つずつ「サポート機関」というのを作った。現在、経費や効率の問題などがあって、統合されたり民営化が進んできているが、とにかく、教育学や教育心理学を学んだ専門家や教員体験者などの常勤の職員を置き、また、いろいろな教材や教育方法に関する資料などをそろえて、学校の先生が問題に直面した時に、その先生と共に問題解決に当たってくれる機関である。

サポート機関だけでなく、オランダにはいろいろなオールタナティブ教育が実践されていて、それぞれのオールタナティブ教育の人々が協会を作って様々の形で教材や教育方法の開発･普及運動を行っている。教師たちはそういう協会などからアイデアを得ることもできる。「うちの学校にどう指導していけばいいのか分からない子がいるのだけど」といった時に、教えてくれるところがたくさんある。

（四）多様な学校教育を成立させたオランダ社会の背景

以上にみてきたように、オランダの教育は多様性に富んでいるしかし、ここまで到達するには、それなりの歴史があったのである。以下にその歴史をみてみることとする。

１．オランダ社会の特徴

オランダ国民は自分たちのことを「寛容な国民」である、というふうに捉えている。寛容とはどういう意味か。お互いに考え方が違っていても排斥し合わないで互いを受け入れよう、という意味である。

では、なぜこういう「寛容」という「お互いを排斥しないでいようじゃないか」というような考え方がオランダで定着したのだろうか。このことと現在オランダにある学校制度ができあがった過程とは深い関係がある。「寛容」の考えが基礎になって、実際にいろいろな立場のいろいろな学校をつくることができるという、そういう制度を作り上げるには、90 年間の学校闘争という歴史を経ている。この「学校闘争」は 19 世紀の初めから 20 世紀の初めにかけて起こったのだが、その過程がまさにこの寛容の国民を育てる過程だったといってよい。

２．「教育の自由」の確立

ここで、どういうことがあったかというと、まずオランダでも 19 世紀の初めは世俗性とか、あるいは中立性、今日本でも非常に大切なものとして守られている、neutrality（中立性）ということが、非常に大切にされていた時代があった。これは、カトリックのスペインの覇権拡張に対してプロテスタントの考えで団結して反対運動をしたオランダの独立戦争の歴史や、またその後ヒューマニズムや啓蒙主義が広がる中、政教分離をやらなければならない、社会の制度や政治に教会とか宗教を持ち込んではいけない、という考え方がでてきた。そうして、フランス革命が起こり啓蒙主義の時代になっていった。中立性を持ってくることが近代社会の一番大切なことだ、と言った時代があったのである。18 世紀の初め、18 世紀から 19 世紀にかけての時代だ。

そうして、1801 年に最初にできたオランダの公教育の制度というのは、まさにこの「中立性」ということを基礎にして作ろうとしていた。学校は、特定の宗教や信条の影響を受けず、出来るだけ中立的な価値観の中で教育を行うべきだ、と。

ところが、それからあまり時代が下らないうちに、1820 年、30 年ごろから、キリスト教関係、オランダというのは非常にカルヴィニズム（プロテスタンティズムの一派）の強い国ですから、キリスト教の意識の強い国で、そういう熱心なプロテスタントの側から「いや、ちょっと待てよ」と。自分達の生活の基礎になっているのはキリスト教の倫理ではないか、「なぜキリスト教の倫理で、自分の子どもを教えちゃいけないのか」というふうに言い出した。それで、プロテスタントの人達が言い出したことが、やがてカトリックの人達にも受け入れられて、カト

リックとプロテスタントはもちろんモラルが若干違うわけであるが、それぞれが各々の信条に基づいて教育をするのは当然の権利だ、ということで「それはそうだ」とカトリックの方の人たちも合意して、「この件に関してはプロテスタントの人々の議論は正しい」と支持をした。このように、キリスト教会の人達が中心になって「教育というものは、それぞれの自分が信じる信条に従って子どもを育てて、それこそが公教育の基礎になるべきではないか」ということを非常に早い時期に言い出した。これは、ヨーロッパの中でも大変早い動きだった。

こうした議論をやったのが学校闘争である。こうした議論を繰り返しながら、その中で政党が生まれてきて、つまり、プロテスタント系の政党が生まれて、カトリック系の政党が生まれた、あるいは、逆に非常に中立性を重んじる自由主義、純粋なリベラリズムが生まれてきて、そういうものが政党の分かれ方につながっていく。また他方で、労働党が独自の立場を展開する。

やがてその結果、1917 年に憲法の 23 条で、全ての学校は「教育の自由」に基づいて建てることができる、ということが決まった。

「教育の自由」の具体的内容には 3 つあり、1 番目が「設立の自由」。とにかく 200 人の子どもを集めることが証明できれば、自分達で学校をつくってよいということ。

2 番目が「理念の自由」。カトリックで教えたいという人が二百人集まったら、その学校はその理念に従って学校教育をしていい。プロテスタントでやりたいというなら、それでやっていい。こういう経過を経ているので、逆に中立の意識を重んじる人達は、あえて宗教性を抜きにしたもっと人間の普遍的なモラルに従って子どもを教えてもいいのではというようなグループも生まれてくる。これが 20 世紀の初頭のことである。

3 番目が「学校の教育活動のデザインの仕方の自由」（教育方法の自由）。これは具体的にいえば、教師たちの自由裁量に結びつく条項で、校長を中心とした教員グループがこの学校ではこういう教材を使おう、あるいはこういう教え方をしようということを自分達で決めていいということ。

以上のような、学校を設立して経営する際の、設立・理念・教育方法に関して、国は口出しを一切しないということを決めたのが 1917 年である。以来、この教育の自由があったお陰で、オランダには非常にたくさんの種類の学校ができるようになったのである。

（五）おわりに

オランダの教育を学んでいて痛切に感じるのは、オランダを初めとするヨーロッパ諸国の歴史と地理的条件が、日本ともアメリカとも異なる教育制度を生み出したのだろうということである。それが最も表れているのが、学校設立における「理念の自由」の保障である。ここから教育の多様性が育ち、さらには公立と私立に差がないということへつながってゆく。この素地のあるところにして初めて学校選択の自由の意味も生きてくる。それに比べたら、日本における学区の自由化＝学校選択の自由化は、とうてい教育の多様性を生み出すことはできないだろう。なぜなら、授業料の違いからくる公立と私立との段差、それに教育方法の自由がないことからくる公立学校の特色のなさがネックとなっているからである。

［注］リヒテルズ直子著「オランダの教育」（平凡社・04 年 9 月刊）を
私学の皆さんにこそぜひ読んでいただき、各学校の設立理念に則った教育の実践をされる際の参考にできたらと思います。

＜実践報告 その２＞

ＪＫＫ・研修会

万葉の旅

常陸国・防人歌碑めぐり

常陸太田市幸久小学校「防人見返りの像」より

日時　　平成 23 年 11 月 23 日～24 日
訪問地　　茨城県　潮来市・鹿嶋市・神栖市・行方市
講師　布浦万代
主催　ＪＫＫ

11月２３日・２４日、第２回「万葉の旅」が実施されました。
今回の参加者は、会員：皆倉、布浦、平林、林、仲野、上本、森本、癸生川、庭野、金澤、小林の１１名。会員外：飯野さん、佐藤さんの３名合計１３名

今回は、マイクロバスを用意しました。
初めてお会いする方も数人おりましたので､お互いの自己紹介から始まりました。
全員が車内で布浦さんの万葉講座の講義を受けることができました。
もちろん歌碑の前でも布浦さんの詳しい解説・講義が行われました。

第１回（昨年）は、万葉集のできる背景からの解説でしたが、今年はそれを
引き継いで､「防人」がなぜ東国に集中しているのか。防人の制度や任地赴任の様子、防人の歌等々の解説を伺いました。
　赴任地に出兵する防人の心情や、夫婦の情愛、訃報を聞いた妻の慟哭等々の布浦さんの行間から滲み出る解説の講義が行われました。
また、車内が教室になり、一人ひとりが自分の感じた一節を発言しました。
　車内はいつの間にか、サンデル教授の「白熱教室」のように熱気を帯び、
一人ひとりの発言に、自身では感じえなかった点の指摘に共鳴しました。

夕方、宿泊先のアトンパレスホテルに到着しました。
費用の割には超豪華な部屋に通して戴き、一同感銘しました。
食事は１０人が一同に会食し、車内のような一人ひとりに発言させる機会があって斬新であったことなどの感想を含め、熱弁が振るわれました。

翌日訪問する学英舎の飯島先生から飲み物とお食事の差し入れを戴きました。
これも偏に布浦さんの人徳のお陰と、参加者一同感謝しました。

企画・準備・諸々の手配を戴きました布浦先生、ありがとうございました。
また、２３日・２４日の両日、マイクロバスを運転してくださった仲野さん、朝早くから遅くまでありがとうございました。

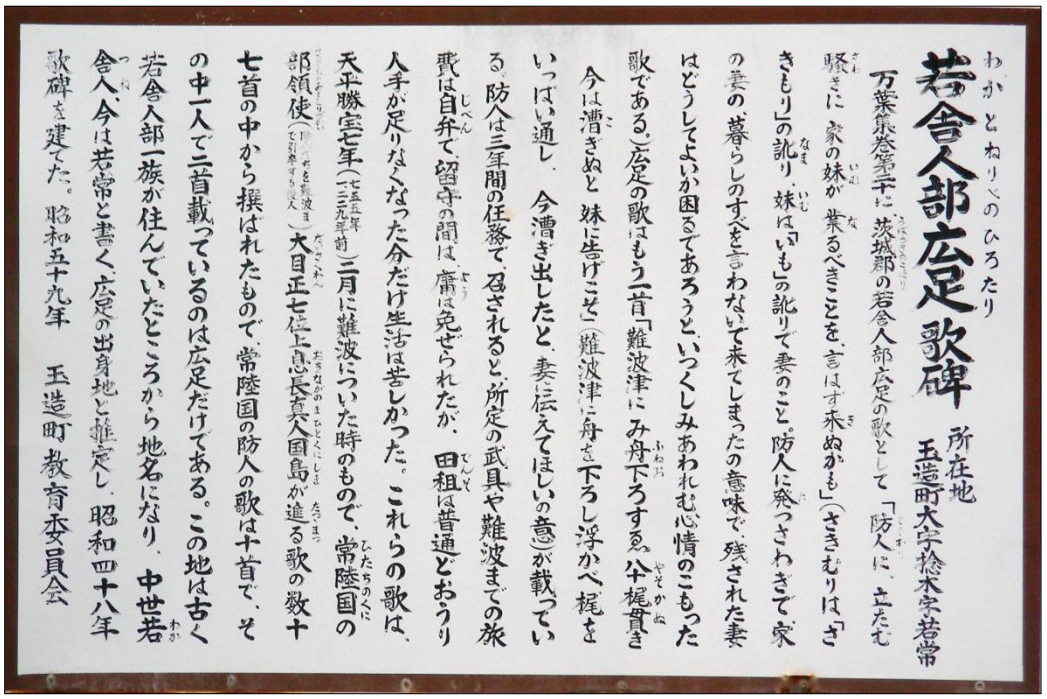
H24 年 11 月 24 日　　事務局長　小林　記

＜茨城県鹿行地区の万葉歌碑を訪ねて＞

1　防人（さきむり）に　立たむ騒きに　家の妹（いむ）が　業るべきことを
　　言はず来ぬかも

＜茨城（うばらき）の郡（こほり）の若舎人部広足＞
（20－4364）

［行方市念木
防人の若舎人部広足の出身地］


わかとねりべのひろたり

若舎人部広足歌碑

所在地
玉造町大字捻木字若常

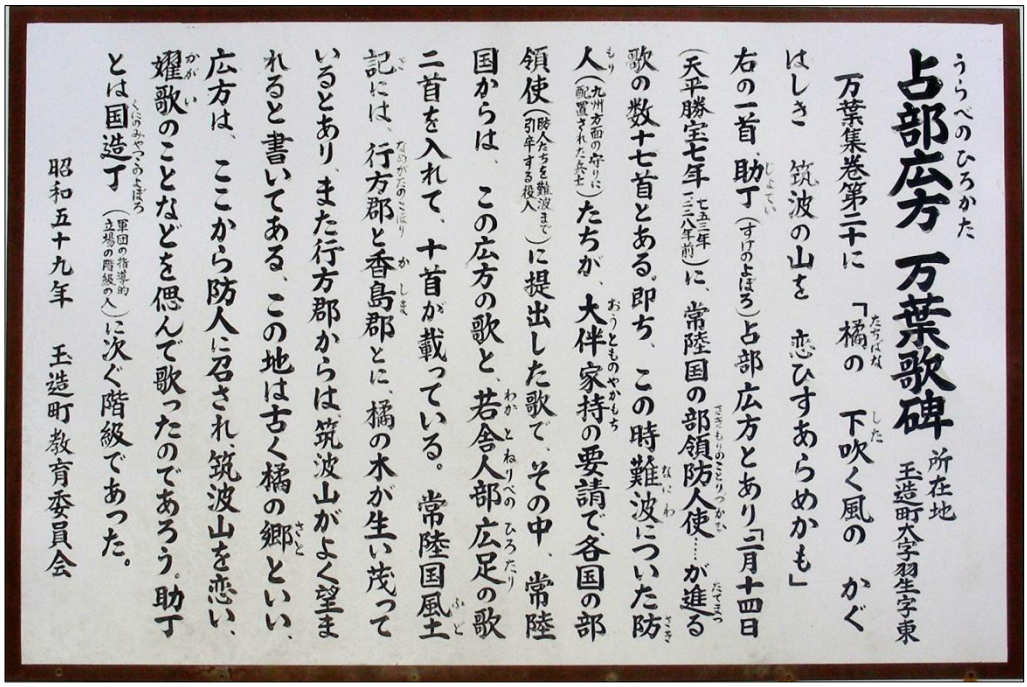
万葉集巻第二十に茨城郡の若舎人部広足の歌として「防人に立たむ騒きに家の妹が業るべきことを言はず来ぬかも」（さきむりは「さきもり」の訛り、妹は「いも」の訛りで妻のこと。防人に発つさわぎで家の妻の暮らしのすべを言わないで来てしまったの意味で、残された妻はどうしてよいか困るであろうといつくしみあわれむ心情のこもった歌である。広足の歌はもう一首「難波津に み舟下ろする 竹梶貫き 今は漕ぎぬと 妹に告げこそ」（難波津に舟を下ろし浮かべ梶をいっぱい通し、今漕ぎ出したと、妻に伝えてほしいの意）が載っている。防人は三年間の任務で、召されると、所定の武具や難波までの旅費は自弁で、留守の間は、庸は免ぜられたが、田租は普通どおり入手が足りなくなった分だけ生活は苦しかった。これらの歌は、天平勝宝七年（七五五年）三月に難波についた時のもので、常陸国の部領使（ことりつかい）大目正七位上息長真人国島が進る歌の数十七首の中から撰ばれたもので、常陸国の防人の歌は十首で、その中一人で二首載っているのは広足だけである。この地は古く若舎人部一族が住んでいたところから地名になり、中世若舎人、今は若常と書く。広足の出身地と推定し、昭和四十八年歌碑を建てた。

昭和五十九年　玉造町教育委員会

2　橘の　下吹く風の　香ぐはしき　筑波の山を　恋ひずあらめかも

＜助丁占部広方＞
（20－4371）

［行方市羽生
　筑波山麓には今でも橘が自生している］



うらべのひろかた
占部広方 万葉歌碑　所在地　玉造町大字羽生字東

万葉集巻第二十に「橘の　下吹く風の　かぐはしき　筑波の山を　恋ひずあらめかも」
右の一首、助丁（すけのよほろ）占部広方とあり「二月十四日（天平勝宝七年（七五三年（二三八年前））に、常陸国の部領防人使…が進る歌の数十七首とある。即ち、この時難波についた防人（九州方面の守りに配置された兵士）たちが、大伴家持の要請で各国の部領使（防人たちを難波まで引率する役人）に提出した歌で、その中、常陸国からは、この広方の歌と、若舎人部広足の歌二首を入れて、十首が載っている。常陸国風土記には、行方郡と香島郡とに、橘の木が生い茂っているとあり、また行方郡からは筑波山がよく望まれると書いてある、この地は古く橘の郷といい、広方は、ここから防人に召され筑波山を恋い、耀歌のことなどを偲んで歌ったのであろう。助丁とは国造丁（くにみやつこのよほろ）（里国の指導的立場の階級の人）に次ぐ階級であった。

昭和五十九年　玉造町教育委員会

3　常陸なる　浪逆の海の　玉藻こそ　引けば絶えすれ　あどか絶えせむ

＜比多知奈流　奈左可能宇美乃　多麻毛許曾　比気波多延須禮　阿杼可多延世武＞

（14－3415）

［潮来市浪逆
周辺の水辺は当時の面影が残る］

［潮来市浪逆
東歌の歌碑前で］

An Old Manyou Poem

In The Country Hitachi
Beautiful Seaweeds Tamamo
Of The Nasaka Sea Would Be Broken
When You Draw
How could The Lovers Be Parted By Force

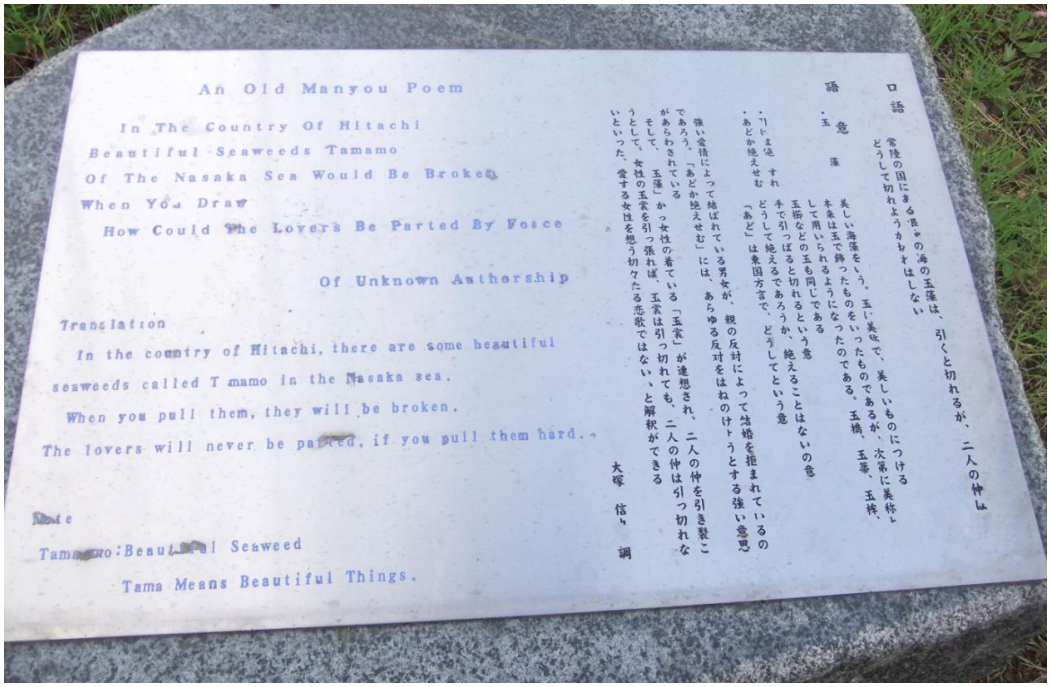
Of Unknown Authorship

＜Translation＞

In the country of Hitachi, there are some beautiful Seaweeds called Tamamo in the Nasaka sea.
When you pull them, they will be broken.
The lovers will never be parted, if you pull them hard.

＜Note＞

Tamamo : Beautiful Seaweed
Tama Means Beautiful Things



［全国の万葉歌碑の中でも珍しい英文による東歌の歌碑］

♪ ＜常陸国風土記」行方郡の条・板来・潮来＞

此より往南十里に板来の村あり。近く海浜に臨みて、駅家を置けり。此を板来の駅と謂ふ。其の西は榎木、林を成せり。飛鳥浄見原の天皇の御世、麻積の王を遣りて居ましめし処なり。其の海より塩を焼く藻・海松・白貝・辛螺・蛤を生めり。

4　霰降り　鹿島の神を　祈りつつ　皇御軍士に　われは来にしを

＜那賀の郡の上丁大舎人部千文＞
(20－4370)

［鹿嶋市宮中
　　鹿島神宮前の防人の歌碑］

① ＜ 鹿嶋市・行方市の歌碑 ＞

遥かなる九州・大宰府の地へ道なき道を越え、「赤紙一枚」で出兵して行った防人たちは、どんな思いで故郷を後にしたのでしょうか。防人の名前や出身地が判明しているのは、万葉集の防人の歌の中でも貴重な歌です。

② ＜潮来市の歌碑＞

東歌です。潮来の浦の自然を背景に、素朴さの中に情熱的な心を投影した歌です。

③ ＜鹿島神宮＞

鹿島神宮は、全国 600 社余りある鹿島神社の総本社で常陸国の一宮で、祭られているのは、日本神話（古事記）に登場する武甕槌神（タケミカヅチ）という武術の神様。創建は紀元前 660 年と伝承され、天地が開ける以前に高天原から天下った「香島の天の大神」の神話と、崇神天皇・倭建天皇・天智天皇の時代に祭祀や造営が行われたと伝えられています。平安時代に神宮の称号を与えられていたのは、延喜式神名帳によると伊勢神宮、香取神宮とこの鹿島神宮の 3 社です。鹿島神宮、香取神宮の 2 社は共に蝦夷に対する大和朝廷の前線基地でもあった。鹿島神宮から高千穂までの直線は、夏至の日に太陽が通るレイラインで、その線上には皇居、明治神宮、伊勢神宮、富士山などがあり、日本のパワースポットと言われています。

［鹿島神宮参道］

④　＜塚原卜伝＞

戦国時代の剣豪で鹿島新当流の創始者。鹿島神宮での千日籠を経て秘法「一の太刀」の開眼、真剣勝負 19 回、戦場での 37 回の戦いで 1 度も負けず、富や名誉に目もくれずに剣の道を追求した人物。「塚原卜伝」が映画化され、10 月からＮＨＫＢＳプレミアムで放映されました。

⑤　＜鎌足神社＞

鎌足の出生の地は、大和と鹿島の２説があります。鹿島説は中臣鎌足の父が鹿島神宮の祭祀者として大和から派遣された時に大伴夫人との間に生まれたという説です。鎌足が鹿島出身ということは、「大鏡」「常陸風土記」「鹿島神宮誌」、多武峰の「談山神社伝承」に記されています。

⑥　＜根本寺＞

松尾芭蕉はこの寺の仏頂和尚を師と仰ぎ、1687 年にこの寺へ月見に訪れ、投宿しています。芭蕉はその様子を「鹿島紀行」に記していますが、境内にはその時詠んだ句碑が建てられています。

月はやし 梢は雨を　持ちながら
寺に寝て　まこと顔なる　月見かな

⑦　＜港公園＞

3 月 11 日の震災でこの周辺は津波で液状化となり、一部入場出来ない所がありますが、今回は港公園より鹿島臨海工業地域を遠望します。掘り込み式の工業港（鹿嶋港）住友金属工業鹿島製鉄所など約 160 の工場があり、この地域は時々高校入試に出題されています。

＜出立時の防人夫婦の問答歌＞

1　　家ろには　葦火焚けども　住み良けを　筑紫に至りて　恋しけ思はも

（20－4419）
武蔵国・橘樹郡上丁物部真根

1－1　草枕　旅の丸寝の　紐絶えば　我が手と付けろ　これの針持し

（20－4420）
妻の椋椅部弟女

2　我が行きの　息づくしかば　足柄の　峰這ほ雲を　見とと偲はね

（20－4421）
武蔵国・都筑郡上丁服部於由

2－1　我が背なを　筑紫へ遣りて　愛しみ　帯は解かなな　あやにかも寝も

（20－4421）
妻の服部呰女

3　足柄の　み坂に立して　袖振らば　家なる妹は　さやに見もかも

（20－4423）
武蔵国・埼玉郡上丁藤原部等母麻呂

3－1　色深く　背なが衣は　染めましを　み坂賜らば　まさやかに見む

（20－4424）
妻の物部刀自売

足柄山といふは、四、五日かねて、恐ろしげに暗がり渡れり。やうやう入り立つふもとのほどだに、空のけしき、はかばかしくも見えず。えもいはず茂り渡りて、いと恐ろしげなり。

「更級日記」

① 夫婦問答歌（郷里出立時に詠む）
② 夫婦別姓（正倉院文書の戸籍より）
③ 紐・帯・針・衣の景物が多い

＜防人の妻・夫の悲報に慟哭する歌＞

この月は　君来まさむと　大船の　思い頼みて　いつしかと　我が待ち居れば　黄葉の　過ぎて　い行くと　玉梓の　使の言へば　蛍なす　ほのかに聞きて　大地を　ほのほと踏みて　立ちて居て　ゆくへも知らず　朝霧の　思ひ迷ひて　丈足らず　八尺の嘆き　嘆けども　験をなみと　いづくにか　君がまさむと　天雲の　行きのまにまに　射ゆ鹿猪の　行きも死なむと　思へども　道の知らねば　ひとり居て　君に恋ふるに　哭のみし泣かゆ

（13－3344　作者未詳）

反歌

葦辺行く　雁の翼を　見るごとに　君が帯ばしし　投矢し思ほゆ

（13－3345）

布浦さん

万葉の旅、今年もありがとうございました。

布浦さんは外れのない、いつも当たりくじを引かされる安心感があります。

今回の万葉の旅もそうでした。事前の準備も数回にわたり様々な方々との交流を見事に織り込んできっちり仕切られた時間の中で様々な観光あり、交流有り、施設の見学有り、そして何よりも万葉の懐の深さをじっくり味わわせて頂きました。防人に関する様々な知識を学びました。

１３００年前の日本の姿（政治であり、庶民の生活であり、自然であり、文化であり）の様々な一面をまるで目の前に彷彿とさせてくれるひとときでした。・・・・・・・

鹿島臨海工業地域、あの海岸の立ち並んだ工場群、タンク群は圧倒されます。生徒には教えていたものの自分でコンビナートを実感できたのは有り難かったです・・・・。

鹿島の軽井沢と言われるという「クッキングハウス」素敵でした。軽井沢と言わなくとも十分桃源郷です。穏やかな人と自然のマッチした絶妙のスポットです。間違いなく温かな、優しい気が流れているところです。この世にある全てが調和しているような感じを抱かせます。

「常陸国・防人歌碑めぐり」と題した今回の資料、全てがここに凝縮されています。

何時読み返してもそこから新たな感動をもらえるような気がします。ありがとうございました。

仲野さん

二日間にわたりバスの運転、ご苦労様でした。おかげさまで本当に快適な旅をさせていただきました。また、あなたの見事なハンドルさばきに驚かされもしました。本当にお疲れ様でした。

H24 年 11 月 25 日　参加者感想メールより

＜実践報告　その３＞

「教育コーチング」

ナカジュク（東京都：板橋区）
仲野　十和田

2010 年 5 月のＪＫＫ総会の後の研修会において仲野氏の講演が行われた。仲野氏は 2006 年からコーチングをに関わり始め 2009 年には日本青少年育成協会の教育コーチング準上級を取得。自塾での生徒育成はもちろん塾以外の様々な分野においてもコーチングの手腕を発揮されている。

「自ら考え、自立できる能力を養い、本人とって最適な仕事に就かす」
という教育目標がナカジュクにあります。子どもを『自立』させることは、塾を始めた当初より、大きなテーマでした。

十数年前に、日本の企業に取り入れ始められていた『ビジネスコーチング』に出会ったときは､衝撃を受けました｡社員が自ら動く構造がそこにあったのです。運よく、ある勉強会で一緒になった青年が、アメリカでコーチングの仕事をしていて、日本で起業するというところだったので、初めての顧客となり、幸いにも格安で半年間トレーニングを受けることができました。

スタッフとの会話は、このような感じです。
スタッフ「今度の入試説明会は、いつやりますか」
私「あなたは、いつがいいと思う？」

スタッフ「講演はどなたを呼びましょうか？」
私「あなたは、だれを呼びたい？」

次回からは、まずは提案を作ってからの会話となるので、話は早いです。私が心がけているのは、できるだけスタッフの提案を尊重することです。そうすることで、責任と行動力が生まれるからです。私が、以前失敗したようなことがあっても､生徒や保護者に直接迷惑が掛からない限り､実行させるようにしています。「失敗」という経験を奪うことは、結局将来的に大きなミスに繋がると思うからです。

私は、しばしば

「良くそんなに任せることができますね」

と言われることがあります。

大きな声では言えませんが、総務部の責任者には、自由に使えるよう、クレジットカードも持たせてあります。私が決済をすると、何でも「いいよ」と言ってしまいますし、何を買ったかわからなくなるほど、金銭感覚が疎いのに比べ、任された人は、慎重にご家庭からいただいた、お月謝の使い方を考えてくれます。

話は変わりますが、私は、塾を始めて1年少々経ったころ、病気で半年ほど入院しなければならないことがありました。当時生徒数は、30 人ほどでしたが、閉鎖を覚悟していました。ところが、大学生だった友人が、1 名の退塾者も出さずに乗り切ってくれたのです。この経験は、「自分がいなければ、この塾はやっていけない」

と勝手に思い込んでいた考えなくし、肩の力が抜け、私にとっては、行動の幅を広げてくれる出来事となりました。

次は、生徒とのコミュニケーション例です。

私「テストどうだった？」

生徒「70 点でした。」

私「70 点か。満足度は、何%位？」

生徒「60%位かな…」

私「じゃ、どうすれば 40%を埋めることができるだろう？」

生徒「試験前にもっと計画的にやりたい」

私「それでは、次回 100%にするための計画を立てようか？」

つまり、原因を自分で考えさせ、行動計画も基本的に立てさせます。コーチングを実践していると、時々「生徒のいいなりで、甘いのではないのか？」と質問を受けることがありますが、決してそうではありません。自ら目標を立てたところへ到達するために、自分の行動と結果に責任を持つことが課せられますから、どのような結果が出ても他人を責めることはできません。というより、本人が選択したものなので、納得せざるを得ないでしょう。受験校の選択の然りです。学校、親、塾から色々な情報が入ると思いますが、最終的に本人が選択したという意思を持たすよう心掛けています。もちろん、親の意見は最優先します。そちらに傾くよう、最善の情報も与えます。ただ、それでも子供の意思が強い場合は、

親御さんを説得することにしています。

さて、私が塾を始めたころは、それなりに厳しい指導を行っていましたので、かなりの割合で、成績が上がっていたと思います。ところが、高校進学後、成績が振るわず､結局希望の大学に行けない生徒の報告を聞くことが､出てきました。あるいは、自分で勉強ができないので、また教えてほしいと、戻ってくる生徒が…。戻ってくることは、嬉しいですが、原因が芳しくありません。つまり、言われなければできない生徒を作り出していたのです。

コーチングは、この問題を解決するのに、最適でした。小さい時から自ら考え行動する力を付けておけば、あとは、自力で行けるものです。その結果、進学してからも学校で上位にいる生徒が増え、大学受験の成果もでてきました。高校生になって塾にくる生徒も、自主性を持って勉強をしています。

コーチングは、「聴く」「質問」「承認」の３つが大きなスキルとしてあります。その中でも「聴く」ことが、コーチングの極意だと思っています。実は、私は大人の前で話すことが苦手で、若いころは、話し方の本を読んだり、寄席に足を運んだりしたものですが、そう簡単に話がうまくなることはありません。逆に、覚えたてのギャグを使って恥ずかしい思いをしたりしたものでした。しかし､「聴く」ことは、意識さえあれば誰でもできるのです。「聴く」は〈十四の心できく〉と言われるように、相手の話をしっかり聴きます。そうすると、不思議と相手がどのような状態にいるのかが見えてきて、目の前にいる人にとって、最適な問いかけや、アドバイスができるようになってくるのがわかります。というより、しっかり聴いていると、相手が勝手に問題解決に向かっていくのです。そして、聴いてくれる人に対して、信頼感が生まれます。さらに言うと、目の前の人をしっかり感じ、どれだけ相手と一緒にいられるかで、信頼感が増してきます。例え、沈黙の時間が続いたとして、相手が居心地良くなるような空間作りが大切です。「この人は安全だ」と思ってもらえたら、それからは本来『人』が持っている能力が開花していく様子を、私は幾度となく見てきました。そして、最近「話し上手」と評価されることがあるのですが、決してそのようなことはありません。ただ、人の話をしっかり聴いて、それに対して会話をしていくと、不思議なもので、そう思われるのかもしれません。

コーチングでは、「過去と他人は変えられないが、自分と未来は変え放題」ということを言います。決して、相手を何とかしようというプログラムではありません。１つ例をご紹介します。「パパママコーチング」というテーマで、保護者会を

行った後、希望者へ個人的なコーチングを行いました。ある、中３生のお母さんで、学校でカウンセラーをされているとのことでしたが、とにかく息子さんへ対しての不満が多いようで、止まりません。そして、仕事柄いろいろと術は尽くしているとのことです。

私が最初に問いかけたのは、

「息子さんの良いところを５つ上げて下さい。」

でした。そのお母さんは、始めは全く出てきません。

「私なら息子さんの良いところ、すぐ言えますよ。」

実際、笑顔のとても素敵な生徒で、私は、とても癒されていました。

お母さんから、

「そういえば、お兄ちゃんが私を責めると、いつもかばってくれていました。」

そういうと、涙をこぼしながら、昔話しをしてくれました。そして、常にお兄ちゃんと比較して、高校を選択していることにも気づかれたようです。また、そのお母さんが、子どもへの愛情から、いろいろ不満が溜まっていたことも、同時に承認しました。数日後、その生徒と会うと、

「お母さんが､僕の行きたい高校へ行っていいって｡先生は何を言ってくれたの？」

と言われました。そのお母さんは、見事に自分を変えることができたのです。自分の希望する高校へは行かせられませんでしたが、それよりも大きな幸せを手に入れられました。

コーチングの話を聞くと､「うちは無理だな」とか、子どもが変わらないといって、諦める方がいらっしゃいます。しかし、これは『自分が変わる』プログラムなので、そのことを持ち続けられるかが、１つのポイントになると思います。

そして、相手の可能性を信じ､「できる」というところから関わっていくこのコーチングは、目の前の人とワクワクした時間が持てるようになります。

最後に、コーチングは、自分自身で「責任」を取るという厳しい立場から､「自由」と「自立」を手に入れるスキルであると、私は思っています。

＜実践報告　その４＞

「今、塾は何をすべきか」

青藍学院（東京都：杉並区）
林　政夫

林先生は昨年のＪＫＫの総会後の研修会にて自塾の様子をお話し下さいました。その後その研修会でのお話聞いた、会員の仲野先生が私塾ネットとＪＫＫの共催で　主に若い先生達を対象に研修会を行いました。そして今年５月には茨城統一テスト協議会において総会の際の研修会で発表されています。

一、はじめに

１．平成 15 年から青藍学院は変わりました。小４から中３までの１学年の定員を１４名としました。チラシは一切出しません。募集はすべて口コミです。それでも、特に小４については２月に始まる新学期のお知らせを内部のご父母にお知らせすると同時にすぐに定員になってしまいます。ここ数年は前の年の 12 月には一杯になるという状況です。なぜか、1 学年わずか 14 名の生徒たちですが受験に向けてそれぞれが自分のドラマを作るからだと思っています。そして結果として成績が伸びてそれぞれが納得のいく受験ができるようになるからです。塾としてまだまだ未塾ですがこれまでの様子をお話しさせていただきます。

２・青藍学院では受験(勉強)を通じて考え方を学んでほしいと思っています。今の日本は経済のグローバル化が最優先しています。そこから多くの価値判断がなされています。勝つか負けるか、損か得か、効率的か非効率的か、などなど。その結果たくさんの大切な心や思いがないがしろにされてきたように思います。人を思う心、共に生きる喜び、自然を感じる力など、そして何よりも自分を大切にする心です。いま現象としてたくさんの忌まわしい事件や出来事は多くの場合そんなところに起因しているように思えてなりません。また自殺者がここ１４年間も連続して３万人を超えています。こういう時代に私たちはこれからの子供たちに何を伝えるべきなのでしょうか。ある人は「教育とは土壇場になった時に生きていける力を授けることだ」とおっ

しゃっています。まさに「生きる力」です。私なりには更に「笑顔で生きられる力」であるとも思っています。子供たちが喜びにあふれて生きていく姿を思い浮かべたらなんと素敵なことでしょう。そのためにはそれぞれの持っている個性を大切にしながらも物事の考え方を教えていかなければなりません。その考え方とは子供たち一人ひとりが自分の持ち味を十分に発揮できるような考え方でなければなりません。勉強を教えながら、成績を伸ばすのではなく、物事の考え方を身に着けさせるのです。

二、青藍学院が考えていること

1．子供たちに対して

1）コップを上向きにする

コップを上向きにさせるという言葉があります。子供たちは日々様々なストレスを抱えています。家庭、学校、友人関係など。そんな子供たちの心の中が様々な問題を抱えている状況では本気で勉強に向かうことはできません。もちろん授業も上の空、あるいは斜に構えたまま。これでは何のために塾に通っているのか。ただ無駄なお金と時間を浪費しているだけです。かえって子供のストレスを増やしているようなものです。全国の学力調査にも出ています。富山、福井、新潟の地方の小学生の成績がいいのはなぜか。３世代同居が多いところでもあります。核家族の袋小路に入ってしまうような対立した親子関係に風穴を開け開放させるのがおじいちゃん、おばあちゃんでもあります。子供たちの安定した心の在り方が結果として学力を押し上げているのです。その意味では塾は子供たちの居場所としての役目を負わなければなりません。居場所とはただ居るというだけではありません。子供たちが安心して心を開放できる場であることです。そこには必ず笑いがあります。元気があります。

2）自分の問題として考える

例えば「継続することは大切だ」ということを教えられた時、多くの場合それはそういうものだとして頭で覚えるだけで終わってしまいます。でも頭で知っているだけで、それが生活に生かされなかったら何の役にも立ちません。小学生ならば漢字や計算、中学生ならば英単語など今自分が取り組んでいる毎日の勉強の中でそれをどうやって継続するか。日々毎日の生活の中で悩み、迷い、意識してそれを実践する中で初めて大変さを味わいます。また結果として高い点数が出ることによって確かに続けていけば

成果が出ることを学び取るのです。青藍学院ではだれかいい点を取ると自然にほかの生徒から拍手がわいてきます。「継続することは大切だ」ということが身を持ってわかるのです。こうして子供たちはこれからの人生でも何度も出会うであろう様々な問題の解決方法の一つひとつを身体で覚えていくわけです。

3）目的意識を持つ

毎日の勉強の大変さを味わい始めると次第に子供たちは「なぜ勉強しなければならないのか」という問題に突き当たります。もちろん受験だからしょうがないと割り切って進む子もいるでしょう。それはそれでいいのです。そのうち何かに真剣に取り組めば取り組むほどどこかで必ず同じ問いが出てくるはずだからです。生きていればどこかでぶつかる問題でもあるのです。いずれにしても自分なりに納得できる「何のために」がなければキツイ時でもしっかり前を向いて立ち向かうことはできません。そんな時青藍学院では授業中でも、問題が出てきたらその時を見計らって必要な話をしていきます。ここは教える先生一人ひとりが自分の身体を通した言葉で話すしかないと思います。誰かがこう言っていたとか何かにこう書いてあったでは、人の行動や習慣を変えるようなインパクトのある言葉は生まれてきません。

2．ご父母に対して

1）何のために受験させるのか

このことは機会あるごとにお父様、お母様に問いを発しています。よく「～中学、～高校へ合格させたいから」と言われます。そんな時「本当にそれでいいのですか、入ってしまえばあとはどうでもいいのですか。問題は入ってからそこでその学校生活が楽しく喜びとなるようなものにならなければ、入った意味がないのではないですか」とお尋ねします。学校の入り口と出口しか見ないような受験は子供たちにはなんの成長ももたらしません。合格したその学校でどうやったら活き活きと生活していけるか、あるいはその先大学やら会社やらでどういう生活、どういう生き方をしてほしいのか、考えなければならないと思います。

2）どういう子育てをしたいのか

「なぜ受験させるのか」という問いは、どうしても「どんな子供に育てたいのか」という問いにかかってきます。これについてはそれぞれの

ご家庭の方針がおありだと思います。ただもし教育が「生きる力」を教えるものだとすれば、どんな環境でもそれを受け止めて自分の力を発揮することができるような考え方を身に着ける必要があります。それは例えどんな学校に行くことになるにせよ、どんな会社になるにせよ、会社のどんな部署、どんな人たちの中で生きていくにせよ、それを受け入れて前向きに考え、皆と協調しながら自分の力を発揮していくことです。力を尽くしつつ出会った状況は受け入れる事を学ぶことも大切なことです。近頃では多くの原因が自分にあってもその状況に納得いかないとして不平不満になってしまうのは残念なことです。

3）受験に何を求めるのか

もしご自分のお子さんをどんな環境でも前向きに力一杯生きていけるような子供に育てたいとしたら、受験しようとするその子に受験を通じて何を体験させたらいいとお考えですか。青藍学院では受験勉強の日々を一つの人生の様々な場面として考えていこうとしています。自分の得意不得意が見えてきます。自分とほかの人のスタイルの違いが見えてきます。小テストなどを通して自分の詰めの甘さや頑張り方が見えてきます。頑張ることの充実感、努力が実って成績が伸びた時の達成感、友達の普段は見えない真剣な一面が見えてくること。そして何よりも自分の受験が家族や様々な人々に支えられていることを感じていくこと。そこに感謝をしながら勉強できる自分に幸福を感じること。自分自身にまだまだ気づかなかった力があることなど。受験を通じて獲得できる力は計り知れません。

3．なぜ勉強するの

「なんで勉強しなければならないの？」って聞かれることが時々あります。これは「なんで受験するの？」という疑問につながります。そしてその問いは「何のために生きているの？」という究極の問いに及びます。

もちろん答えは人それぞれでしょう。青藍学院ではこう考えています。

私たちはほかの人々と繋がって生きています。人と繋がらないで生きていくことはできません。そんな人とのかかわりの中で様々な学びや、刺激、喜びその他の生きるエネルギーをいただいています。まさに人とのかかわりがなければ人生があり得ないのです。もちろん自分も含め人間はこの地球の様々

な営みの中で生を受けています。様々な生き物、物質、その他目に見えないもろもろの存在物によって生かされています。日本人は古来そのことを「お陰様」という言葉で表現してきました。そして「お陰様」と言って手を合わせるとき、そこには感謝の気持ちが表れています。私たちは今この場に生かされていると同時にそのことに感謝して生きることに喜びを感じています。私たちが生きているのも実はお陰様を感じて自分の周りの人々に何かお役に立つことが一つの生きがいになっていると思います。自分の力で誰かの役に立ってその誰かに感謝されたとき、私たちは大きな生きるエネルギーをいただきます。自分の存在感を感じます。共に生きることの喜びを感じます。そんな活き活きとした生き方をするために私たちの人生はあるはずです。誰かのお役にたつために私たちは自分の力を磨くのです。自分もほかの人もみんなが笑顔で生きられるような生き方をするために自分の力を使うのです。勉強はそのために必要です。受験もそのためにするのです。であるならば、受験勉強の１年、２年はそのための訓練の場と考えていいと思っています。

三、青藍学院の実践

１．対生徒

１）青藍イズム：「返事はハイ・みんなと挨拶・MD 禁止」

（M は「無理」、D は「出来ない」）

教え方にはいろいろあるとは思いますが、青藍学院ではこのように考えています。①物事を学ぶ人間は素直でなければならない。素直な人間が最後は一番伸びる。これは勉強に限ったことではありません。会社においても素直に「ハイ」と返事して、まずはやってみる新人は必ず伸びます。上司としてもそんな部下に仕事を頼みたくなります。②また、この世で生きていくのに挨拶ができないことは悲しいことです。ただ言葉を交わせばいいというのではなく相手の顔を見て、できれば笑顔で言葉を交わせたらなんて楽しいことでしょう。仕事でもそうです。大きな仕事は一人ではできません。より多くの人々と関わり、より多くの人々の力を借りなければなりません。みんなで力を合わせて成し遂げた仕事はその達成感もひとしおです。より深い喜びを感じるためにも人と関わることはとても大切なことです。③さらに、近頃では子供たちだけではなく大人の世界でも物事を否定的に見る傾向があるように思います。そんな中、まずはやってみる。やってできなかったらそこで考える。工夫する。

そんな歩み方をしていけたらきっと一層深い達成感を得られるはずです。「無理」「出来ない」を特に小さなうちから使わない子でいてほしいのです。もちろんそのためには失敗は叱りません。むしろ挑戦したことを褒めてあげられる環境を整えたいのです。

青藍学院ではこの「青藍イズム」を教室、自習室、受付に貼ってあります。ただ貼っているだけです。大切なことは塾の空気です。そういう空気の中で子供たちと過ごしたいのです。家庭での子育ては家庭の空気が大切といわれます。まさに塾の空気が問われています。

2）感想ノート：小５～中３まで、授業終了後にその日の感想を書かせます。内容は何でも構いません。自由に書いてもらいます。その授業の担当教師がそれに対する返事を書きます。様々な悩みを書く子、楽しい出来事を書く子、どんな時でも前向きに発想する子など、その時々の子供たちの様子がつかめます。クラス一斉授業でありながらノートを通じて一人ひとりの生徒と対面しています。

２．対父母

1）クラス懇談会：受験学年は年３～４回、そのほかの学年は年２回

子供たちの環境づくりです。青藍学院の思いを理解していただく場でもあります。特に中学受験ではご父母の影響はとても大きく、私たちが目指す受験はご父母のご理解なしにはあり得ません。例えば懇談会に参加されたご父母に「どんな子供に育てたいのですか」と質問します。「それではこういう人間になってほしいと思うことを紙に書いてみてください。」 お母さんお父さん方はいろいろご自分のお子さんに対する思いや注文を書きます。優しい人、努力する人、親を尊敬する人など。「さて、お母さん、皆さんご自身は今そういう生き方をなさっていますか」とお聞きすると、あっと言ってその紙をじっと見つめてしまいます。

親はどうしても子供に期待をしてしまいます。でも基本はその子を授かったこと、子どもが健康でいることが喜びであることに気づいてくれたなら、子供たちはもう少し楽に生きられます。もっと活き活きと受験勉強ができます。

2）個別面談：受験生は年３回、そのほかの学年は年２回

この回数に限らず、必要とあれば何回でも面談をさせていただきます。

1 時間、1 時間半に及ぶこともあります。一人ひとりのご父母と向き合える絶好の機会です。お母さんはどうしても子供に期待をします。それはそれでいいことですが、そのために子供がつぶれそうになることもよくあります。例えばご両親が忙しくてなかなか余裕がないことがよくあります。そんな時どうしても要領よくとか効率よくとかを考えがちです。「早く～しなさい」「何時までに～しなさい」です。仕事上の効率、要領を家庭に持ち込んでしまいます。仕事が良くできる「テキパキお母さん」ほど危険信号です。そうすると子供は反発しだします。そんな子供に手を焼くお母さん。よくある光景です。仕事と違って家庭の中は優しさが支配していいのでは。同じ兄弟でもみな違うのですから。子供たちがどうのびのび生活できるかは家庭の影響力が絶対的です。そんな時「作戦会議」をお勧めしています。勉強で何か問題が発生したとき、「だからあれほど言ったじゃない」「あなたはいつもこうなんだから」と言って子供を非難するのではなく、「困ったわね。あなたならどうしたらいいと思う」という前向きの方向で子供に考えさせることをお勧めしているのです。問題が起きたときその原因を探るのではなく「ではどうやって解決するか」、解決策をいつも考えることが大切です。子どもの視点に立って解決策を考えさせることです。そして子どもから出てきた提案を受け入れる事です。親子の仲はずいぶんよくなります。面談の翌日の子供の表情はとても明るくなります。母親は強しです。

3）青藍父母クラブ（通称 SPC）：毎月第２土曜日実施

ご父母と一緒の勉強会です。もう１０年以上になります。昨年１２月で

100 回になりました。様々な困難を乗り越えた方々の生き方をご父母の皆さんと一緒に学んでいます。お子さんが卒業しても SPC には通い続けていらっしゃるお母さんもいらっしゃいます。時にはお父さん方のご意見がとても参考になります。

3．対地域

まだまだ地域に何かお返しをしているとは言えない状況ですが

年１回の講演会は地域の方々にも呼びかけておいでいただいております。これまでは、覚張利彦氏　中井俊巳氏、呉善花氏、中村文昭氏などにお話をいただきました。今年は喜多川泰氏の予定です。

また昨年100回を迎えたSPCには少しずつ地域の方々にもご参加いただいております。このあたりはこれからの青藍学院の課題でもあります。

４．受験生の１年の流れ

１）受験生オリエンテーション：小６－２月、中３－３月

いよいよ本格的な受験勉強の初めに当たり、ご父母と子供たちを一緒に集まっていただきます。普段はご父母だけのことが多いのでこの日は子供たちは緊張します。この１年間の勉強の仕方やこの１年間で何を獲得しようとしているのかをお話しいたします。「なぜ勉強するのか」「なぜ受験するのか」というお話をさせていただくのです。この日はお家に帰ってからご両親とお子さんとでこの１年の受験勉強について過ごし方や志望校などについて話し合っていただきます。その後クラス懇談会や個別面談などを経て夏までに授業中に様々なお話をしながら気持ちを高めていきます。

２）夏期講習・合宿

毎日が宿題の多いキツイ日々が続きます。それでも子供たちはこれまでの授業中に聞いた様々な話の中から自分なりに頑張ろうとして必死です。

合宿は３泊４日の朝から晩まで１日１０時間以上の勉強です。合宿では初めに各人が期間中の目標を立てます。その中の一つはみな共通して「For the people」です。４日間の共同生活の中で誰かのお役にたつことを学びます。わからないところを教えあったり、食事の時にみんなのご飯をよそったり、食事の後の片づけをしたり、自分が使った洗面所をきれいにしたり、誰かのことを考えるのです。合宿の最終日は全員でお世話になった合宿所のトイレ掃除から教室、風呂、部屋、廊下までみんなできれいにして帰ります。お役にたつ喜びも学びます。またこの合宿が終わるころには中３と小６の子供たちはみんな仲良くなります。行く前にどうなることやら心配顔だった子供たちも帰るころには自分なりにやりきったという達成感とともに自信をつけて帰ってきます。

３）自習室

９月になるといよいよ自習室が賑わいます。基本的には受験生は自習

室で毎日勉強します。塾の授業のある日もない日もです。学校が終わって小６は４時半から８時半頃まで。中３は５時頃から１０時半頃まで。授業があるときは教室に行き、授業が終わればまた自習室に戻って勉強します。ですから子供たちはほとんど家では勉強しません。基本的には家は家族の団欒の場です。受験が終わってお母さんから「うちの子供は家ではほとんど勉強していなかったので本当に受験生だったのかしら」という言葉を頂くこともあります。もちろん合格がそれを示しています。

４）冬期講習に入るころはもうすでに皆いっぱしの受験生です。志望校も決め過去問もやり、自分の問題点も見据えそれなりに腹をくくります。大晦日の STT(Seiran Total Test)という朝から晩までのテスト尽くしでは、毎年なにも言っていないのに、去年の先輩たち(中１生と高1生)がそれぞれ思い思いに差し入れを持ってやってきます。そして自分の去年の受験勉強をみんなの前で話していってくれます。受験生はここでさらに闘志を燃やします。

５）小６最終授業そして入試

年が明けて１月末の小６最後の授業ではみんなに作文を書いてもらいます。それまでも何度か事あるごとに作文は書いてもらっているのですが

最後の作文はテーマが決まっています。これまでの自分の受験勉強が、家族をはじめどれだけたくさんの人々に支えられてきたかを感じてもらうのす。受験当日入学試験の会場である中学校の門で塾の先生たちが受験生たちに握手をしたり、鉢巻きを締めて大声をだしていたりします。

青藍学院の生徒たちには何もいりません。子供たちは家族や自分を応援してくれている人々に対する感謝の気持ちを心深く持っているからです。自分が何かに挑むとき余計な気負いは必要ないのです。穏やかな感謝の気持ちが最善を尽くすための大きなエネルギーであることを子供たちは知っているからです。

６）ご苦労さん会＆「出藍式」

中３の高校入試も終わった３月の日曜日。小６、中３の受験生と都内の遊園地へ行って思いっきり遊びます。こういう勉強以外の行事は ４月にも高尾山に登ったりしますが、この３月の解放感は格別です。

そして同じ日、遊園地から塾に帰ってから出藍式が始まります。この時は受験生のご父母にもおいでいただきます。青藍学院はご推察の通り荀子の「出藍の誉れ」からその名をとりました。「青藍」は鮮やかな藍色を表します。青藍学院で育った子供たちが藍以上に鮮やかに青くなることを願ってこの式を行います。ここでは再度なぜ勉強するのか子供たちに語りかけます。皆さんに何のために生きていくのか青藍学院の思いを話します。そこで「志」と「夢」の違いをお話しします。よく小さな子ども達にあなたの将来の夢はと聞くと「サッカー選手」とか「お医者さん」とかなりたい職業をどんどん応えてくれます。とても良いことです。ただ中学生や高校生になってからはこれだけで良いはずがありません。

サッカー選手やお医者さんになってどういう事をやりたいのか、どんなサッカー選手、どんなお医者さんになるかが問題です。青藍学院の考え方からすれば誰かのお役に立てる人です。サッカーをやって有名になったり、お金持ちになったりすることではなく、そのサッカーを観る人々に感動を与えられるようなサッカーが出来る選手になることではないでしょうか。お医者さんになってたくさんの患者さんに喜んでもらい、周りのお医者さん、看護師さん、事務をする方々など様々な方々とともにがんばれるお医者さんではないでしょうか。つまり此処には「利己」ではなく「利他」の心があるかどうか、それが「志」と「夢」の大きな違いだと思っています。青藍学院で学んだ子ども達にはこの「志」を持って出藍してほしいのです。

　そしてなによりもこの出藍式は私たち塾の職員が子供たちやご父母の皆さんに様々なご指導をいただいたことを感謝する大切な時でもあるのです。

四、最後に

１．　教えるとは人の人生・生き方に影響を与えることです。塾で教えるとは勉強を通じて、考え方、物事への取り組み方、生き方を教えることです。もちろん完成した生き方などあろうはずがありません。とすれば完成した教え方もないと思います。子供たちの前に立つ者が己の生き方の中で示すしかありません。それはその示す方法が人それぞれ異なることを意味します。私たち子供の前に立つ者がその個性によって示すものです。

つまりその人らしい、その人の活き活きが出るような教え方であることが大切であると思います。まずはそれぞれの先生が楽しいこと。それぞれの先生が明るいこと。それぞれの先生が喜びを感じながら子供たちの前に立てることです。

２．　教える人間に必要なのは方向性を間違えないことではないでしょうか。それぞれのスタイルで教えるとしても、何のため、誰のために教えているのかという１点だけは外さないようにしなければなりません。少なくとも青藍学院ではそのことだけは共通の認識として持っていきたいと思っています。青藍学院には「教師青藍イズム」と「職員青藍イズム」があります。青藍学院というとても小さな塾ながらそれをよりどころにして生きている人間の心のよりどころです。最後にそれをご紹介したいと思います。これらは「青藍イズム」と同じようにただ壁にかけてあるだけです。

「教師　青藍イズム」

「いつも笑顔で　　素直に褒める　　なくしてならない向上心」

「職員　青藍イズム」

「すべてが善いこと　すべてがチャンス　明るく動けばすべてが変わる」

＜附＞今年の春に卒業した中３生のアンケートの一部を載せます。

＜H23 年度青藍学院中３アンケート＞

平成２４年３月３０日実施

１.受験で一番大変だったこと。またそれをどうやって乗り越えたか。

・塾に行きたくなかったとき→散歩ついでに行くのりで行ってみた。
夏休みの合宿→塾長やマキコ先生たちが夜遅くまで残って教えてくれたから乗り越えられた。（中３女子）

・過去問が全然できなかったこと。それと、学校で自分の勉強すること。
先生に相談したり、塾の子と楽しい話をして、気分転換をした。
これでもかって位泣いて気持ちをすっきりさせた。
やっぱり個別じゃなくグループだったから、慰め合ったり励まし合ったり

競い合ったり喜びあったりできたので、その存在自体が自分の心の支えったんだと思う。(中３女子)

・やらなくちゃいけないと自分でも分かっていて、分かっているからこそ勉強から逃げようとしていた時期があって一番精神的に大変だった。学校から家に帰って来て、ゆっくりするとどうしても勉強から逃げて違う事をしてしまうから、帰ってすぐに塾の自習室にいくようにした。「逃げるな、前向け、走り抜け」の言葉を心がけるようにした。家のテレビ放送を見られないようにした。(中３男子)

・自分がやってきたことに自信をもつこと。あまり強い意志を持って勉強していたわけではないと思っていたから、自分に自信がなかった。でも塾長達の話を聞いて考え方から変えようと思った。自分が小さいことにいつまでもこだわっていると気付いた。今までやっていたことは事実だし、過去や未来を考えたって不安にしかならない。そんな暇があるなら今をやれるだけやってしっかり受け止めればいいと考えるようになれた。(中３男子)

・先生に復習ノートを作らずに来て怒られて帰らされたこと。帰らされた後に一人で考えて、やっぱりやらなければやらないと思い復習ノートを作った。最終的に復習ノートは作って役に立ったので作って良かった。(中３男子)

２．受験で一番楽しかったこと

・もう毎日が楽しかった。とくに、ごはんの時や、自習室でみんなと勉強している時は本当大好きでした。てか、すっごく楽しかったです。卒業したくないですよ。あと、受験日の前の日。みんなが応援してくれたから。みなさんありがとうございました。(中３女子)

・塾の友達と色々な事を話したこと。あとは合宿！！みんなでやり切った！！って感じがして「きつい」ときかされていたのにすんごく楽しんでやれた！！それはみんながいたからで、誰も弱音を吐かなかったからだと思う。英語大会も楽しかった。そして、毎日のお弁当 TIME は私の安らぎの時間になった！

（中３女子)

・夏期講習でも合宿でも冬期講習でも入試本番の前日まで、塾のみんなと一緒に勉強できたこと笑っていられたこと。(中３男子)

・塾の仲間や先生と一緒に勉強したり笑って話したり、色々な楽しいことが

あった。どんなに辛いことがあっても、塾にきたら大丈夫だと思えた。難問や苦手なところを教えあったりすることも楽しかった。受験だって、その結果だってしっかり受け止められるようになった。もう塾に来て帰るまで楽しかった。（中３男子）

・過去問とかやっていて、良い点がとれたり、問題を解いていて、「わかる！」って思ったとき。あと合宿！！合宿が一番楽しかった！勉強ばっかりだったけど良い思い出です。講習も楽しかった。（中３女子）

・夏期講習でも合宿でも冬期講習でも入試本番の前日まで、塾のみんなと一緒に勉強できたこと。　笑っていられたこと。（中３男子）

３．受験を通じて得たこと、学んだこと

・良い悪いはなく、それはただ自分が比べているだけ。ありがとうとかのプラス思考～うれしい・楽しい・幸せだ・ついてる・大好き・ありがとう～人間やればなんとかなる。それでできなかったらまた次に行く（終わりではないよー)。　そして素直が一番良いこと。

自分がどれほど幸せなところに住んで、どれほどおいしいごはんを食べ、どれほどやさしい人たちに囲まれているか。自分って自分だけじゃ生きていけないんだと思った。あと、プラス思考は本当に大切なんだと分かった。最近は「やだなー。でもー」ってするようにできた。でも本当につらかった時は、そういった考えができずにいたから、まだなりきれてないんだと発見できた。そして、「勉強は人間的成長のためにする」ということも知った！！（中３女子）

・自分を応援してくれる家族や友達、先生やとにかくいろんな人に支えられてることを学んで、そんな人たちに感謝する思いをもつことができた。思っていたより自分は努力できる人間で、自分で自分のことを努力しない人間だと型に

はめ、それを言い訳にして努力から逃げていたことに気付いた。

人生どんな状況になってもそれが自分の望む状況じゃなくても、見方次第で道は開けるということ。

マイナスな言葉を言わないことが習慣になった。やっぱり努力は裏切らないと学んだ。（中３男子）

・塾長がよく言うように、受験で終わりじゃないことを学んだ。結果はどうであれそれを受け止めてこれから先に生かせるようにすること、受験を通して

成長することができた。高校だけじゃなく、これから大学受験もあるのだから、今を精一杯頑張って、そこでまた一つ成長したいと思った。(中３男子)

・他人への気遣いと忍耐力と学力。
あと道徳。大人の階段を上った気がする。(中３女子)

・受験期間は自覚してないうちにイライラしやすくなっていた。
嫌いだと言っても合格したときは家族にすぐに報告したくなってたまらなかった。家族は一番大切な存在だと実感した。(中３男子)

・どんなに辛くても、まわりには私を応援してくれる人がいて、その人たちのおかげで今私は頑張れているんだなとか、生きていられるんだなっていうのがわかりました。また、考え方一つでいろんなことがわかっていくっていうのも学びました。ネガティブだったのにポジティブになりました。
マイナスの言葉も言わないようになりました。(中３女子)

・環境に左右されない強い意志。
やっぱり大切なのは自分で、周りは自分で変える・・・というか作り上げるみたいな。つまるところ大事なのは自分ってことねー。自分のおかれた状況を受け入れ楽しむ事も学んだ。(中３男子)

４．あなたにとって青藍学院はどんな塾

・なんか塾にしておくのはもったいないところ。
みんなやさしくて温かくて、ずーっと笑っていて、時たま泣いたり、怒ったりできる自分を表せられる塾！！
あと、何か変わっている塾。どことも比べたくない塾だし、おすすめNO1！！！
もう一回中３になってもいいですよ。あと塾長が不思議な塾です。やりたいことがたくさん見つかる場所です。(中３女子)

・もう一つの家、もしくは帰りたいと思う場所。ここで学んだことは勉強よりも大切な物がたくさんある。今の自分の半分以上がこの塾で形成されていると思う。「うれしい、楽しい、幸せだ、ついてる、大好き、ありがとう」と「MD（無理、出来ない）禁止」はこれからもずっとずっと覚えていって、活用していきたいと思う。(中３男子)

・特殊な塾。小学校の友達に教えてもらって入ったけれど、入ったらすごく面白い塾だった。なにか嫌にはならないものを持っている気がする。もしこの塾にはいっていなかったら、人生は変な方向に行っていたかもしれないと思うぐらい私の人生に大きな影響を与えた存在。本当に青藍学院で良かった！

自分をここまで鍛え上げてくれた先生達に感謝です。今まで現実から逃げてきた自分にはり手をくらわす良い機会になりました。
本当にありがとうございました。（中３女子）

・家みたいなあったかい塾。みんなとっても優しくて明るいから、とても居心地が良かったです。辛い時とかは「早く塾に行きたいな」と思いました。本当に楽しかった！もう毎日が思い出だ！（中３女子）
家みたいな塾。楽しくておもしろくて、みんな家族みたいな感じがしました。「卒業したくないよお」　　（中３女子）

・自慢できるような塾！！
学校で「私の塾つまんな～い」とかきくと「私の塾はみんな仲良くってサイコーだよ」とすぐ言ってしまう。プラス思考もわたしがやっていたら、クラスの人段々プラス思考になっていった！！なんといっても先生も生徒のこと思っているし、勉強ばっかり教えている大手会社とちがって人生や今後のこと考え方などもしっかり指導してくれるのでいい！！あと私が社会貢献の仕事に就きたいと思ったのも、この塾のおかげだから夢をあたえてくれた塾でもある！
（中３女子）

・勉強のやり方や問題の解き方のような技術だけじゃなくて、精神面でも人生観だとかいろんなことを教えてくれる道場みたいな存在でありながら、いつも笑顔が絶えない塾。先生も生徒もみんないい人間ばかりの塾。
他の塾じゃありえない温かさがあって、ほんとうに居心地の良い塾。
（中３男子）

「本当に腹の底から喜びが湧いてくるような生きがいを感じられたら、それこそが最高だと思いませんか。そうなるためには、『楽しさ』『充実感』『達成感』の3つが必要です」

この3つを同時に感じられる時は、「人に喜んでもらったとき」と林先生。人の喜びは自分の喜びでもあり、達成感や充実感を味わえる。するとこちらにも、生きるエネルギーをもらえることになる。

「なぜ、喜んでもらうとエネルギーが出るのか突き詰めてみると、『おかげさま』という言葉が出てきます。親、友達、地域、社会、自然、宇宙…に感謝する。感謝することは、幸せを感じて生きていられること。私にとっては、人に喜ばれる生き方が一番楽しいのです」

若い講師の方の参加が多かった今回のセミナー

では、どうやって人に喜んでもらえるか。それにはまず「自分に何ができるか」を考えるから始める。そうやって自分を見つめながら学んでいく姿勢は、前向きに生きることでもあり、人とかかわることでもある。最初に話した学ぶ姿勢につながっていくのだ。

「夢と志の違いは、『人の役に立ちたい』と思うかどうかではないでしょうか。Jリーガーになりたいは夢。どんな思いでJリーガーになりたいかによって、夢は志になるのです。一流の選手は世の中に貢献しよう、人に喜んでもらおうという思いを持っています。ですので、私は志という言葉を使いたいのです」

子どもを育てるには塾の空気が大事

青藍学院は杉並区で27年間、一教室のみの展開。しかも1学年14人というスタイルでやってきた。子どもたちを中心に、父母、卒業生、そして地域の方々とのかかわりを大切にしている。

「我々、塾の講師や職員自身が素直になって、前向きでいつもワクワクしながら生きていることが、すごく大事だと感じています。父母の方にも『子どもを育てるには、家庭の空気が大事』とよくお話しています。家庭の空気とは父母の生き様そのものです。そのように考えて、塾の空気をつくるようにしています」

青藍学院では、年に3回、教務会を開いているが、教え方はあまり教えていない。講師が学ぶのは、どうやったらいい生き方ができるのか、だ。「自分がどんな人間かということが一番大事で、どんな教え方をするかではない」と、林先生は断言する。

青藍学院には「生徒」「教師」「職員」の3つの青藍イズムがある。教師のものは「いつも笑顔で」「素直に褒める」「なくしてならない向上心」だ。

「笑顔は子どもたちに安心感を与えます。素直に褒めることは、子どもたちを元気づけることにつながります。加えて、常に向上していくこと。教える側が慢心していると、子どもたちはすごく敏感に察します」

生徒青藍イズムが貼ってあるところに「無理っ！」と生徒の落書きが。それをあえて消さず、塾からのメッセージを添えて掲示してある

生徒に表彰状を渡しているが、生徒からも林先生や職員全員に表彰状が贈られた。卒塾する頃には、こうしたことが自主的にできる生徒に育っている

今回のテーマである「学道」とは、「教えるという行為から、自己の成長につながるすべてのことを学びとることである」と林先生は話す。

「大切なことは、教える側の我々が、どんな人とかかわりを持って、どのように生きているか。この塾で教えている我々の志の問題だと思っています。私は以前、生徒がやってくると『今、忙しいのに困ったな』と思っていたこともありました。今は『私を必要としてくれる人がいる』と感謝の気持ちでいっぱいです」

こうした塾の雰囲気に包まれて、生徒たちは人として成長していく。林先生は「ある受験生の軌跡」として、ほぼ原文のままで、小6の受験生とのやりとりを紹介した。最初はノートに「やだー」を連発していたが、林先生とのノートでのやりとりによって、意識が変化。何のために受験勉強をしているのかを理解できた頃には、マイナス発言は一切なくなった。精神的に大きく成長したその受験生は見事、志望校すべてに合格したのだ。

「学道は、あらゆる分野で教える立場にある人が、追求しなければいけない道だと思います。教えるという立場から、自分の生き方を追求していくことができたらと、常に思っています」と締めくくった。

教える人間がどのように生きているか 教師の生き様が生徒の学ぶ姿勢を育てる

私塾ネット&塾教育研究会（JKK）研修会

2011年9月9日㈮
於　東京・板橋区　ナカジュク板橋教室

9月9日㈮、ナカジュク板橋教室にて、私塾ネットの入試情報研究会と塾教育研究会（JKK）が共催で企画した研修会が開かれた。講師は青藍学院（東京都杉並区）代表の林政夫先生。私塾ネット関東代表＆JKK幹事を務める仲野十和田氏がJKKの総会で、林先生の講演を聞き、「塾の先生ってすばらしい仕事」と感銘を受けたのが、今回の研修会のきっかけだ。2ヵ月前からオファーをし、やっとこの日、実現した。

テーマはずばり「学道」。若い塾の先生方に向け、教える立場の人間の生き方こそ、学ぶ姿勢を伝えることになる、と力強いメッセージが送られた。

「私たちの職業って何でしょう」

冒頭、林先生はこう参加者に問いかけた。人の話を聞けない子ども、勉強だけがすべての価値基準になっている子ども、さらには子どもと対峙できなくて、教室に行けない教師、家庭のしつけの崩壊等々…。子どもを取り巻く状況が劇的に変化している。

「そんな中で、私たちは一体何をしたらいいのでしょうか。もちろん塾ですから、成績を上げて合格させてほしいという要望に応えてやってきました。そうすることで、子どもを育てる、考え方をしっかり持たせられると思っていたからです。ところが、ここ数年で、その考えは完全に逆転してしまいました。私たちが先にやらなくてはいけないのは、『人を育てること』だと思います。人としてきちんと生きていく術を教えないと、本当に学問を教えたことにならない。今の状況の中で人を育てるとは、『学ぶ姿勢（生きる姿勢）を育てる』ことに他になりません」

林先生は、学ぶ姿勢とはどういうものか、4つのポイントを挙げた。

一つは『素直さ』。言われたことはまずやってみる。それによって、自分の力が開かれていく。二つ目は『前向きな姿勢』。教育は何のためにあるのかという問いに、「人生の中でどうしようもなくなったときにでも、生きていける力をつけるため」という人がいます。人生の土壇場で前向きに考えられるかどうかにかかっています。人生同様、学びにも多くの場合、障害がつきものです。障害と向き合ったとき、嘆くことから何も生まれてこないこと。すべて自分の見方感じ方であることを知り、受け止め、前向きに考えることが、前に踏み出す最善の方法であることを学ぶのです」

三つ目は『人とのかかわり』だ。「私たちの生きるエネルギーは人とのかかわりの中から生まれてきます。喜びも、悲しみも、悔しさも、怒りも、すべての感情をエネルギーに変えて、私たちは生きているのです。自分一人ではできない仕事もたくさんの仲間がいてこそ、成し遂げることができます。人と共感できることは、人生を大きく前進させるエネルギーです」。

四つ目は『志』。林先生は、『志』は『夢』とは違うと話す。

「同じような意味の言葉に『夢』があります。夢も大事ですが、私は志という言葉を使いたい。夢を聞かれ、政治家や社長になりたいと言うのは、自己本位。自分がなりたいものと、志とは違います。志には利他の精神があります。これは何のために学ぶのか、何のために生きるのかと関連します。」

「人の役に立ちたい」それを追い求めるのが「志」

林先生は何のために学ぶのか、と聞かれたら、「笑顔でいきいきと生きるため」と答えると話す。

静かで丁寧な語り口の中にも、熱い思いが伝わってきた林先生の言葉

中3の受験生は宿題をやって来なかったりすると、塾から帰らせている。お説教は一切なし。ただ帰すだけだ。

「大人でもついつい失敗してしまうこともある。叱るだけではなくて、それからどう脱却させるか、どうやって乗り越えていくか、自分なりのスタイルを見つけることがポイントなんです。生徒には失敗したことをしっかり噛みしめて味わってほしい。1～2時間授業するより、もっと大事なものを子どもたちは手に入れます」

さらに受験生は11月から宿題が出ない。言われなくても自分で勉強する態勢になっているため、宿題を出す必要がなくなるのだ。

こうして学びの姿勢を身に付けて卒塾していった生徒は、進学先でも自分の力をのびのびと発揮している。林さんはここ数年、その成果が出てきたのを実感している。

「卒塾生のお父さんに偶然会って、『都立校に進学して、クラスでトップになりました』というお話を聞くと、本当に嬉しくなりますね。他にも私立中学に入学した生徒が学年末のテストで学年1位になった話、私立高校で数学が学校で1番になった生徒とか…」

●指導のポイント

学力をつけるためには、まず学ぶ姿勢をつくること。生徒が自分から学ぼうという態勢をつくることが、生徒の本当の学力向上につながる。

●運営のポイント

チラシをまかない、宣伝をしないことは、毎日が広告宣伝であることと同じ。1年1年生徒とちゃんと向き合っていることが、口コミ評価につながっている。

塾が父母と一緒に子育てをしてもいい

青藍学院には「SPC（青藍ペアレンツクラブ）」という勉強会がある。毎月1回、土曜日の夜に開催。多い時は14、15人の保護者が集まる。昨年の12月で100回を迎えた。「父母の方にも、自分の生き方に柱を持ってもらえたら」と思ったのが、始めたきっかけ。毎回さまざまな人物を紹介し、その生き方を学んでいく。

自習室は、机を一人ひとり使うことができ、小学生から大学受験生まで勉強しているので、緊張して勉強できる

自習室に置いてあるちりとりは、勉強した後、消しゴムのカスを片づけるためのもの

「塾がお父さん、お母さんと一緒に子育てをしてもいいと思っています」と林さん。今は仕事をしている母親も増え、仕事を家庭に持ち込むことが多くなったとも話す。

「先を読み、効率よく処理しようとすると、あれこれやることの指示を出してしまう。すると、いつも言われ続けている子どもはイライラするし、言ってもやらない子どもに親がイライラするという悪循環。子どもはまず授業に集中できなくなりますね。何を聞いても聞き流す。でも、これは子どもの自己防衛。そうしないともたないからなんです」

林さんは面談を通しながら、子どもの気持ちを伝えたり、こんな話をしたら子どもが喜びますよ、と提案したり、父兄と積極的な話し合いをしていく。個別面談は時には一人1時間から1時間半かけることもよくあること。

「どこまで家庭に踏み込んでいくかは難しい問題です。しかし、子どもたちのために、私たちは何ができるのかを第一に考えて行動する。この発想が大事。先生が前向きに一生懸命生徒とかかわっていけば、生徒は変わっていきます」

面談で親のかかわり方が変わることで、これまでさまざまな問題を抱えていた生徒たちが変わっていくと林さん。心のわだかまりが解決した生徒の目は輝き、「おやっ」と思うくらい明るくなる。

「学力を上げるためには、心が前向きにならないといけない。これができると、子どもは自立をする。特に小・中学生の頃は前向きに生きることはとても大事。受験勉強の機会を使って、どう一人立ちさせるか。これが本当の受験だと思いますね。そして塾を卒業する頃には、それぞれが自分なりの志を持ってほしいと思っています」

今後、塾をこれ以上、拡張する予定はない。質を上げていきたいと林さんは話す。

「現在、塾仲間の勉強会にも参加させてもらっていますが、今後は同じ想いを抱いている方たちとつながっていきたいと思っています。〝一燈照隅万燈照国〟という言葉がありますが、一人ひとりが、自分の持ち分に一生懸命取り組んでいて、そうした人が増えれば、やがて国は明るくなります。今はそうした勉強ができることが楽しいですね」

青藍学院から学べ！

受験を子どもの自立の機会に 学びの姿勢を身に付けさせて送り出す

広告宣伝は一切しないのに、新入塾生が募集開始初日に定員になる塾がある。東京都杉並区で開塾して27年目を迎える青藍学院は、中学受験と高校受験をメインにした進学塾。勉強ではなく、「学ぶ姿勢」を教えてくれる塾として、口コミで人気が広がっている。代表の林さんは、「家庭と塾が一緒に子育てをしたい」と話し、父母との勉強会も積極的に開催。自ら学びとる力をつけた卒塾生の姿に手応えを感じている。

入塾待ちの生徒も！ 生徒の心を変えて

林さんが開塾した当時は、業界全体が良き時代であった。生徒は順調に増え、3年目には第2校舎をつくった。現在の場所に移った時には8教室（第2校舎と統合）もあった。その後、教室数を半分に縮小。現在は1学年15人と生徒の数を絞って運営、生徒数は小4～中3の90人。口コミで生徒が集まる塾として知られている。

「前年度の11月に、『来年の募集は12月2日から始めます』と内部生に伝えると、初日に各学年定員の15名がほぼ埋まります。入塾を待っているときもあります」。そう語るのは代表の林政夫さんだ。

これほど支持されている理由は、この塾の指導方針、そして生徒へのかかわりの深さが関係している。林さんは「学力をつけるためには、まず学ぶ姿勢をつくること」と話す。

塾を縮小した8年ほど前。林さんはすべての父母と個人面談を行ったりするなど、これまで以上に密に生徒とかかわるようになった。そうしていくうちに、勉強をやらされている子どもは、受験が終わると学びが終わる。ところが、学ぶ姿勢が身に付いている子どもは、勉強しなさいと言われなくても、自ら勉強する。「まずは学びとる力を育てなければだめだ」と痛感した。

こうした学ぶ姿勢は、日々の授業をやりながら、林さんが生徒に話しかけることで培われている。

例えば、なかなか成果が出ない生徒には、やり続けることの大切さを話す。

「『どんな人が成功するのか。それは成功するまでやり続ける人だ。幸いここにはあなた以上に頑張っている仲間がいるじゃないか』と話します。その話が直接自分のことでないと思っている生徒でも『ああ、そうか』と、自分に当てはまることがたくさんあることに気づくこともある。集団指導のよいところはそういう点です」

青藍学院では集団指導がメイン。頑張っている生徒、問題を抱えている生徒等、いろいろな生徒がかかわりながら、刺激を受けながら成長していく。これが集団指導の最大のメリットだ。

青藍学院では、6月から小6・

入口では塾のマスコットが描かれている看板が生徒をお迎え

青藍学院（東京都杉並区）
代表 **林　政夫** さん

●プロフィール
大学卒業後、司法試験にチャレンジしながら某有名進学塾で指導を始める。その後独立し、1985年4月、東京・杉並の西永福に「青藍学院」を開塾。駅前に場所を変えながらも、一貫して西永福で塾を経営。

＜実践報告　その５＞

「たった１人の為の語学研修旅行」・・・仏紀行

稲穂塾（東京・大田区）
平林　一之

「フランスへ、行ってみようかな。」「えっ？」、「・・・・・塾長、一緒に行ってくれるよね！」彼女のこの言葉から、今回の旅は始まった。

都内の私立女子・中高一貫校に通う光波（みつは；高２）は、いつ頃からか、フランス語を学習し始めた。英語等、他の科目も成績優秀だったので、塾の教室の片隅でフランス語の「独習」を許した。どうもヨーロッパ中世の城に、魅力を感じ始めたのがその発端のようだ。仏語については、全く門外漢の僕の役割は、誘導役兼アドバイザー程度で、例えば彼女の通う学校の中で、大学時代に仏語を専攻した教員を探し出し、仏語学習のアドバイスをお願いしたり、仏語専門学校を探したりするのを手伝ったりする程度ではあったが、ことある毎に「光波よ、フランスへ行け！とにかく、先ずは行ってみよ。」と鼓舞奨励し続けた。結構挫折しやすい語学勉強（仏会話マスター）のモチベーションを上げる為に、「光波は、近々必ずフランスに行く！」と予言？（刷り込み？）の言葉を、意図的に繰り返した。夏休み等の長期休暇は、航空運賃・旅行代金が跳ね上がるからなあ、ゴールデンウィークを利用するのが一番安く行けるのだが・・・、と盛んに勧めたが、当時はまだ中学生ということもあり、皆勤賞狙いの彼女は、私の「挑発」？に対しても一顧だにせず、そのまま暫く時が流れた。そして今年の初め、冒頭のような言葉が、彼女の口から突然漏れた。意表をつかれ、こちらは少々ビックリしたが、ここで否定やたじろぐ訳には参らず、ほんの暫く間をおいて「よし、行こうか。光波、本当に本気？」。まだその時点では、親の意向や同意も確かめておらず半信半疑ではあったが、現実問題、先ずは、家内が同行できるかの日程的調整から始まり、次に光波の両親の了解の確認をとる為に、塾まで来てもらい説明と相談をした。３月末、HIS で航空運賃１１．５万円を支払った時点で、「いよいよ実現するのか」と、緊張と期待の入り混じった不思議な感覚を味わった。

ANA 機で１３時間のロング・フライトを終え、パリ・ドゴール空港に到着。フランスの地を初めて踏んだ彼女は感慨深げに、ふっと僕に漏らした。「とうとう、フランスに来ちゃったね！塾長の言った通りになったね」と。「私、はっきり覚えているよ。光波は、必ずフランスへ行く！」と、授業中何度か、クラスメイトの前で公言したことを。「言われた時の席の位置までも・・・。」

パリに着き、彼女（&家内）との欧州２週間の旅は始まった。フランス国内での様々なことは、できる限り光波に「任せる」ことを先ず彼女に告げ、前面に押し出して、ホテルのフロントでのやりとりや、パリ・メトロの切符購入から、乗り換え等々すべて彼女の責任とし、種々の経験を積ませた。出発前のホテルの予約も、彼女の役割だった。ベルサイユ宮殿・モンマルトルの丘・凱旋門・シャンゼリーゼ通り（ランチをここで)・コンコルド広場・オペラ座等、あちらこちら彼女のリードで連れていってもらった。臆病で慎重派・心配性の光波は、未知の様々なこと、初体験を乗り越え、日増しに自信を持ち始め、成長が目に見えるように変化していった。

４月２５日〔水〕～５月２日〔水〕　前半の１週間余りは、渡欧の本来の目的である「フランス語研修」ということもあり、パリをメインに St.Malo（サンマロ；西仏）とモン･サン･ミッシェル（彼女の憧れの地）に滞在。実は、塾の卒業生（３０代前半；敦子さん）が仏人と結婚し、サンマロに在住しており、里帰りの挨拶に、敦っちゃん夫婦が我が家を訪れた際には、光波も呼び寄せ同席させ、更にはメール等で両者の交流を図っておいたので、既に双方知り合いの仲になっていたこともあり、光波を敦っちゃんの家で Home Stay も経験させた。
旅の後半は、ミラノ（３日）～ベニス（４日）～ザルツブルグ（５日）～ミュンヘン（６日）と、３カ国を観光。ほとんど予約無し（ホテルも）だったので、交渉等のシンドイ面も無きにしもあらずではあったが、３人で力を合わせ無事切り抜けることができた。今どきの女子高校生にありがちな、友達の同行も求めず、親子でも無い我々夫婦と一緒に、２週間、よく我慢してついてきたのはエライと思う。

以下、帰国後、光波は、僕の問いに対し、以下のような回答を寄せている。
★☆楽しかったこと＊印象的だったことは？
パリのホテルでは、エレベーターの古い扉の開閉が手動だったこと。ヴェネチアのホテルでは、アンティークな家具に囲まれたこと、そして部屋の窓が広場に面していたため、朝から晩までのヴェネチアに住んでいる人々の日常を見ることができたことや、教会の鐘の音が聞こえたこと。フランスから TGV に乗ってイタリアへ向かう時、国境付近の駅で降ろされたこと。モンサンミッシェの言語表記が、フランス語、英語、日本語で書いてあるくらい日本人が多かったこと。
☆　ためになったこと
ユースホステルで出会った大学生の方々や、一人旅の方々のお話がとてもため

になりました。その人達が旅してきた他の国の話を聞いて、文化の違いやいろいろなことを考えました。私も今回、フランス、イタリア、ドイツ、オーストリアに行き、それぞれの国に独自の歴史、文化、言語、生活様式があることを実際に自分の目で確かめることができ、感動しました。

☆★つらかったことは？

列車の予約を日本でしていかなかった為、現地でやらざるをえず、それが結構大変でした。いろいろな駅に出向き、窓口での交渉。これも私にとっては初めてのことで、戸惑うことが多かったです。こういったような場合、私のフランス語だけでは到底不可能なので、英語も必要だと改めて実感しました。パリのメトロの窓口の対応は、あまり良いものではなく、これもつらかったことの１つです。最初は頑張りましたが、そのうちに怖気づいてしまいました。情けないです。また、ヴェルサイユ宮殿に訪れる際、電車の路線を間違え、目的の駅を通り過ぎてしまうなど、私の予習不足のために起きてしまったハプニングもありました。

☆　成長したこと

「なんとかなる」「どうにかなる」と、思えるようになりました。自分の知っている単語を使って、ゆっくりですが会話ができるようになったことです。

★☆新たな発見は？

ヴェネチアのアクア・アルタです。サン･ﾏﾙｺ広場の夜、ほとんど全部浸水しているのを見て本当に海の上にあるんだと思いました。フランスのマックカフェには､マカロンがあるということ｡(これは現地で出会った日本の方から聞きました)電車のドアは、ほとんど自分で開けなければならないこと。駅の出口には、改札がないこと。ドイツの列車が意外とルーズなこと。パリとヴェネチアの気温差など。

☆★フランス語の学習について、プラスになったこと？

やはり、私のフランス語が通じたことが何よりもプラスになったと思います。今まで､こつこつちまちま独学でやってきたのが報われた気がしました｡しかし、尋ねることができても相手の言ったことが聞き取れないことがほとんどでした。独学だから、会話の練習ができない……なんていうのは言い訳ですね。聞き取れないもどかしさのおかげで、もっともっとフランス語を勉強しなくてはならないという意欲が湧いてきました。それから、街でフランス人が話している会話がほんの少しだけ分かったことが嬉しかったです。

★☆ヨーロッパに出て初めてわかったこと

ヨーロッパには、長い歴史があるということです。こんなことは旅行する前か

らわかっていましたが、古い城や教会を前にすると、歴史の重みを感じました。昔の人と同じものを、日本人の私が見ているというのはすごいことだと思うんです。石造りの建物は、歴史が残るので好きです。

☆★個人旅行の手配などで感じたこと

海外への個人旅行は、幼少時に家族と行ったきりだったので、個人旅行の手配というのは初めての体験でした。旅行代理店へ行き、航空券の予約、ユーレイルパスの予約、ネットで現地のホテルの予約……。１つ１つに、いちいち緊張しました。しかし逆に、時間とお金があれば、意外と簡単に海外へ行けるのかも、とも思いました。ある程度の予約は日本でもできるので、次回からはもう少しスムーズに手配できると思います。

塾での学習は、概ね「試験勉強」が中心である。入学試験であったり、定期考査であったり、試験で高い点数を取り、学校の成績をアップさせる為の指導が、主であると言っても過言ではない。試験に出そうもない学習内容は、授業になかなか取り入れにくいし、学習の中心は矢張り「試験対策」だ。しかし、「学び」の本来は、試験に出るか出ないかとは無関係に、このような「自発的な学習」こそ理想であり、望ましいことは言うまでも無い。学習効果やその定着具合は、前者のそれとは雲泥の差といってもよいだろう。光波の仏語学習は、まさしく自発的な学習そのものであった。今回、たった１人の子ども（卒業生）の為に、我々夫婦は２週間もの間、塾・家を留守にし、費用面でも５０万円以上の金額を使った。しかし、将来を見据えたその効果を考えれば、お金や時間など、大した問題では無い。加えて、学校教育の中では到底ありえない、塾でしか実現しない「営み」でもあるとも言える。教育の在りよう（教育実践）として、これはひとつの「実験」であり、更に言えば、このような仕事に携わる者としての「ロマン」とも言える。このような滅多に無いチャンスに立ち会えた幸せを痛感しながら・・・、２週間の３人の旅は、無事終了した。

「一度、ヨーロッパの土地に足を踏み入れると、結構〈ハマる〉んだよね！大抵の人は、何度でも訪れてみたくなるようだよ。光波も、また、行きたいだろう？」という私の言葉に、彼女は、自信に満ちみちた表情で、僕にこう答えた。「いえ、（単純に行きたいというのではなく）必ず、行きます！！」と。もうこの一言で、今回の研修旅行の成否は言わずもがなである。光波の為に、時間を割き、お金を使ってよかった！と実感した瞬間、私の胸にこみ上げるものがあった。

結成２７年を迎えたＪＫＫも会員の入れ替えもあり新しい会員の登場もありでお互いに会員同士の人となり、これまでの歩み、これからの歩みを確認する意味で今回アンケートを作成いたしました。いわゆる会員の自己紹介です。

これをもとに各会員相互の一層の意思疎通を図り活発な会活動につなげたいものです。（「氏名のあいうえお順」に紹介します）

アンケートの内容は以下のようなものです。

ＪＫＫ会員自己紹介アンケート

１．「これまでの私」

① 氏名 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

② 塾名 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

③ 塾所在地 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

④ 職名（塾長、代表、専任職員など） ＿＿＿＿＿＿＿＿

⑤ 塾歴（経営歴または勤務歴） ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

⑥ 趣味・特技 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

２．「これからの私」

① 印象に残る生徒・親・出来事　または今考えていること

② ５年後の自塾はどうなっているか（今の思いがどのような形で具現化しているか）

③ 将来の夢

３．ＪＫＫでやってみたいこと　ＪＫＫに望むこと

1．「これまでの私」

① 氏名　　青沼　隆

② 塾名　　伸栄学習会

③ 塾所在地　　千葉県浦安市猫実２－１－５　大金ビル

④ 職名（塾長、代表、専任職員など）　塾長

⑤ 塾歴（経営歴または勤務歴）　２７年

⑥ 趣味・特技　　ネコ（もの心ついたときからずっと一緒です）

2．「これからの私」

① 印象に残る生徒・親・出来事 または今考えていること

印象に残る生徒たちはたくさんいます。
ウ〜〜、まとまりません。

② 5年後の自塾はどうなっているか (今の思いがどのような形で具現化しているか)

わかりません。
変化が激しく想像つかないことが次々に起こるので計画を立てるのを諦めました。

③ 将来の夢

バッハのゴールドベルグ変奏曲全曲を弾けるようになること。

3．　ＪＫＫでやってみたいこと　ＪＫＫに望むこと

「不良会員」ゆえ……

1．「これまでの私」

① 氏名　　諫山　静香

② 塾名　　ジーニアス　たけのこ会

③ 塾所在地　京都府京都市山科区竹鼻外田町８エスポワール京都Ｔ１０７

④ 職名（塾長、代表、専任職員など）　塾長

⑤ 塾歴（経営歴または勤務歴）　２５年間この仕事をさせて頂いております。

⑥ 趣味・特技　旅行（特に日本の田舎町）

2．「これからの私」

① 印象に残る生徒・親・出来事 または今考えていること

幼児期から小学校入学まで　つのつく時期のプログラミング（数と図の融合学習）の見直しをすること。

② 5年後の自塾はどうなっているか (今の思いがどのような形で具現化しているか)

上記の計画が達成されていて、数と図形の融合学習の完成度を高めていること

③ 将来の夢

健康でいる限り現役で縁のあったお子さま方の幸せをみつめていたいこと！

3．　ＪＫＫでやってみたいこと　ＪＫＫに望むこと

京都に住んでいますので、すぐすぐに東京・関東地方は行きにくいのですが、JKK の各先生方の塾を訪問したいと思います。

1．「これまでの私」

① 氏名　　小田　清

② 塾名　　S&S セミナー

③ 塾所在地　栃木県日光市相生町２０－９

④ 職名（塾長、代表、専任職員など）　塾長

⑤ 塾歴（経営歴または勤務歴）　約３０年

⑥ 趣味・特技　　演劇鑑賞［長男は劇団員です］。　関心は温暖化問題。

2．「これからの私」

① 印象に残る生徒・親・出来事 または今考えていること

色々書きにくいです。

② 5 年後の自塾はどうなっているか（今の思いがどのような形で具現化しているか）

・問答法などの講師研修の効果的方法の実践を行っている。
・私のいない強い塾になっている。

③ 将来の夢

②と同じ

3．　ＪＫＫでやってみたいこと　ＪＫＫに望むこと

・21 世紀に求められる教育内容の先駆的実践についての情報発信。
・教育現場での教育実践技術の継続的発信可能な仕組みづくり。
・子供を取り巻く環境リスク［特に温暖化］についての情報発信。

1．「これまでの私」

氏名	皆倉宜之	塾名	京葉学舎	塾歴	塾開業以前は公務員
職名	塾長	塾所在地	千葉県千葉市花見川区南花園１－４４－１１		
趣味・特技	趣味：囲碁、絵本　　特技：新聞を読むこと				

2．「これからの私」

① 印象に残る生徒・親・出来事 または今考えていること

今考えていること：どうしたら物質優先（経済成長路線＝競争主義）の社会構造を、充実した精神生活を送れる社会（脱成長＝原発なし）に変換できるかということ。そのためには、いまの効率優先の教育をどのように変革していったらいいか、その処方箋を追求してゆきたい。

② 5年後の自塾はどうなっているか (今の思いがどのような形で具現化しているか)

自塾はそれほど変わっていないと思う。なぜなら、教育の改革は社会の変革と同時進行でしか実現できないから。それゆえに、このような視点を対社会に発信してゆく必要がある。ただし、３．１１以後の市民の意識の変化は少しずつ始まっており、自塾でも生徒たちや保護者たちへの働きかけがしやすくなってくると思われるので、そのための創意工夫を行いそれを具体化してゆきたい。

③ 将来の夢

子どもたちが美しいものを美しいと感じる感覚、新しいものや未知なものに触れたときの感激、思いやり、憐れみ、賛嘆や愛情などのさまざまな形の感情が呼び覚まされるような社会子どもたちがその世界で、美しいものを美しいと感じ、不思議なものに接した時心から驚きを発せられるような、そういう社会をつくること（現在のように歪んだ大人の尺度がまかり通っている社会ではなくて。「あなたの子どもはあなたの子どもではない。かれらは人生の希望そのものの息子であり娘である。かれらはあなたを通ってはくるがあなたから来たものではない。」）

3．　ＪＫＫでやってみたいこと　ＪＫＫに望むこと

教育（論）を通じて社会の総体を認識し、それを持って社会に働きかけること。（注意すべきは、教育オンリーにならないこと。教育は社会のほんの一部でしかないのだから。）

1．　「これまでの私」

① 氏名　　金澤　正和

② 塾名　　SJセミナー（しぶ柿塾）　　S:　しぶ柿　　J:　塾

③ 塾所在地　茨城県日立市十王町友部東３－３－２０

④ 職名（塾長、代表、専任職員など）　塾長（次男と二人でやっています）

⑤ 塾歴（経営歴または勤務歴）　２７年（教えた生徒の子どもが通っています）

⑥ 趣味・特技　本が好きです。絵も好きです。音楽を聴くのも好きです。 そして人が好きです。私立高校で週３回現代文を教えています。

2．「これからの私」

① 印象に残る生徒・親・出来事 または今考えていること

ジブリに勤めて毎年新作のセル画を描いている元教え子(マキちゃん)がいます。もう２０年以上前の生徒ですが、今でも家族を含めて交流があります。毎年家内と二人招待されます。

② 5年後の自塾はどうなっているか (今の思いがどのような形で具現化しているか)

生徒は学年毎に圧一定の人数で締め切ります。開塾以来、中学３年生(最終学年)からの入塾は認めていません。小３から７年、中１からでも３年は通って来る子ども達を大事にしています。

③ 将来の夢

塾を将来は息子に預けて、家内と二人。のんびり旅に出てみようと考えています。いつになるかは分かりません。そんな日が来ないかも知れません。近場の温泉にでも出かけて終わるでしょう。

3．　ＪＫＫでやってみたいこと　ＪＫＫに望むこと

“塾人”というのはやっぱり孤独なのではないか(自分だけか)と思います。若いとき理由あって軌道から外れてしまったストレイシープなんて人が多いんじゃないかな。私は自称「いっぴき野ぶた」で生涯（しょうがナい）現役でがんばります。皆さんと交流することが私の入会の目的でした。学びます。協力します。

1．「これまでの私」

氏名	小林和光	塾名	看護進学会	塾歴	２６年
職名	主幹	塾所在地	千葉県柏市柏２－７－２２－２０２		
趣味・特技	読書、将棋				

2．「これからの私」

① 印象に残る生徒・親・出来事　または今考えていること

今までに３千人以上の生徒に接してきて、思い浮かぶ子は１０人や２０人ではありませんが、開校した昭和６１年１０月に入会されたＳさんのことが印象に残っております。（本人の了解を得ておりませんのでイニシャルにします）
Ｓさんは、中学校の担任にも、通っていた塾からも志望校合格は絶対無理と言われておりました。その子が当塾に入会して、見事に志望校に合格しました。傍から「絶対無理」と言われた高校に合格したので、Ｓさんは学校の授業について行かれないと心配してか、春休みも返上して一生懸命勉強しました。その成果があって、入学後の５月の１学期中間テストでは学年３位の優秀な成績を収めました。「まぐれだ」と言われたくない一心でさらに勉強を続け、３年間の在学中で一番悪い成績が学年３番でした。その結果、推薦入試で志望大学に合格しました。努力を続けることの大切さをＳさんから教えてもらいました。

② ５年後の自塾はどうなっているか（今の思いがどのような形で具現化しているか）

看護進学会は永遠に不滅です。（笑）≪存続そのものを問うというよりも理念がどのように具現化されるのかという質問ですね。≫
いつでも・どこでも・誰にでも指導のできる体制を作りたいと念願しております。

③ 将来の夢

≪このような抽象的な質問は回答が難しく、かつ回答が長くなりますから回答を省略します。≫

3．ＪＫＫでやってみたいこと　ＪＫＫに望むこと

数多くの塾団体があるなかで、唯一ＪＫＫがオピニオンの発言をしている。これは皆倉代表の感性と理論構築があるからである
ＪＫＫはオピニオンリーダーとして、常に社会に意見を提言すべきである

1．「これまでの私」

① 氏名　　清水　一郎

② 塾名　　桐秀ゼミ

③ 塾所在地　群馬県桐生市東５－７－２７

④ 職名（塾長、代表、専任職員など）　塾長

⑤ 塾歴（経営歴または勤務歴）　３０年(経営歴２８年)

⑥ 趣味・特技　地名の考察（歴史地理学）ドメスティックバイオレンス被害者支援活動と支援ＮＰＯの運営　不登校引きこもりの相談ボランティア。

2．「これからの私」

① 印象に残る生徒・親・出来事 または今考えていること

通塾している生徒が不登校だったことに後で気づいたこと
学習障害の女の子　多動性障害の男の子　塾内での様子から部活でのいじめを発見したこと

② 5年後の自塾はどうなっているか（今の思いがどのような形で具現化しているか）

たぶん、教室の閉鎖直後。

③ 将来の夢

ドメスティックバイオレンス被害者支援ＮＰＯを立ち上げて８年になります。それなりの活動をしてきましたが、メンバーの高齢化が目立つようになりました。私も最初から無償で事務局を担当し、塾の仕事よりも多忙です。家庭内で人間の尊厳が踏みにじられている女性を救援するためのささやかな組織を後の世代に繋げなければなりません。事務局担当者の養成が急務で、このＮＰＯ組織を次代に残すことが近い将来の夢です。

3．　ＪＫＫでやってみたいこと　ＪＫＫに望むこと

ＪＫＫは、塾業界きっての質の高い知的な研究グループです。塾が、子どもたちを金もうけの餌食にしないような勉強をしていきたいものです。

1．「これまでの私」

① 氏名　　高橋　直子

② 塾名　　津田沼学院

③ 塾所在地　千葉県船橋市前原東４－５－２

④ 職名（塾長、代表、専任職員など）　塾長

⑤ 塾歴（経営歴または勤務歴）　経営歴１２年目

⑥ 趣味・特技　　（未記入）

2．「これからの私」

① 印象に残る生徒・親・出来事 または今考えていること

自分なりに出来る社会貢献とはどのようなことか。

② 5 年後の自塾はどうなっているか (今の思いがどのような形で具現化しているか)

学習塾というスタイルではない可能性もあり。

③ 将来の夢

自分なりに出来る範囲で社会貢献していること。

3．ＪＫＫでやってみたいこと ＪＫＫに望むこと

人間性が磨かれる様な講演会や勉強会。

1．「これまでの私」

① 氏名　　田中　宏道

② 塾名　　LAPIS 鎌ヶ谷

③ 塾所在地　千葉県鎌ヶ谷市道野辺本町１－４－１

（船橋から１０分、柏から２０分）

④ 職名（塾長、代表、専任職員など）　㈱SONRISA　代表取締役
LAPIS 鎌ヶ谷　代表

⑤ 塾歴（経営歴または勤務歴）　塾歴２６年　経営歴１２年目

代表取締役歴３年

⑥ 趣味・特技　特技：たのしい授業　趣味：宴会、各地お出かけ

2．「これからの私」

① 印象に残る生徒・親・出来事 または今考えていること

「いったいお前は本気なのか？」についての考察。
「覚悟を決める」について。

② 5年後の自塾はどうなっているか（今の思いがどのような形で具現化しているか）

生徒数６００名。絶大な信頼を集める鎌ヶ谷の教育機関。

③ 将来の夢

大勢の素敵なスタッフに囲まれる。

3．　ＪＫＫでやってみたいこと　ＪＫＫに望むこと

パズル教育研究への参加。

1．「これまでの私」

① 氏名　　中島　祥吾

② 塾名　　進学塾　理数学社

③ 塾所在地　千葉県野田市野田７８５　森田ビル２Ｆ

④ 職名（塾長、代表、専任職員など）　塾長

⑤ 塾歴（経営歴または勤務歴）　６年

⑥ 趣味・特技　ドライブ・カラオケ・ビリヤードなど

2．「これからの私」

① 印象に残る生徒・親・出来事 または今考えていること

印象というと変かも知れませんが、塾を作ったときのことが最も思い出に残っています。（今までの生徒の顔もたくさん出てきますが）大学生のころでしたので、お金もなく、壁のペンキを仲間で塗って、新たに出会える子どもたちのことを考えるとわくわくしていました。４月に開校しましたが、全く生徒が入らずに、辛いなぁと思っていました。３カ月間電話が鳴りませんでしたね。鳴らない電話の前で、ずっと待っていました。あの頃の気持ちは、辛さと期待が入り混じった、何とも言えないものですね。

② 5年後の自塾はどうなっているか（今の思いがどのような形で具現化しているか）

生徒の笑顔であふれていて欲しいと思います。わくわくする気持ちを、講師、生徒共に持ち、楽しい塾であっていて欲しいです。ぬるま湯ではなく、互いに成長できる環境になっていると思います

③ 将来の夢

将来の夢は、私立の学校を創ることですね。

3．　ＪＫＫでやってみたいこと　ＪＫＫに望むこと

いろいろなことを学びたいです。特に、私は企業に入ったこともなく、これでいいのかなと思うこともしばしばあります。諸先輩方が経験されていることを学び、そこから子どもたちにまた伝えられることも多いと思います。なるべく多くのことを学び、子どもたちの役に立つことが出来ればいいなぁと考えています。いろいろなこと、教えてください！

1．「これまでの私」

① 氏名　仲野 十和田

② 塾名　ナカジュク

③ 塾所在地　東京都板橋区仲宿５５－８－２０５

④ 職名（塾長、代表、専任職員など）　塾長

⑤ 塾歴（経営歴または勤務歴）　２７年

⑥ 趣味・特技　テニス、家庭菜園

2．「これからの私」

① 印象に残る生徒・親・出来事 または今考えていること

兄２人に続き、小４で入塾した女の子。真面目で、言われたことは何でもするのだが、結果に出ない。高校受験も第一志望校に入れなかった。兄二人は要領よく、大学まで、第一志望で行けたので、本人も周りも歯痒かった。高校に入学してから、養護の先生に悩みを相談することが多くなったらしく、さらに、金八先生からの影響を受け、猛勉強し、国立大学に合格。目標が決まると、これほど人は変われるものかと、人が持っている可能性に驚かされた出来事だった。

② 5年後の自塾はどうなっているか（今の思いがどのような形で具現化しているか）

全てのスタッフが、生徒から見て、憧れの存在になっている。

③ 将来の夢

郊外に、１００坪くらいの、パーティーができて、音楽も奏でられるカフェ風のイベント館を作る。集いの場。

3．　ＪＫＫでやってみたいこと　ＪＫＫに望むこと

若い人の興味関心を敏感に掴み、ＪＫＫという引き出しから、それを出していく作業ができると良い。

1．「これまでの私」

① 氏名　　庭　野　　至

② 塾名　　専　修　学　院

③ 塾所在地　茨城県龍ヶ崎市寺後３６２９－５

④ 職名（塾長、代表、専任職員など）　塾長　兼　代表

⑤ 塾歴（経営歴または勤務歴）　経営歴２３年　　経験歴３９年

⑥ 趣味・特技　　ゴルフ、登山

2．「これからの私」

① 印象に残る生徒・親・出来事 または今考えていること

通塾中の生徒・お子さんは皆さんそれぞれの個性があり、日々変化のある授業日を経験させて頂いております。卒業生に至っては時折、顔を見せてくれると懐かしい思い出が蘇ります。

② 5年後の自塾はどうなっているか（今の思いがどのような形で具現化しているか）

少子化の中５年後自塾が存続しているかどうかは不明？社員の皆さんに不安のないような生活が保障できれば幸いな事と思い、１年１年を大切に頑張って参ります。

③ 将来の夢

これという程の夢を抱いてはおりません。健康が大事と日頃から心掛けはしております。

3．　ＪＫＫでやってみたいこと　ＪＫＫに望むこと

特に企画立案はございません。JKK の会員の皆さんには感動・感心をさせられています。
又、多くの刺激を頂き感謝します。今後とも宜しくお願い申し上げます。

1．「これまでの私」

① 氏名　　林　　政夫

② 塾名　　青　藍　学　院

③ 塾所在地　　東京都杉並区永福 3-55-1　佐藤ビル 3F

④ 職名（塾長、代表、専任職員など）　　代表

⑤ 塾歴（経営歴または勤務歴）　　２７年（今年２８年目）

⑥ 趣味・特技　　スキー、バトミントン、読書、演歌

2．「これからの私」

① 印象に残る生徒・親・出来事 または今考えていること

様々な問題を抱えながらも必死に、けなげに受験をして通り過ぎて行った子供 たち。淡々と受験をしていった子供達。辛くても明るくふるまって通り抜けた子供達。そして毎年様々な生き方を示してくれる親御さん達、皆私の学びの師です。

② 5 年後の自塾はどうなっているか (今の思いがどのような形で具現化しているか)

在塾生、卒塾生の別なく子ども達がもっと明るくもっと元気に塾に集っているはず。

③ 将来の夢

学校から無試験でも入って下さいと言われる生徒が育っていくこと。(入試を超える生徒を育てたい)。卒業した生徒がいつでも気軽に立ち寄れる塾になること。地域に欠かせない塾になること。

3．　ＪＫＫでやってみたいこと　ＪＫＫに望むこと

JKK に集う人々がもっと明るく元気になること。活発になること。活き活き活動できること。先生方のそれぞれが個性を発揮できる場になること。

1．「これまでの私」

① 氏名　　平林　一之

② 塾名　　稲　　穂　　塾

③ 塾所在地　　東京・大田区大森（１ヵ所のみ）

④ 職名（塾長、代表、専任職員など）　　塾　長（主宰）

⑤ 塾歴　　院生時代から「塾一筋」，４０年の歳月が

⑥ 趣味・特技　　温泉＆Ｂｅｅｒ，＋落語鑑賞（文楽・志ん生・円生・小さん、そして志ん朝・枝雀の亡き後、しばし呆然自若！しかし最近は、専ら柳家権太楼の追っかけを！）

2．「これからの私」

① 印象に残る生徒・親・出来事 または今考えていること

日々あれやこれや何やかやと、いろいろたくさん考えており、この欄にひとつだけ書き記すことは、困難なり！

② 5年後の自塾はどうなっているか（今の思いがどのような形で具現化しているか）

我が塾（のスタイルや方針）を支持してくれる家庭や、慕ってくれる子、うちの塾がいいという子ども達を相手に、自らは楽しみながらも、細々とではあるが、納得のゆく形での塾を続けているのでは？（願望！）（要注意；自己満足？）

③ 将来の夢

４年前「大病」の際、「死」と直面し、幸運にも回復基調にある今。どれほどの歳月がこの私に残されているのか、定かではないにせよ、与えられた（許された）時間を、ライフ・ワークである、日本の教育シーンの中における「私」の存在意義について、その可能性と限界を真剣に考え、かつ微力ながらその分野の発展・伸長に尽力したいと、心底願っている。

3．　ＪＫＫでやってみたいこと　ＪＫＫに望むこと

２０数年前、大沢さん（初代代表）と２人３脚で、ＪＫＫを創設した「自負と責任」を痛感しつつ、僅かながら残されたその「可能性」と向き合い、我がエネルギーをできる限り振り絞り、次の世代・時代に「繋げて」ゆきたい。その意味では、３年程前、皆倉さんが掲げた「再起動ＪＫＫ」「リセットＪＫＫ」の旗印の下、布浦さん&林さんという強力な布陣が整いつつあり、若い芽もちらほら・・・。会員皆の力を結集し、ＪＫＫならではの「実績」を積み重ねてゆければ、思い残すことはない。

1．「これまでの私」

① 氏名　　布浦　万代

② 塾名　　塾・ひびき

③ 塾所在地　　茨城県つくば市稲岡７０９－１５

④ 職名（塾長、代表、専任職員など）　塾長

⑤ 塾歴（経営歴または勤務歴）　約 38 年

⑥ 趣味・特技　　万葉の旅、　書、茶道、能、乗馬、スキ―。

2．「これからの私」

① 印象に残る生徒・親・出来事 または今考えていること

※　印象に残った生徒
　① 親の期待につぶされた生徒。
　② 登校拒否をしていた生徒が、ドイツのハンブルク大学に留学した生徒。
※ 印象に残った親
　① 万葉集の授業に出席した親。
　② 夜中まで教育を論じ合った親。
※　出来事
　① 生徒を引率してアメリカへ研修旅行をしたこと。
　② 卒塾後、5 年後・10 年後・15 年後・20 年後の集りをしていること。
※　今考えていること。
　① 人類の幸せと核のない世界

② 5 年後の自塾はどうなっているか（今の思いがどのような形で具現化しているか）

※ 万葉集の授業が増えている塾になっている。

③ 将来の夢

バスを貸し切って卒塾生たちと万葉集の歌碑を巡る全国の旅に出たい。

3．　ＪＫＫでやってみたいこと　ＪＫＫに望むこと

国語教育の一環として、韻文の世界を広げたい。（特に万葉集の講座を開きたい。）

１．「これまでの私」

① 氏名　　松原　秀典

② 塾名　　杏　村　塾

③ 塾所在地　　東京都大田区池上５－１－３

④ 職名（塾長、代表、専任職員など）　　塾長

⑤ 塾歴（経営歴または勤務歴）　　３６年（今年３７年目）

⑥ 趣味・特技　　読書

２．「これからの私」

① 印象に残る生徒・親・出来事 または今考えていること

生 徒 ：①自分で塾を始めた元生徒、及び塾を始めたい元生徒がそれぞれ一人ずついる。現在講師として一緒に教えている。
②昨年の区議選に立候補した元生徒が２人いる。（うち一人当選）

親 ：息子さんと娘さんの中学受験を２年間一人で教えた後、生徒を 20～30 名紹介してくれた書道の先生。

元講師：大手有名企業の重役になっている人が数名いる。

スキー合宿：毎年続けてきたがもはや限界、廃止する。

② 5 年後の自塾はどうなっているか (今の思いがどのような形で具現化しているか)

クラスの授業が成立しなくなったので、個人指導・グループ指導に切り替える。非常に厳しい経営状況なので潰れている可能性もある。

③ 将来の夢

○勉強以外にも地域の行事に参加したり、名所旧跡などを訪れたりして郷土愛に根ざした、故郷（ふるさと）と呼べるような塾もめざしたい。

○世界の各都市がここ１０年で大きく変化した。国際的に活躍する生徒を育ててみたい

３． ＪＫＫでやってみたいこと ＪＫＫに望むこと

時間的制約もあり、特にありませんが、いろいろなユニークな塾を訪れてみたい気がします。

【補足】･･･実兄･忠義さん（現･大田区長）の都議転出に伴い、後援会から強い要請･説得を受け、相当悩んだ挙句、区議選（政界転出）を決意。99年初出馬･当選、以後4期連続当選。ご自身の病気を契機に、高齢者社会に対する政策に重点的に取り組んでいる。（平林記）

1．「これまでの私」

① 氏名　　森　本　仁　夫

② 塾名　　龍ヶ崎英数セミナー

③ 塾所在地　　茨城県竜ケ崎市米町３８９２

④ 職名（塾長、代表、専任職員など）　　塾長

⑤ 塾歴（経営歴または勤務歴）　　５０年

⑥ 趣味・特技　　読書、音楽鑑賞、ゴルフ　（テニス）

2．「これからの私」

① 印象に残る生徒・親・出来事 または今考えていること

哲学の伝え方

② 5年後の自塾はどうなっているか（今の思いがどのような形で具現化しているか）

年齢のこともあり、何とも言えない。 最良の方法が見つかっていればいいが・・・。

③ 将来の夢

今の想いが実現に向かって続けられること

3．　ＪＫＫでやってみたいこと　ＪＫＫに望むこと

２－①に関して、もし同士がいれば語り合いたい。

1．「これまでの私」

① 氏名　　山下　洋輔

② 塾名　　教育コンサルタント緑葉学舎

③ 塾所在地　　柏市柏

④ 職名（塾長、代表、専任職員など）　　代表

⑤ 塾歴（経営歴または勤務歴）　個人塾共同経営 4 年、高校勤務 3 年、2007 年から現・事務所を運営。

⑥ 趣味・特技　史跡散策、ダンス、カポエィラ、絵画、ＪＡＺＺ鑑賞、三線、剣道（三段）、バイク（ハーレー・ローライダー）、　など。

① 印象に残る生徒・親・出来事 または今考えていること

水商売を経営している家庭の生徒がいた。親は、自分の職業に誇りを持ちつつも、学校や子どもの前では引け目を感じているようだった。家庭（＝職場）訪問として、顔を出すようになって、その引け目は消え、生徒の姿勢は見違えるようによくなった。

② 5 年後の自塾はどうなっているか (今の思いがどのような形で具現化しているか)

社会に働きかける存在となっている。それぞれの事例を持ち寄り、その事例が、全国各地の実践者に届くような仕組みを準備している。草の根的に、静かな革命を起こしていく。

③ 将来の夢

学校、塾、地域、大学といった垣根なく、それぞれの特性を生かし、社会全体で教育を支えていけるような環境を整備していきたい。教育から、社会を立て直す。地域から、世界に発信していく。

3．　ＪＫＫでやってみたいこと　ＪＫＫに望むこと

4 月、オランダを訪問し、リヒテルズ直子さんと話し合いました。特に、イエナプランについて、学校見学し、その可能性を体感しました。塾を開始した頃、1 学年の授業で時間割を組めず、同じ教室で、複数学年の授業を一人の先生が担当していました。自然と、学び合う共同体や、個別の学習計画を作っていくことになりました。イエナプランは、そんな塾のあり方に、適したものです。ＪＫＫにて、研修会などを開催できるといいと思います。

1、「これまでの私」

① 氏名　　柳　　善一

② 塾名　　創　学　舎

③ 塾所在地　　千葉県柏市旭町１－６－５　シマビル１Ｆ

④ 職名（塾長、代表、専任職員など）　　代表取締役社長

⑤ 塾歴（経営歴または勤務歴）　　創立　２７年目　（社長歴８年目）

⑥ 趣味・特技　　テニス

2．「これからの私」

① 印象に残る生徒・親・出来事 または今考えていること

浪人・大学時代の恩師、渡辺次男先生のこと。（すごい人でした）

② 5年後の自塾はどうなっているか（今の思いがどのような形で具現化しているか）

（未記入）

③ 将来の夢

（未記入）

3．　ＪＫＫでやってみたいこと　ＪＫＫに望むこと

普通人（凡人）がよりよく生きるためにはどうすればよいのかを考え、意見交換できる場にしてもらいたい。

＜特別寄稿　その 1＞

「さらば吉本隆明・・・・・・・・・吉本さん」

東静塾（静岡県：駿東郡））
元会員　　青木　司郎

私は今年の今頃をめどに、もう一度吉本さんのところに行こうと準備をしていたところだった。しかし、肝心の吉本さんはもういないのである。吉本さんは今年に入ってからずっと入院生活を送っていた。私はそのことを亡くなってからはじめて知った。「あと 10 年は大丈夫だ」と私が勝手に無根拠に信じていた吉本さんは 3 月 16 日未明、87 年の生涯を閉じた。

吉本さんには有名なことばが数多くあるのだが、吉本さんの訃報を友人から受けたときにふと思い出したのはこんなことばだった、

Q　「もう一度生まれ変わったら何になりたいですか？」
吉本　「もうたくさんだ！」

自らの読書生活の中で「吉本体験」を持っていなかった方には奇異な感想を抱かれるかもしれないが、いかにも吉本さんらしい返答だと思う。吉本さんは常に精一杯の毎日を送っていたのだし、いつ死んでも遣り残したという無念の気持ちなどさらさら存在しなかったはずだ。少なくとも 50 歳以降の吉本さんはそうであったのではないか。本格的に老いとの格闘が始まったのは、西伊豆の土肥海岸で溺れ、まさに九死に一生を得たときからになる。「自然に対して必敗の戦いを挑む」といって、実際にも老いの日常を、吉本方式と鶴見俊輔に言わしめた様々な独自の方式で生き抜いていたのである。それ以前には青年時から、文字通り戦いの連続であった。東洋インキでの組合運動での敗北、近代文学派への批判、日本共産党の非転向に対する根底的な批判（「転向論」）、所謂「花田・吉本論争」（花田清輝との有名な論争）、安保闘争時の進歩的文化人および社共さらにその支配下にある労組に対する批判（「擬制の終焉」）、丸山真男に対する痛烈な批判（「丸山真男論」・東大闘争時の丸山発言への批判）、文学者の反核声明に対する批判（「反核異論」）、あまりに有名な「埴谷・吉本論争」（「重層的な非決定へ」所収）・・・・・・・

細かいものを挙げればまだまだいくらでもある。実際『試行』での「情況への発言」では毎回進歩的文化人や学者に対して小気味良い程の批判を浴びせていた。

しかし実際の吉本さんは自ら仕掛けた論争は一度としてなかった。「受動的戦闘性」と自己分析していたその姿勢は、向こうから仕掛けられた戦いには本気で、一人で、

しかも徹底的に闘うこと、である。自らを安全圏において、衆を恃み、及び腰のくせに勇ましいことばだけを振りかざす輩には容赦がなかった。そういう意味で「市民運動」に対しては全く評価をしてこなかった。またニューサイエンスやエコロジストの運動にも冷淡であった。何よりも根底的に、そして始源にまで遡って考察するその思考方法は、安直な「科学的」にも印象批評にも、本気でやれよと常に訴えていたのだ。

吉本さんは嘘をつかない。だから、嘘を言っていない人には本当に優しく接する、でも間違いを犯すことには寛容である。ただし日常生活を維持するのに不可避的な過ちや、知らないが故の過ちに限る。その基準は人間存在の根本にある。現行法などは基準にはならない。当然のことである。吉本さんの日常生活は生活時間帯が夜にあるので、一般人と多少ずれるがあとは全く普通である。自転車に乗れる間は自転車が一番の乗り物で、自家用車は持たなかった。海外旅行にも行かなかったが、これには理由がある。私の学生時代、友人の知人がパリに大きな家を構えていていつでも来て良いからといわれて、私の周辺の友人の何人かは何週間もパリへと遊びに行っていたことがあった。私も誘われたのだが「居乍らにして世界を自由に飛翔することこそが観念の強靭なことの証である」などと啖呵をきって、断固として誘いには応じなかった。これは全く吉本さんの受け売りなのである。（そんな私は完全な阿保である）吉本さんの生活は並み外れた知識人でありながら庶民なのである。これが凄いところである。知の往相を語る通常の知識人と異なり、知の最後の課題である非知に着地する還相をこそ課題とした稀有な在り方が、その凄さを普通な姿の奥深くへ追いやっていたのである。いや吉本さんは自然体が庶民そのものの人なのであり、それが私などの凡人にはとてつもないものと映るのである。

以下★印は、吉本隆明の次女である吉本ばななの公式ツイッターの採録である。時系列は正しく配列してあるが、全てのツイートを載せてはいない。しかしこれだけ読めばご遺族がどんな気持ちで吉本さんをどれほど愛し、そしてその死をどのように受け止めたかが分かるのではないだろうか。

★みなさん、ありがとうございます。父は最後まですごくがんばりました。父が危篤なことを言えずつらい一ヶ月でした。一時はもちなおしたのですが。　たくさん会ってからこちらに来たので、悔いはないです。父は仕事をすっぽかすのを嫌ったので半泣きで韓国、いや香港に来たのですが、

★私も姉もいちばんそれらしいことをしているときに亡くなり、父らしいなと思いました。　父はいつでもひとりではなかったし、家族に愛されていました。

★最後に話したとき「三途の川の手前までいったけど、ばななさんがいいタイミングで上からきてくれて、戻れました」と言ってくれました。もう一度、話したかったです。「としよりは、同じ話ばかりで情けない」と言うので、そんなことはない、いるだけで嬉しい、と言うと、

★この一ヶ月、下を向いては泣き、トイレでもいつでも泣き、夜中に起きては泣き、病院でも泣き、いつでも泣いてばかりいたので、今はむしろすがすがしい気持ちです。泣いていないときは家族３人でくっついて「華麗なる遺産」を夢中で観ていました。人生の大切な１ページです。

★弱虫な私は最後まで「お父さん遠くにいかないで～」と泣いて腕にすがったり、体をさすったりしていました。父はいつでもうなずいていてくれました。よくがんばってくれたと思います。個別にインタビューに答えるつもりはありません。ここだけです。家族も私もベストをつくしました。それでもういいです。

★取材申し込みの方、待たれている方、待たれている方たちには申し訳ありませんが姉も疲れて体調がよくないですし、母は骨折で入院していますし、私はここで全てを語りましたので、そっとしておいてくださいね。　どうかご配慮おねがいします。

★いらしてくださった編集の方たち、ほんとうにありがとうございました。みなさんの顔が輝いて見えました。電報をくださった方たちもありがとうございます。そしてツイートをしてくださったみなさん、ほんとうにありがとうございます。

★うちの姉、マスコミやファンの殺到にインターホンの電池抜いて無視という斬新な対応？してるし、亡くなった直後の父と笑顔で添い寝ツーショット撮ってるし、区役所嫌いだからいとこに行ってもらってるし、さすが自由だ　　かなわない！

★疲れてゲロが止まらないし、今さら坊主のお経を聞いても仕方がないから今日は休む！とメール一本で喪主のはずの姉が通夜を欠席、ロケンローール！いや、私がいない間、大変だったのだからゆっくり休んでください

★ほんとうに数少ない、親戚代表とか私の事務所の人とか父のほんとうに近い人だけで、ものすごく簡単な祭壇で、最低限のことしかしないお通夜だった（父の望みで）のですが、みなの背中を見ていたらあたたかい気持ちがこもっていて幸せを感じました。ありがとうございました。

★おくりびとがきれいに父の顔を整えてくれて安らかでとてもよかったんだけど、私はやっぱり、病院で熱と必死で闘っている、ヨレヨレで入れ歯もなく管だらけでも必死でしゃべろうとしていた整っていない父の方が好き。苦しんでるのを見

るのがつらくてしかたなかったけど、今思うと行ってよかった。

★日記の最後の文庫のあとがきで、思い切り「親が死んだときの日記書きたくない」と書いといて、リアルタイムのつぶやき炸裂作家魂！というか、この字数制限が楽だし燃えるのです～あと今回はかなり親しい方も呼ばずに葬儀をしたので、現場の和やかさを中継したく。

★しまいには今 CM している付録のドラえもんの、人がそれを持って手をつなぐと微弱な電流に反応して音が出るやつを、坊さんや親戚のおじさんを交えてやりましたからね～。火葬場に響き渡るドラえもんの主題歌に父も癒されたでしょう、和やかすぎ　　（絵文字は省略してあります）

吉本隆明が亡くなってから新聞、雑誌、ネット等々で夥しいまでの「吉本論」や「追悼文」が寄せられた。その中には明らかに吉本隆明の本をきちんと読んでいないと思われるものが少なくなかった。とりわけネット上の追悼に便乗した吉本批判のほとんどは、吉本さんの発言の孫引きでのそれであった。さらに姜尚中のようにこれまで一度として表立った吉本批判をしてこなかったにもかかわらず、吉本さんが亡くなって新聞紙上での識者の追悼文が一段落した時点で、おもむろにそして彼の喋りを想起させるような語り口で吉本批判を載せたような輩もいる。このような日本的リベラリストの典型的な生き方をしている姜尚中を筆頭に、概ね進歩的文化人の評価は予想の範囲内にあった。佐高信のような無責任な評論家も「吉本はすでに死んでいた」などと雑誌で書いているのだが、この人たちの吉本体験は本人が語っているほど切実なものではないし、正確な読み込みもしていない。また今この時点での大胆なまでの吉本批判の発言の根拠は、吉本隆明本人がいなくなったことで頭の上の重石がとれた安心感にあることは明瞭である。何れにせよ姑息な態度ではある。

またネット上での吉本批判の大半は、週刊紙（週刊新潮）での吉本発言「原子力発電を手放すことは、人間にサルに戻れというにふさわしい」をほとんど唯一の論拠にしている。私はこのことについては、単純に吉本さんらしい発言だなと思っている。そしてヒステリックな脱原発・反原発発言に対して警鐘を鳴らしているのだなと思っている。ことの真相は「反核異論」のとき、「オウム真理教に対する見解」のときと同じである。このことについての説明が必要ならいつでもできるが、そのようなファッションとしての言説（批判）に私の関心はない。

新聞での追悼文の中で高橋源一郎のものが私の思いに一番近似的なものに思われた。朝日新聞 3 月 19 日夕刊『思想の「後ろ姿」見せてくれた』と題したこの小論には、私が吉本さんに感じたことと全く同じ思いがそのままのことばで書かれていた。

「この人がほんものでないなら、この世界にほんものなんか一つもない」とぼくは思った。その時の気持ちは、今も鮮明だ。

高橋源一郎はこう書いていたのだ。本当に同じようなことばを用いて吉本さんに触れていた人がいた。読売新聞 3 月 17 日夕刊に『吉本隆明さんを悼む』という追悼文を書いた鹿島茂ある。

‥‥‥にもかかわらず、自然に吉本「さん」と呼びかけたくなるのは、著作を通じてこちらの心に響いてくる人柄というか人格というか､そういうものが確実にあって、それが「この人はウソをつかない、倫理的に信頼できる人間だ」と感じさせたからなのだと思う。‥‥‥

鹿島茂は『吉本隆明　1968』という団塊の世代からの体験的吉本隆明論を書いている。これは素晴らしい本だと思う。私が考えて言語化できないでいたことの多くを見事に語ってくれている。特に高村光太郎と芥川龍之介の背景に言及して吉本その人を存在論的に解析した部分は出色である。(因みに勢古浩爾の『最後の吉本隆明』も体験的吉本論として別の意味で優れた本だと思う。)

吉本隆明さん死去。1966 年 2 月、19 歳のときいただいた手紙を読み返す。

「貴方が現在、行動家であっても、理論家であっても、また将来平凡なサラリーマンになられても、革命家になられても、何でも結構だと思いますが､‥‥‥つまりそれは倫理の問題ではないということです。‥‥‥‥‥‥

自分の歩みについてたえず疑問と自恃とを反復されんことを。吉本　拝」

これは詩人の佐々木幹郎の文である。佐々木幹郎については、三田誠広の小説でその人物像の一部を知ることが出来るが、私は学生時代から好きな現代詩人の一人であった。『死者の鞭』『水中火災』などは愛読書の裡である。

同じようにすでに冥界に旅立って 40 年に及ぶ作家の高橋和巳は「あなたのライバルは誰か」という問いに対して間髪を入れずにこうこたえている。

「吉本隆明です。ああいう人が一人でもいればまだまだ日本は大丈夫だ。」

因みにこのときのインタビュアーは歌人の福島泰樹である。後に苦悩教の始祖と埴谷雄高に命名された高橋和巳はまだ 30 代前半明治大学の助教授であり、福島泰樹は大学 5 年生で早稲田短歌会の現役 OB？であった。福島はどうしても高橋を大学に呼びたかった。しかし講演嫌いの高橋は短歌会の会長（4 年生）が 2 度訪ねてお願いしても首を縦に振らなかった。困り果てた会長は先輩である福島に相談すると「わたしがお願いに行く」といって、単身高橋のもとを訪れて談判した。すると「三顧の礼を

尽くされてはお受けしないわけには行きませんな」と講演の依頼を受けたそうである。その講演のまさに直前、福島はどうしても高橋とビールを飲みたいと思い、大学のすぐ近くにある高田牧舎に誘い色々と話を聞き、最後にたずねたのが「ライバルは誰か」という問いであった。私にはこの高橋和巳と福島泰樹の思いが痛いほど良くわかる。

私はこの場で吉本隆明論を書こうとは思わなかった。思いを共有できる方の文章をもとに吉本体験の一端について語ろうと思っただけである。限られた紙数なので多くは語れないし、吉本さんの存在は私にとってあまりにも大きすぎる。これから何年もの歳月をかけてきちんと私の吉本隆明論を完成させたいと思う。今は吉本さんの死がまだ現実的なものとして受け止められていないことだけは確かである。これは私だけのことではない。さまざまな場面でこの時とばかりに吉本批判をしている輩もいっぱしの知識人を気取っている連中も、日本のそして世界のこれまでの常識がひっくり返るような事態が起こったときにはじめて、吉本隆明の不在がいかに大きいものかを思い知ることになるはずだ。しかし、吉本隆明はそんなときにも考えの基本線をきちんと守っていけば生きるについての大きな混乱が起こらないということを私たちに教えてくれていた。またそうした圧倒的な仕事を残してくれている。でも・・・・・・

「ああいう人が一人でもいればまだまだ日本は大丈夫」だったのだ。

私(たち)は吉本隆明のいないこれからを生きなければならない。

合掌

＜特別寄稿　その２＞

「吉本隆明異論」

反原発を主張するものはサルに劣る？
～科学技術妄信と過剰自意識の行き着くところ～

京葉学舎（千葉県・千葉市）
皆　倉　宣　之

《3･11　東京電力福島原発事故》

犬の眼が牛、豚の眼が鶏の眼が見る透明な森の奥から　　小島ゆかり

（総合誌「短歌」（角川書店）’１２年５月号）

２０１１年３月１１日、この日東京電力福島第１原子力発電所で起きた原発事故は、ありとあらゆるもの（生物であると無生物であるとを問わず）を死の恐怖へと陥れた。そのドラマの中で、人間はかろうじて避難という手段をとりえたが、家畜としてであれペットとしてであれ、これまで人間とともに生活を共にしてきた犬、猫、インコ、金魚、牛、馬、豚・・・などは、人間が生き延びるために置き去りにされなければならなかった。餌が尽きて飢え死にした家畜の哀れな群れ。何とか鎖を引きちぎり畜舎から脱出し、餌にありつき生き延びた牛や豚たちも、危険だとか放射能に汚染されているとの理由で、薬物による屠殺処分が待っていた。

歌人　小島ゆかりは　その情景を短歌でこのように表現した。置き去りにされなければならなかった多くのいのちの眼。この眼が訴えるものはなんだろうか。

《反(脱)原発論と吉本隆明氏》

ところで、何かの因縁だろうか、原発事故からちょうど１年後の今年３月１６日に、詩人・評論家の吉本隆明氏が逝去された。８７歳。

ご冥福をお祈りしたい。氏の評論活動は、戦後の日本の思想界に多大な影響を及ぼした。新聞各紙が「知の巨人」逝くと同じような表現をしていたが、それはあながち間違ったものではなかった。

しかし、私には吉本氏の言舌にときどき違和感を覚えることがあった。先ずは、１９８２年末に出版された『「反核」異論』であり、次に２００８年に新聞紙上でも騒がれた小林多喜二の『蟹工船』が若者たちの間でブームになっているという現象に対する氏の若者論であり（『文芸春秋７月号』および『貧困と思想』所収）、最後が、これこそが氏への決定的不信感を抱かせたものであるが、福島原発事故を巡っての一連の「反（脱）原発派批判」、言い換えれば「原発擁護論」である（①2011 年 5 月 27 日付け毎日新聞夕刊　②2011 年 8 月 5 日付け日経新聞　③2012 年 1 月 5/12 号　週刊新潮　など）。

ここでは一つ一つを細かく論じる紙数がないので、最後の３．１１原発事故を巡る氏の

論調を中心に、その問題点を指摘することにする。

なお、『「反核」異論』についてであるが、これは東西冷戦構造が揺らぎだしたころの世界情勢が背景にあり（特にポーランドの民主化運動との関係）、また、３００名強の文学者たちの反核署名活動の持つ危険性への批判については、吉本氏の論調には基本的に同調できる面が多いのであるが（もっとも、私は反核・反原発そのものには氏と異なり明確に賛成であるが）、ただ、氏のこれでもかこれでもかといった岩波書店と朝日新聞ならびに毎日新聞に対する嫌悪の情があまりにも強くて、読んでいて辟易するのを禁じえない。

なお、持論の科学技術論を中とした原発擁護論は、このころも盛んに展開しており、それはそれでいいとしても、３．１１を経験してもなおそれを堅持している態度には大なる怒りを感じる。

また、『蟹工船』を巡る議論の中で、第２次大戦後と現在とを比較して若者のひ弱さを嘆く場面があるが、それは比較の対象を間違っている。グローバル化した巨大金融資本が国家を超えて格差を広げ、その中で翻弄される若者たちの現状は、精神論で解決できるものではない。

（もっとも、いまの若もたちのおかれている状況を全く把握していないかといえばそうでもなく、でも、ところどころ文春や読売が喜ぶような表現があり、それを誇大にキャッチフレーズ化される隙が与えるという悪しき結果を招いていることは否めない）。

さて、ここでは今年の週刊新潮の新年号に掲載された吉本隆明氏へのインタビュー記事のさわりの部分だけを引用し、それに対する氏への姜 尚中氏の批判（2012 年 3 月 27 日付け朝日新聞夕刊）を挙げ、最後に私のコメントを付け足したい。

【資料 1】

週刊新潮（2012 年 1 月 5 日号，1 月 12 日号 p61～63 掲載）

「吉本隆明」　　２時間インタビュー

「反原発」で猿になる！

原発事故は、日本人の原子力に対する見方を一変させてしまった。以来、自然エネルギーへのてんかんばかりが叫ばれ、既存の原発も運転再開は厳しいままだ。だが、そんな日本を覆う「反原発」の空気に異論を唱えるのが思想家・吉本隆明氏。曰く、反原発で猿になる。

（筆者注）字下げ部分は、週刊新潮編集部のリード部分。以下同様。

僕は以前から反核・反原発を掲げる人たちに対して、厳しく批判してきました。それはいまでも変わりません。実際、福島第一原発の事故では被害が出ているし、何人かの人は放射能によって身体的な障害が生じるかも知れない。そのために”原発はもう廃止した方がいい”という声が高まっているのですが、それはあまりにも乱暴な素人の論理です。今回、改めて根底から問われなくてはいけないのは、人類が積み上げてきた科学の成果を一度の事故で放棄していいのか、ということなんです。

考えてもみてください。自動車だって事故で亡くなる人が大勢いますが、だからといって車を無くしてしまえという話にはならないでしょう。ある技術があって、そのために損害が出たからといって廃止するのは、人間が進歩することによって文明を築いてきたという近代の考え方を否定するものです。そして技術の側にも問題がある。専門家である彼らまで“危ない”と言い出して素人の論理に同調するのは「悪」だとさえ思います。

> 思想家・吉本隆明氏。日本の言論界をリードしてきた「知の巨人」である。レーニンに傾倒し、60 年安保闘争では逮捕も経験した吉本氏だが、旧来のイデオロギーに左右されない斬新な評論活動に影響を受けた知識人は少なくない。時にはサブカルチャーやマンガ批判も手がけ、原発・核問題についても独自の立場から発言してきた。

いま、原発を巡る議論は「恐怖感」が中心になっています。恐怖感というのは、人間が持っている共通の弱さで、誰もがそれに流されてしまいがちです。しかし、原子力は悪党が生み出したのでも泥棒が作ったわけでもありません。紛れもなく「文明」が生み出した技術です。

もちろん、放射能が安全だとは言いません。でも、レントゲン写真なんて生まれてから死ぬまで何回も撮る。普通に暮らしていても放射線は浴びるものです。この世のエネルギーの源は元をただせばすべて原子やその核の力なのに、それを異常に恐れるのはおかしい。

それでも、恐怖心を 100%取り除きたいというのなら、原発を完全に放棄する以外に方法はありません。しかし、止めてしまったらどうなるか。恐怖心は消えるでしょうが、文明を発展させてきた長年の努力は水泡に帰してしまう。人類が培ってきた核開発の技術もすべて意味がなくなってしまう。それは人間が猿から別れて発達し、今日まで行ってきた営みを否定することと同じなんです。

押し戻すことはできない

文明の発達というのは常に危険との共存だったということも忘れてはなりません。科学技術というのは失敗してもまた挑戦する、そして改善していく、その繰り返しです。危険が現れる度に防御策を講じるというイタチごっこです。その中で、辛うじて上手く使うことが出来るまで作り上げたものが「原子力」だといえます。それが人間の文明の姿であり形でもある。だとすれば、我々が今すべきは、原発を止めてしまうことではなく、完璧に近いほどの放射線に対する防御策を改めて講じることです。

正直言って原発をどうするか、ちゃんととした議論が出来るにはまだ時間がかかるでしょう。原発を改良するとか防御策を完璧にするというのは技術の問題ですが、人間の恐怖心がそれを阻んでいるからです。原発の存否を決めるのは、「恐怖心」や「利益」より、技術論と文明論にかかっていると考えるからです。

> 東工大出身で技術者だった吉本氏は、原発・核兵器に関しても事あるごとに発言してきた。その主張は「反核・反原発」を唱える人は「蒙昧」でしかないという痛烈なものだ。なかでも 80 年代に盛り上がった文学者らの反核運動では、それを“エセ平和

主義”と批判し、議論を呼んだ。

もちろん、原子力を語るとき核兵器の問題は避けて通れません。

戦争で大切なのは、主として兵器ですから改良して相手に勝るようにしていくのが戦時の技術開発です。そうやって開発してきた原子爆弾は、今や、人類を何度も滅亡させられるだけの規模に達している。しかし、人間が原子力という技術を手に入れたとき、それがどんな現実をもたらすかまでは想像していなかった。どんなに優れた人でも予想はできなかったのです。

今回の原発事故も天災とか人災などと言われていますが、やはり危険を予想できなかった。つまり、人間は新技術を開発する過程で危険極まりないものを作ってしまうという大矛盾を抱えているのです。しかし、それでも科学技術や知識というものはいったん手に入れたら元に戻すことはできない。どんなに危なくて退廃的であっても否定することは出来ないのです。それ以上のもの作ったり考え出すしか道はない。それを反核・反原発の人たちは理解していないのです。

「戦後」に似ている

福島原発の事故が起きてから、よく思い出すのは第２次世界大戦後の日本社会です。当時、僕は敗戦のショックに打ちのめされて迷いに迷っていた。敗戦を契機にほとんどの価値観が 180 度変わってしまいましたから。知り合いにも「もう日本はお終いだ」と自決する人もいた。

世の中では時代が変わると政府も変わる、人の考え方も変わる。それがごく当然なのですが、僕はそれにもの凄く違和感があった。だから、福島原発事故を取り巻く言論を見ていると、当時と重なって見えてしまうのです。

> 福島原発事故をきっかけに原子力に対する見方は大きく変わった。菅直人前総理は「脱原発」を政策に掲げ、ソフトバンクの孫正義社長など「自然エネルギー」ビジネスに乗り出す動きも出ている。しかし、電力不足が表面化しても、テレビ・新聞は原発の再開について“タブー”のように扱うばかりだ。だが、それでも吉本氏は原子力を捨てるべきではないといい続ける。

原発を捨て自然エネルギーが取って代わるべきだという議論もありますが、それこそ、文明に逆行する、行為です。たとえ事故を起こしても、一度獲得した原発の技術を高めてゆくことが発展のあり方です。僕はこういう立場ですから、批判はしょっちゅうです。特に今みたいな状況の中では誤解のないように言うのは中々難しいんです。しかし、それでも考えを変えなかったのは、いつも「元個人」に立ち返って考えていたからです。

元個人とは私なりの言い方なんですが、個人の生き方の本質、本性という意味。社会的にどうかとか政治的な立場など一切関係ない。生まれや育ちの全部から得た自分の総合的な考え方、自分にとって本当だとする以外にない。そう思ったとき反原発は間違いだと気がついた。

「世間で通用している考えがやっぱり正しいんじゃないか」という動揺を防ぐには元個人に立ち返って考えてみることです。そして、そこに行きつくまでは、僕は力の限り、能力の限り、自分の考えはこうだということを書くし、述べるだろうと思うんです。

//

吉本隆明を悼む

大衆に寄り添うがゆえの変貌
丸山よりも「近代主義者」

姜 尚中（2012 年 3 月朝日新聞）

小林秀雄を文学の祖と呼んだのは坂口安吾だ。安吾のひそみに倣って言えば、吉本隆明こそ思想界の教組と言うにふさわしい。無冠の帝王のように在野に徹し、戦後の一切の権威、一切の擬制を根底から揺さぶる原理的な思想的根拠を指し示した点で、吉本の登場はひとつの大きな事件であった。

全共闘運動が最後の光芒を放った東大闘争の明くる年、吉本の著作と出会ったことは、上京してきたばかりのしがない「在日」の大学生にとっても大きな事件だった。吉本の丸山真男論をはじめて読んだとき、わたしはすかさず教組にひれ伏す「信徒」になっていたのである。

大衆の生活実感の根っこから遊離した「近代主義」的な知識人としての丸山。これに対して「大衆の原像」に降りたって、「日本的情況」（天皇制など）との血みどろの格闘の中から思想の拠りどころを紡ぎ出す吉本。その対照は鮮やかであった。以後、わたしは、『共同幻想論』、『心的現象論序説』などの原理的な著作や『擬制の終焉』などの情況論的な評論を貪り読み、教祖の言葉のひとつひとつに深遠な意味を見いだしたつもりでいた。

だが、やがてわたしの中で教組からの「脱魔術化」が始まることになる。

1980 年代、大衆の「欲望自然主義」は留まるところを知らず、文字通り日本は「ジャパン・アズ・ナンバーワン」として聳え立つ不夜城のような繁栄を謳歌するようになり、教組はいつの間にか大衆の欲望をフェティッシュに担ぎ回る消費資本主義のトリックスターに変貌していたからである。

経済の「大東亜共栄圏」も夢ではないというような夜郎自大の日本礼賛に「胸くその悪くなるような 80 年代」と、日記の片隅に記した当時のわたしにとって、大衆の「欲望自然主義」を無邪気に肯定する吉本は「転向」したとしか思えなかった。

しかし、吉本は「転向」したのではなかった。それは、大衆の実感に寄り添う吉本の思想が辿らざるをえなかった必然であった。それは大西巨人の言葉を使えば、「欲情との結託」と言えるはずだ。

時あたかも、大衆とのずるずるべったりの結託に根源的な懐疑の目を向け、「精神の貴族主義」を貫いた丸山は、昭和の終焉、冷戦の崩壊とともにひとつの時代の終わりを告げるように静かに息をひきとった。

あれから十余年、空前の原発事故を目撃しても、科学によって科学の限界を超えられると嘯いた吉本に、かつての教組の面影はどこにもなかった。ヒロシマでの被爆体験をもち、被爆者手帳の交付を拒み続けた丸山が生きていたならば、断腸の思いで原発の廃止を訴えたはずだ。どちらが、無限の進歩と科学万能を信じて疑わない「近代主義者」なのか、瞭然ではないか。この意味でも教組の思想的な命脈は尽きていたのである。心からご冥福を祈りたい。合掌。

//

【私見】

導入部で少し触れたが、私がどうしても「原発擁護論＝反原発論批判」を説く吉本隆明氏への批判を押さえ切れなくなったのには、いくつかの理由がある。すなわち、

1）氏の科学技術万能論への批判及びそこに潜む専門家礼賛思想（裏返せば、素人＝市民軽蔑論）
2）日本の原発推進がどのように行われてきたかの歴史的、政治的、経済的背景への無知
3）事故から学ぶ反省力の無さ～持論（自論）への固執
4）マスコミや一部文壇の批判力の無さ（「知の巨人」への服従）などである。

的確な学問的な吉本批判は、姜 尚中の文章に凝縮されているので、私は以上の５点を中心に簡潔に述べることにする。

《1. 科学技術万能論批判》

東工大出身ということがこれほどまでにものの考え方（思想）に影響を及ぼすのかと思われるほど、彼は科学技術万能論者である。
その主張と理由はまとめると下記の通りである。曰く、

【「人類が積み上げてきた科学の成果を一度の事故で放棄していいのか」、「ある技術があって、そのために損害が出たからといって廃止するのは、人間が進歩することによって文明を築いてきたという近代の考え方を否定するものだ」、「原発を完全に放棄することは、人間が猿から別れて発達し、今日まで行ってきた営みを否定することと同じだ」、「”原発はもう廃止した方がいい”という声は乱暴な素人の論理だ」、「専門家が素人の論理に同調するのは”悪”」だ」、「原発の存否を決めるのは、”恐怖心”や”利益”より、技術論と文明論にかかっている」、「原発を捨て自然エネルギーが取って代わるべきだという議論もあるが、それこそ文明に逆行する行為だ」、「原発の存否を決めるのは、”恐怖心”や”利益”より、技術論と文明論にかかっている」】・・・・・と。

彼に一貫しているのは「**技術論と文明論」の擁護である。そこから導かれる結論は、「原発の存否を決めるのも、市民の”恐怖心”や”利益”ではなく（すなわち、市民の生命の安全や幸福ではなく）、技術論と文明論である」、ということになるのである。**

ここでいちいちこれらに反論する必要はないが、ただ、いくつか簡潔に触れておきたい。

第１に、彼の科学技術万能論の墓穴を表した喩えに「**自動車だって事故で亡くなる人が大勢いますが、だからといって車を無くしてしまえという話にはならないでしょう。**」という件がある。これは、事故直後に中曽根康弘や石田依良が挙げた喩えと同じであり、財界や東電のレトリックと全く同じである。

自動車といわず飛行機だっていまやそれらの事故は一過性のものと一般に認識されている。一度事故が起きたらそれはそれで完結するし、被害もその場に限定される。しかし、原水爆の被害もそうであるが、放射能という眼に見えず匂いもしない、しかも数百年も数千年も持続する恐怖、数百キロに及ぶ地域を汚染し、数十万もの人々が故郷を追われて逃

げ出さねばならず、海も山も川も田畑も駄目にする原発事故。これがどうして自動車事故と同列に論じられようか。

第２に、専門家と素人論についてである。このことについての吉本氏の立場は、松野元著「原子力防災―原子力リスクすべてと正しく向き合うために」（創英社/三省堂書店）（2007/02）を引用させてもらうと、「**一般市民（国民）は難しいことは分からないし、情報を与えても反対派や否定派などに知恵をさずけたり、一般市民をパニックに陥れたりするのだから、詳しい情報は与えないとするもの**でり、**専門家チームと政府が情報を集めて責任を持って判断して指示をするから、国民や住民など指示にしたがって動けばよい、とする考え方」と同一である**。現在の日本政府および専門機関と専門家などに強くみられ傾向である。

しかし、これは誤りである。そうではなくて、「**一般市民（国民）の保護という観点に立てば、**災害と防災はあらゆる可能性を無視できないので、**一般市民に詳しい情報を伝えてリスクとメリットに対する理解を求めるべきであり、最終的には国民と住民に判断を委ねるべきものだ、とする考え方」が正しい。** 丸山真男と対比して吉本氏を大衆の代表者のようにマスコミは囃し立てるが、果たしてそうなのか大いに疑問である。眼前の政府権力や大企業権力や学界の立場に立っているとしか思えない。

第３に、科学技術と民主主義および倫理の問題についてである。吉本氏は科学技術が進歩する過程では失敗は承知のうえだと言う。多分、自動車事故と原発事故とを同列に扱う論からすればその通りかも知れない。しかし、両者は全く別物である。

政策と科学技術が結びつくところには、いつもテクノ・ファシズムの危険がある。一握りの自称専門家が決定権を独占して、人類に１０００年の被害を与えても、それが判明した時にその専門家集団はもう存在しない。

民主主義の前提の一つは、自己決定の有効性である。国民の自決権は民主主義によって実現される。間違った決定をすれば、その不利益は自分自身に降りかかるから、国民の自己決定の集約が、近似的にもっとも合理的な決定となる。この「自業自得」が民主主義の合理性の根拠である。この合理性が成り立つ条件は、利害関係者には必ず投票権が与えられるということ、決定を下す人と決定を受ける人が同一のコミュニティに「同時に」存在することである。この同時性が、核廃棄物の危険が続く時間の長さになじまない。なぜなら、核廃棄物は最初の１０００年間（米国科学アカデミーは、１００万年間の監察が必要という勧告を出している）が厳重な管理を必要とされている。ということは、原発の稼動は、現代世代が未来世代の利益に反する行為を行うということを意味する。民主主義の理論に反するばかりか、倫理的にも許されない行為だといってよい。

（ついでに言えば、同時性の問題は、「国債」の取り扱いでも、核廃棄物と同じ問題の構造をあらわにする。いまの日本における国債の発行は、現在世代による未来世代からの搾取である）。

（なお、加藤尚武「テクノ・ポピュリズムとテクノ・ファシズムの深い溝」（中央公論　2012年４月号）。

《2. 日本の原発は推進は「誰が」「なぜ」推進してきたのか》

福島原発事故を経験して、いままで日本を支配していた黒い構図が明らかになりつつある。やれ「原子力村」だの、やれ「東電王国」だのという言葉それを指し示している。

もともと日本の原発は、東西冷戦下の国際情勢と日米軍事同盟の強化がもたらしたものであり、日本の保守派の牙城としての位置づけもあった。それに伴ってアメリカの原子力会社が原発を日本へ輸出して利益を得るという構図が整ってきた。そして、高度経済成長路線が確定する中で、電力会社と東芝、日立、三菱、八幡製鉄、鹿島といった関連する大企業が連合し、それらが日本の経済を支配する体制を築きあげていった。

そして、これに原子力学界が加わり、政治家、官僚、財界、学界、
それに読売を筆頭にマスコミを巻き込み、反原発を唱える者やグループを押さえ込んでいった。そのための広告宣伝費は莫大なものであり、そのつけは電力料金となって国民に回されていた。

ここからわかってくることは、本来は無色のはずの科学技術が、一度権力や大企業の側に渡ると、支配する側の意のままになってしまうという実態である。市民の生命よりも企業の利益の方が優先されるという事態が生じるのである。

吉本氏の責任は、このような観点からすれば、権力の片棒を担がされることへの無防備さであり、真意はどうであれ結果的に原発推進派に利用されているということである。彼の原発擁護の発言を取り上げたメディアが、ほぼ原発擁護を掲げるものであることからも、このことは明らかである。この週刊新潮の狙いはまさに、反原発に走る市民を愚民と捉え、或いは、ポピュリズムの流れとして位置づけようとしていることが読み取れる。それに利用さている立場を顧慮すべきである。

《3. 福島第1原発事故から何を学ぶのか》

福島原発事故は、それ以前と以後とのわれわれの社会を見る眼や生き方についての考え方を、大きく変えた。

特に、原発が如何に未熟な科学技術であり（暴発を制御できないにもかかわらず物を作ってしまった)、それが引き起こす結果がどんなにか甚大なものであるかがはっきりと国民の前に示された結果、そのような未熟な装置は除去すべしという世論が多数となったことである。

さらには、如何にわれわれ市民が電力業界に騙され踊らされ消費を貪ってきたことに気づかされたことである。例えば、

★「地球にやさしいエネルギー原子力　　人にやさしい大熊町」
　大熊町（福島県）東京電力福島第１原子力発電所　１号機～４号機
★「原子力　明るい未来のエネルギー」
★「原子力　郷土の発展　豊かな未来」
　双葉町（福島県）東京電力福島第１原子力発電所　５号機～６号機

などの標語は、原発が最大の環境破壊装置であることを覆い隠し、安全なエネルギー源で

あるとのウソを並び立ててきた証拠である。

ここから電力会社とその背後に蠢く「政・官・財・学・マスコミ」複合体の実態が次々と暴かれ始め、電力料金の仕組みの不合理さや、自然エネルギーの可能性が押しつぶされてきたことなどが判明してきた。そして、ここが肝心なところであるが、この事故をめぐる一連の動きの中から、政府や専門家への信頼が全く失われたことである。つまり、彼らは利権の代弁者であり、全く信用できず、自分たち自らが安全を確かめる以外にないということに気づいたことである。ここには、吉本氏の専門家崇拝とは全く異なる、大衆の学習する知恵が見て取れる。

ついでに敷衍しておくと、ドイツの「安全なエネルギー供給に関する倫理委員会」の報告書で取り上げられている「(倫理的) 価値判断」に関する部分を引用しておく（この報告を受けてドイツ政府は昨年６月に 10 年内に原発を全廃することを決めた)。

「原子力エネルギーの利用やその終結、他のエネルギー生産の形態への切り替え等に関する決定はすべて、社会による倫理的価値判断に基づくものであって、これは技術的、あるいは経済的な観点よりも先行しているものである。短期的な利益を優先して、未来の何世代にも負担を強いるような決定に対しては、社会が責任を負わなくてはならない」と。

注 「安全なエネルギー供給に関する倫理委員会」は、連邦首相アンゲラ・メルケルによる委託により 2011 年 4 月 4 日から 5 月 28 日まで設置され、30 日に報告書を提出した。メンバーは、哲学者、　宗教家、社会科学者、ベテラン政治家、経済人など 17 名。原発の専門家は 1 人もはいっていなかった)。

福島原発事故を経験したわれわれ日本人が最も学ぶべきことは、政局や党利党略や経済的利益優先ではなくて、未来の何世代に対する社会的責任の負い方なのである。

《4. 原発礼賛論を避けているマスコミの無責任さ》

氏の逝去された日の夕刊や翌日の朝刊には、氏のこれまでの業績が予行演習されていたかのごとくに書き立てられていた。「知の巨人」逝くと。そこには、いまわれわれが最も関心を抱き最も喫緊な課題としている原発問題に対する氏の 3.11 後の言説に対する批評は一切ない。記事を書いた記者たちが最近の氏の言説を知らなかったとすれば、勉強不足も甚だしいといえるし、知っていたとすれば批判能力の欠如としか言いようが無い。子どもたちではなく、記者たちの学力低下こそが問われるべきである。

私は、マスコミ＝記者たちのこのような腫れ物に触るような態度に危機感を持つと同時に、氏への冒涜でもあるとさえ考えている。

＜特別寄稿　その３＞

「私が塾から学んだもの」

米澤　幸三（千葉県・市原市）

この文章を、2012 年 6 月 2 日〔土〕永眠した故三谷興一氏に捧げる。
（故）三谷氏は歪んだ空間に直線を引くように生きた異才の人でした。そして一瞬の出会いの中で、私の本質を引き出してくれた恩師とも言える唯一の人でした。三谷氏との出会いを心から感謝しつつ、合掌。　　（米澤）

１．「神様」は思いもかけない姿で現れる

いつものように９時半をまわった頃、３０代後半のその母親はやってきた。
髪が乱れ、少し青白い顔にはいましも駆けつけたように汗が浮かび、今しがた食後のあと片付けを終えたのかのようにエプロンは濡れていた。
「よろしくお願いします。」
汗をぬぐいながらその女性は私の前の席に座った。半年に一度の面談の日だった。いつものように小学５年生になる子供の話をした。落ち着きがないこと、計算ミスが多いこと、性格は明るいが授業中ほかの生徒をからかう姿が目につくこと。私がひとこと言うたびに母親は何度も何度もうなずき返した。またひとこと言うと母親は再び何度も何度もうなずき返した。けれど母親からは言葉は返って来ず、私だけが一方的に話す面談に私は飽きてきた。３０分の面談を１５分で切り上げようと決めた。面談を終わりにすることを告げると母親は
「ありがとうございます」
とお辞儀をして玄関に向かった。母親を玄関まで送ったその時に、この人は私が毎月月謝袋に入れた私の手紙など読まないだろうな、とふと思って聞いてみた。私は毎月月謝袋の中に、１カ月の問子供の勉強の感想を書くことにしていた。それが教え方の下手な私に子供を預けてくれたご両親に対する私の精いっぱいの誠意だと信じていた。８０人近い、生徒一人一人の親に手紙を書くことは大変だったが、自分の義務と思って書き続けた。そのことをこの母親に聞いてみたくなった。
「きっとお忙しいでしょうから、月謝袋に入れた私の手紙など読む時間がないでしょうね。」
意外な言葉が返ってきた。

「いいえ」
母親は汗にもつれた前髪を掻きあげて、私ににっこり笑いかけながら答えた。
「あのお手紙を読むことは、私にとって月に一度の勉強の時間ですから。」
そう言って母親は夜の闇に消えていった。その言葉に打ちのめされて、私はしばらくそこから立ち上がることができなかった。近くの安アパートに親子３人で暮らしていると聞いていた。その母親を明らかに見下している自分に気づいた。母親を前にきれいごとばかり並べていわれなき優越感に浸っていた自分に気付かされた。頭にガーンと鉄拳を喰らったかのようにうつむいたまま、畳を見つめ続けた。そしてようやく一番大切なことに気付いた。

こんなに厳しい一喝を与えてくれる人は、私にとって「神様」に違いない。
「神様」はひげを長く伸ばした白髪の老人の姿をして現れるわけではない。
「神様」は思いもよらぬ姿で、思いもよらぬ時に私の前に立つ。あの女性は私の小さな「神様」だったに違いない。「神様」は私の近くに必ずいる。

これが私が第一に学んだことである。

２．生徒と向き合う

一人一人の子供と正面から向き合おう。そしてその子のもつ悩みを子供の側に立って一緒に考えていこうと私はしばらくして決意した。自分のすべての時間を子供を教えるために捧げるつもりだった。夜は部活で眠いので勉強が進みにくい、だから朝早く勉強したいという中学生の声に応えて、朝５時から早朝勉強したこともあった。正直にいって、夜 11 時まで勉強を見てから数時間の眠りの後、朝５時から学校が始まる直前の７時まで一緒に勉強するのはつらかった。生徒にとってもつらさは同じだったに違いない。一人抜け、二人抜け、とうとう朝一人も起きられなくなるまで３か月間早朝勉強は続いた。英語は暗記に徹した。教科書の隅から隅まで全部暗記させ、いつでも空で言えるように反復させた。暗記が終わるまで帰宅させなかった。また暗記してこない人には激しい叱咤を浴びせた。塾の始まる前に外をのぞくと、教室の空くのを待つ生徒が街灯の下で、英語の教科書を必死に暗記している姿をよく目にした。生徒の英語力はメキメキ上向き、地元の公立中学の先生から紹介されてやってくる生徒も少なくなかった。生徒のカを伸ばす塾という評判が広まっていった。

そんなある夜、授業中にガラス戸を激しく叩く音がした。壊れんばかりの激しさだった。開けて見ると派手なアロハシャツを着て、パーマのかかった茶髪の中学生が一人立っていた。
「何?」
私が聞くと、その少年は１万円札を４，５枚出してきて
「勉強、教えてもらいたいんだけど・・・」と言った。
「今授業中だから、１０時半にもう一度来て」
少年はうなずいて立ち去った。１０時半、約束通り彼はやってきた。名を光武美という中学 3 年の男生徒だった。 一度も私の顔を見ずに、彼は話し続けた。彼の話によれば小学生の頃、担任の先生と仲が悪く授業を受ける気持ちにならなかったという。授業中ずっと外を向いていた。担任の教師との険悪な関係は６年が終わるまで続いたが、中学に入ったらもう一度勉強をやり直そうと思っていた。担任が変われば自分もやる気になると。しかし中学入学第１日目にその望みは打ち砕かれた。中学の学年主任をしていた担任の一言だった。
「おい、光。お前は３年間俺が担任する。お前のことは小学生の先生から聞いている。授業中何してもいいから、授業だけはじゃまするな。いいか。」
この一言でやる気をなくしてしまった。
勉強しない分ハンドボールの部活に熱中した。　選手として国体に出るような優れたコーチの指導のもとに、彼のチームはメキメキカをつけ、県下で敵するものはいなくなった。　練習相手は高校のチームとなったが、練習すればするほどチームはますます強くなった。　彼はそのあり余るエネルギーをもて余し喧嘩に明け暮れ、いつしかその中学の番長のような立場になっていた。　他校の不良学生が７、８人やってき喧嘩を吹っかけても、いつも一人で立ち向かい、コテンパに痛めつけられたが、その負けっぷりの良さで他校の生徒から一目置かれる存在になっていった。　そして中学３年になった。　高校には進学したかった。　ハンドボールの仲間と、高校に行ったらそれぞれのハンドボール部を率いて県大会優勝を争おうと誓いあった。　だから勉強を教えてほしいと訴えた。

その翌日から学校の終わる４時から７時まで塾に来て一人勉強し、夕食時に帰宅して再び８時から１１時まで勉強する毎日が続いた。小学校の九九は分かるが、分数小数から分からないというので小学校まで戻って教科書を１ページずつ解き始めた。小学４年、５年、６年と進み、９月にようやく中学３年の勉強に近づいてきた。一人勉強を卒業し、中学３年のクラスに入った時の喜びようはなかった。１０月の中間テスト

では同じクラスにいる生徒会長の点数を越えて国語で７８点を取って実力を証明していた。彼の豹変ぶりに担任の先生は戸惑っているようすだった。
そして受験。
内申点の悪いため、通学に２時間かかる私立高校を受験するように担任の先生から進路指導で勧められたが、これを拒否。自分の進路は自分で決めると言って、公立高校１校を受験することにし、周囲の心配をよそに合格した。
しかし入学３カ月後、光君が高校を退学したことを風の便りに聞いた。
信じられなかった。なぜ?　どうして?　あんなに行きたがっていた高校なのに。

少しずつ理由が洩れてきた。ハンドボール部が高校になかったので、顧問の先生を探して新しく部活を立ち上げようとした。彼の熱意に部員は集まったが、どの先生からもハンドボールの経験がないことを理由に顧問を断わられた。その断り方に冷たさを感じたようだ。どの先生からも断られた彼は、このような高校にとどまる理由を失った。小学校の悪夢がよみがえったのかもしれない。光君はハンドボール部を作ろうとする３カ月の努力の後、高校を退学して家業の畳屋を継ぐことにした。私は衝撃を受けた。勉強をどうすればいいか、その方法は教えたが、人間を強くする方法は教えていなかったことがわかった。　困難を前にしてくじけない強さ、それをどのようにして教えていけばいいのか。　光君から与えられた大きな課題を前に、私は途方にくれた。ただ学んだことが一つあった。

生徒に教えてはいけない。
生徒みずから学ぶカをつけなければならない。

これが第二に学んだことだった。でも、どうしたらいいかわからなかった。

３．筆談は内面を照らす鏡

　教えることが怖かった。 全力で教えた生徒の内面があのように弱々しかったとは思わなかった。私の前では粘りがあった。円錐の側面を展開すると扇形になることが納得できなかった光君は、授業の進行を止めて一人で三角形と円をノートに書き、そこから円錐を作ろうとしたが、とうとう作れないことが分かってようやく納得した。
「先生、授業を続けてください」
何とか自分で考えようとする子であった。その生徒が簡単に高校を退学してしまうこ

とが信じられなかった。私とのあの濃密な1年間は何だったのか。疑問を抱えたまま時間だけが過ぎていった。教えてはいけないと思った。生徒みずからが考えなければいけない。けれどもその方法が思いつかなかった。
生徒の成績はだんだん下がり、父兄の間で「教えない塾」という評判がたち、生徒は次々にやめていった。８０人いた生徒が３年後ついに１６人になり、さらに１３人になった。それでも迷いの中にいる私を支持する生徒とその家族が１３人もいる。
そのことが信じられず感動したが、どうしたらいいのかわからなかった。そしてその１３人が一生忘れられないような、素晴らしい贈り物を私に残してくれた。それが「風の記憶」という筆談集である。

その頃戸惑いの中にいる私に耳よりな話が舞い込んできた。勉強できない子供を筆談を通して伸ばしている塾長の講演があるという。半信半疑ながら早速行ってみた。和歌山からやってきたその塾長の話に興味を持ち、その後研修会に参加し、その塾長本人と筆談をする機会を持った。最初の筆談は衝撃的であった。私の緊張感が筆を通して相手に伝わり、相手の塾長を金縛りにしてしまった。塾長は動かなくなって、原稿用紙に意味不明な字を書く自分の手をみつめながら驚いていた。わずか１０mm 平方のマス目を間に挟んで筆談をするだけなのに、二人の間には目に見えない心の交流の場が形作られていることが分かった。

自分の塾に戻り試行錯誤を繰り返しつつ、１３人の生徒と筆談を始めた。最初は言葉のすれ違いが多く、私が一方的に教え諭す場面が多かったが、まもなく教え諭そうとして相手を抑えている自分の威圧的な姿がはっきり見えてきた。その分謙虚になれた。そして少しずつ謙虚になっていくにつれ、生徒が言い淀んでいる時間を静かに待つゆとりができてきた。言い淀んでいる生徒は思考停止しているのではなく、自分の数少ない語彙の中から一番ふさわしい言葉を探しあぐねていることが分かってきた。私にとって筆談は生徒の内面の揺らぎを見つめるのはもちろんのこと、私の姿を見つめ直す内省の場へと変わっていった。生徒といい筆談をした時は、試験でいい成績を取った時のように気分がよかった。生徒は筆談を通して自問自答し、自分がなろうとする最高の姿を私に垣間見させてくれた。そして生徒はこの筆談を通して私の中から最高の教師を引き出してくれた。 １回の筆談で２時間、問題を抱えていると思われる生徒を呼んで筆談が始まった。上からの目線を捨て、対等の気持ちで向かい合えるようになれるまで１年以上かかった。それは私が生徒を前にして、教師として身構える姿勢を解きほぐすのに必要な時間であった。

その中からこれからの塾の方針が見えてきた。　勉強の大まかな順序は学習進度表という形で、生徒本人が毎日記録することにした。進度表に日付を書き込むことで自分が今日どこまで進んだか、次回何から始めるのかが本人に明瞭になった。生徒をどのように指導するかではなく、生徒が自分でやりたい勉強を進める過程で必要なものは何かを考え、それを用意することに思いを巡らした。どこでつまずくかを予想し、つまずいた瞬間にすかさずメモやモデル、ノートなど助けになるものを提示するためには、これまで以上に事前の準備は入念におこなわなければならなかった。勉強の終わった生徒はその日の勉強の反省を感想ノートに書くことにした。鋭い反省はその生徒に深い勉強の結果を示し、幼い反省は浅い勉強を生徒自身に教えてくれた。自分で勉強を進められない生徒には、分かる所まで戻ってやり直す提案をいくつかして、本人にコースを選ばせた。私の役割は教室の一角に座り、つまずいて立ち往生している生徒の沈黙と、深く思考中の生徒の沈黙とを見分け、助け船を素早く出すということに尽きた。こうして１年が経過し、再出発して初めての高校受験を迎えた。

高校受験の前夜の１０時過ぎ、三々五々と散って行った女生徒たちがなぜかニコニコ笑いながら戻ってきた。
「先生、梅がきれいです。一緒に見ませんか。」
つられて感想ノートをめくっていた手を休めて、教室の外に出た。寒々とした夜空に白い梅の花が凛として咲き誇っていた。しばらく全員声もなく見とれていた。
試験前夜に梅の花を愛でるゆとりのある生徒たちを半分頼もしく、半分うらやましく思った。みんな幸せそうな顔をしていた。きっと私も取っておきの顔をしていたことだろう。

公立校の入試は二日間にわたって行われた。
第一日目の夜ほとんどの生徒は試験の疲れと翌日の準備で塾を休むことが多い。
が、その一人の女生徒は違っていた。いつものように定刻に来て、いつものように一人で授業前に１０分間黙想し、いつものようにその日にする勉強を確認し、いつものように一人で勉強を進み、いつものように解き終わったノートを机の横に積み上げて採点を促し、いつものように次の科目へと進んでいった。そしてその日のすべての課題を終え、採点されたノートにうなずきながら目を走らせ、感想ノートを書き終え、生徒は静かに挨拶をして教室を立ち去った。その間私たちは一言も言葉を交わすことはなかったが、言葉では表現できないほど深く心が融け合って一つになっているのを感じた。

思えばそれが、生徒が私に贈ってくれた最高の贈り物であった。
私はその生徒を通して、自分が求めてやまなかった究極の授業の姿を学ばせてもらった。私は自分のできる授業の頂点を知った。これ以上の授業は私にはできないと思った。

第一段階　先生動かず、生徒動かず。
第二段階　先生動いて、生徒動かず。
第三段階　先生動いて、生徒動く。

いい塾ができるのはこの段階までである。しかしその次の段階がある。

第四段階　先生動かず、生徒動く。

私は第四段階の授業の姿を垣間見せてもらった。でも勉強はここにとどまらない。
それぞれの人にはさらにそこから先が待っている。それこそ本当の勉強であると思う。

第五段階　先生おらず、生徒動く。

自分が自分の教師になる。自分の意思で計画し、自分の力すべてをかけて実行し、
自分で評価する。これこそ勉強の本当の姿だと思う。

４．三つの幸せ

両親がつけた私の名前は「幸三」という。名前に込められた３つの幸せとは何か、子供の時から考えてきた。以前は３つの幸せを、この世に生まれた幸せ、この世に生きる幸せ、やるべきことをやり遂げて静かにこの世を去る幸せ、と考えていた。しかし最近はこの答は当たり前すぎて、満足できなくなった。何かが足りない。その何かがようやく見えてきた。生きている時何に幸せを感じるか、それこそ人にとって大事なことなのだ。私にとって生きる時に感じる 3 つの幸せとは何だろうか。
ある日ふと答が見つかった。

それは**人生の指針となるような「１冊の本」に出会うこと。**
そして**私以上に私を理解する「１人の友」に出会うこと。**
最後に**自分の人生を貫く「１つの言葉」に出会うこと。**

病弱な一人っ子だったせいか子供のころから本だけが友だちだった。しかし大人になっても人生の 1 冊と言えるような本にはなかなか出会わなかった。どの本もある部分

で共鳴するものの、ある部分で不満が残った。しかしその中で、読み返すたびに体が熱くなり、読み返すたびに心が浄化され、読み返すたびに本の中のこの人を超えたいと思わずにはいられない本が１冊あることに気づいた。
それが生徒との筆談を記録した私の**「風の記憶」**である。
今でもこの本を読むたびに胸が熱くなる。その一方で、今の私には、この中の「私自身」をこれ以上越えることができないと分かった。その時、塾を閉じようと決意した。そして塾とは別の道を通してこの本の中の自分を越えたいと思った。

私はまた１人の友に出会った。研修会に向かう新幹線の中で、友はこんな話をしてくれた。
「世の中には頭のいい人はたくさんいる。一を知って十を知るような頭のいい人は、いわば切れ味の鋭い日本刀のようなものだ。しかし日本刀は竹は切れても大木は倒れない。大木を倒すには鉈のような鈍い力が必要だ。これでもか、これでもかと繰り返し打ちすえていくうちに、いつしか大木は音を立てて倒れていくのだ。歴史はいつもそのような鉈のような人たちの力によって変わってきた。頭がいい人たちの力では切ることはできても倒すことはできない。龍馬も決して頭のいい人ではなかった。むしろ頭の鈍い人だったからこそ、何度も何度も反芻し、考え、その中から少しずつ見えてくるものを信じた。根本から歴史を変えるという大きな仕事ができるのは鋭い知性ではなく、鈍い知性だ。」
友は誰に語るともなくつぶやくように話してくれた。その時以来その話は私の頭から離れなくなり、時折思い出しては反芻した。
「鉈のように鈍い知性。」
数年後その言葉は私に向けられた友の助言だと気付いた。自分の不器用さに何十年間悩み続けてきた私には、その言葉が天啓のように響いた。でも友の話を一言でいうとどんな言葉になるのだろうか。さらに数年考え続け、ようやく一つの言葉にたどり着いた。

愚直。
「お前はお前らしく愚直に生きろ。」

そうだ。私には私らしく生きるほかないのだ。友の教えは、私の人生の転機になった。自分の不器用さを恥じることはこの時から少なくなった。愚かであっても、自分の愚かさに気付きつつも、それを謙虚に認める誠実さを失わない時、愚直というのだろう。その意味で愚直は、単なる愚かさとは違う。愚直とはおのれの愚かさに気がつきつつ

生きる愚者の生き方だ。私の人生は、この友との出会いで決まったといっていい。「愚直に生きろ」ということは、言い換えれば「バカを貫け」ということだ。「一を以てこれを貫く」と孔子もいっている。これなら私にもできそうだ。
心おきなく生きてみようと思った。
私の人生の転機をなすこの言葉に導いてくれた友こそ、
森本仁夫氏　である。

５．歩くことは考えること　"To walk is to think."

２０１１年９月下旬カンボジアを旅した。タイが大洪水に見舞われる１週間前である。 主要道路はほとんど冠水していて、バスは水しぶきをあげながら国道を走ってシュムリアップに向かった。到着したシュムリアップも街の半分以上は冠水していて、水の中を散策した。ふだんは外国人観光客であふれるアンコールワットの街も大雨と洪水に祟られて、観光客はホテルに閉じ込められ、逆にカンボジア人が地から湧きでたように通りにあふれていた。カンボジア人は洪水を楽しむ方法を知っていた。
この日シュムリアップは観光客の街からカンボジア人自身の街に変わっていた。土産物店もタクシーも休業したガランとした街を、カンボジア人と同じように私も裸足になり、水の中を歩き回った。歩きながらそれまで見えなかったものが見え始め、それまで気づかなかったものに気づき、それまで考えもしなかったことを考えている自分に気がついた。何度か来て見知っているこの街が別の様相を示していることに驚いた。シュムリアップの街の匂いを、この日初めて嗅いだような気がした。歩くことがこのような新鮮な感覚を刺激してくれた。

歩くことの意味をその時考えた。先賢も多く歩いた。イエスキリストも立ち止まることなく死海のほとりを歩き続けた人である。孔子は歩くことができなくなるまで華中を歩き続けた。ブッダは死の直前まで、北インドとネパールを教えを説きながら歩き続けることを使命とした。賢人たちは歩きながら考え、考えながら歩いた。人類の心をつかんだ人たちは、常に歩きながら大地を通して考えていた。歩くことで自我の閾は限りなく低くなり、周りの自然と溶け合うようになる。その融合の中から自我の枠を超えた智が生まれるのではないのか。歩くことなく頭で得たものは単なる惰報であり、知識ではない。歩きつつ考える者のみが情報を知識に変え、さらに知識を知恵に変えることができる。歩くことの少なかったマルコムＸは、歩くことをいとわなかったキング牧師に及ばない。歩く姿を見ることの少ないダライラマは、いつも歩くこと

をいとわなかったガンジーに遠く及ばない。歩きつつ彼らは、人類の心を言葉にした。今日私たちが直面する問題に圧倒されて立ちすくむのは、歩くことをなく考えているせいではないのか。これがカンボジアの街を歩き回った感想である。

１	歩くことは考えることである。	To walk is to think.
２	考えることは歩くことである。	To think is to walk.
３	歩かないことは考えないことである。	Not to walk is not to think.

けれど歩くのはいつも一人でなければならない。一人歩きながら考える。いや、考えようとする気持ちすら消えて歩きに歩く。その時、あるいは叡智が舞い込んでくるのかもしれない。

建築家の安藤忠雄には歩きながら考えた青春時代があった。写真で見たヨーロッパの美しい寺院を実際に見たい一心で安藤青年はイタリアに飛ぶ。１つの寺院の美しさに感動し、次の寺院まで歩く。お金がないからひたすら歩く。歩きながら自分の感動とそこから発する疑問を何度も反芻する。そして数週間後、自分なりの解答を得る。その後次の寺院に対面する。そんな旅を繰り返す。この青春の体験が現在の自分の建築を支えている、といっている。歩き続けたブッダは美しい言葉を残している。

「犀の角のようにひとり歩め。」

６．心に「鎮守の森」を

２０１１年3月１１日、大きな地震と津波が東日本を襲った。凄惨な地獄図のような上空写真を毎日テレビを通して見ている時、不思議な光景を目撃した。すべて破壊され焼き尽くされた灰色の画面の中に、ポツンと緑の一画が見えた。よく見ると小さな森である。あの津波にも負けずに生き残った森に目を凝らす間もなく、画面は移動していった。津波の悲惨さを強調するアナウンサーもこの森には気付いたものの、これをどのように報道したらいいかわからず、言いよどんで素通りした。大津波に耐え、負けなかったあの緑はシイ、タブ、カシの常緑広葉樹からなる鎮守の森であった。鎮守の森が教えてくれるものを説き続け、自然災害から人々を守るために日本中にシイ、カシ、タブの常緑樹を三千万本植えてきた男がいる。
宮脇昭である。

宮脇はドイツのチュクセン教授のもとで学んだ「潜在自然植生」という概念に導かれ

て、日本の津々浦々の森を調査し、その土地に合った植生を提案してきた気骨のある学者である。潜在自然植生とは、火事や洪水で土地が破壊された時、廃墟の中からどんな植物が中心になって育ってくるかを調べ、その植生を森作りに役立てようという考え方である。それが日本では高度のある所ではカシであり、高度が下がるに従ってシイ、タブになるということを、全国の学者、学生の協力で調べあげ、全１０巻の前代未聞の大著『日本植生誌』を完成する。２０００年勲二等瑞宝章を受章。

この書によって日本のどこでも本来の自然植生は何か、すぐにわかるようになった。マレーシアで再生不能といわれた熱帯雨林の再生に成功し、中国の万里の長城でモウコナラの植林に成功しつつある。そして宮脇は今日本にあふれるマツ、スギ、ヒノキからなる森はニセの森である、という。

マツ、スギ、ヒノキは津波が来ればすぐに倒れ、火事になれば火を吐いて燃える。建築材としては使いやすく、すぐ育つかもしれないが、人の命を守らないニセの森だと。

これに対して人の命を災害から守ったのは、日本古来の潜在自然植生であるカシ、シイ、タブの林であり、それは鎮守の森として人々に親しまれ、崇められてきた。ニセの森も必要だが、人の命を守る鎮守の森も近くになくてはならない。

１９２３年の関東大震災の時学校の校庭に逃げ込んだ１５０人を待っていたのは、火勢に押されて火を噴くマツ、スギの樹木であった。針葉樹の吐き出す炎で６割の人が命を落とした。これに対して鎮守の森に逃げ込んだ８０人はカシ、シイに守られて全員助かった。シイの木は葉から水を滴らせて火から守り、火勢がさらに強まると枝や幹に水を張り巡らして人の命を守ったという。

こうして３０００万本の木を植え続けた宮脇は、来るべき東海沖地震に備えて緊急に常緑広葉樹を植林する運動の必要を説いている。これこそ安価で最高の防災対策であると。

大津波に襲われたのは東日本だが、日本再生を担う子供の教育の場で今何を教えるべきか、これまでの教育が根本から疑問視されているように思う。その意味でここでも大津波が押し寄せてきている。膨大な情報が行き来し、膨大な時間が浪費されている。教育の中でニセの知識を避け、日本本来の「潜在自然植生」とは何かが探求されなければならない。それは、何度も何度も打ち据えて大木を倒す斧のような知性を育てることに通じている。

インドにあるダライラマの大学では基礎科目は４教科しかないという。日本では２年

間の教養課程では４０科目以上選ばなければならないのと好対照である。
そこで求められるのはまず母国語に習熟すること。自分のアイデンティティを根づかせることが学習の第一歩である。次に哲学。教養としての哲学ではなく、これからどう生きるかという視点から自分の人生の指針を探すことが求められる。自分の人生の指針となる哲学の探求、これが第２である。３番目に英語の習得。英語は今や世界と交流するツールである。英語が分かればインドの片隅で世界から学ぶことができる。４番目はコンピューターや携帯を通したインターネット。これも世界と交流する道具である。バングラデシュで羊飼いをしながらハーバード大の経営学の講義を聴けるのもインターネットを通してである。ダライラマはこの４教科を習得すればどんな専門に進んでも道を誤らないと考えた。

　では、この４教科に欠けているものは何だろうか。この４教科以外に必要なものは何か。ダライラマの４教科に欠けているものは、美しいものに触れる「美学の時間」だと私は思う。人と人の関係、国と国との関係では、正しいものと不正なものの倫理的関係、友と敵の政治的関係、損と得の経済的関係、上か下かという力関係があるが、このような関係はどれも戦争の原因となることは歴史が証明している。ならば戦争や殺戮の原因とならない関係とは何か。

「美の関係」である。

美しさを競い合うことでは戦争は起きない。
「あなたの言動がほかの人の支持を得ないのは、あなたの言動が美しくないからである。」
と言われた時、人は何を感じるだろうか。その時感じるものこそ、その人やその国の源流をなす心の「潜在的自然植生」だと思う。絵画、音楽、文学、彫刻、舞踊などを通して美しいものに触れ、なぜこの美しさに自分は感動するのか、それをじっくり考える静止した時間が若い時に必要だと思う。それこそ、人がそれぞれ「潜在的自然植生」を見出し、心に「鎮守の森」を育てていく契機になると思う。
そう思うのは私だけだろうか。

７．私の死亡記事

　宗教学者の山折哲雄は自分の死亡記事を書くことを勧めている。自分の生涯を感情を交えないで振り返るのにちょうどいいと言って自らの死亡記事を書いている。そこで私も自分の死亡記事を書いてみることにする。

死亡記事

米澤幸三。
１９４７年群馬県桐生市に生まれる。
２５歳より学習塾「寺子屋」を開設し、以後４０年間「教えることは学ぶことなり」という信念のもとに、生徒自ら学ぶ力をつけるにはどうすればいいかを追求する。
氏の著害『風の記憶』は一つの到達点を示している。以後それを超えようと努力するが果たせず、ついに塾を閉鎖し、一人旅に出る。「歩きつつ考え、考えつつ歩く」ことを心がける。昔の賢人にならって西方浄土を目指してユーラシア大陸を横断しようと７３歳で決意する。５年後カラクーム砂漠を横断中、行方を絶つ。享年７８歳であった。

氏が生前愛した句が友人の手元に残されているが、これはアナーキスト大杉栄が大逆事件の際詠んだ句の本歌取りだという。

春三月 眠り残され華に舞う

２０１１年１２月

（米澤幸三さんの友人である高橋玄朴さんからのメールによる感想文です。　）

『読ませて頂きながら、米澤さんから教えて頂いた言葉が、心の中をたたき続けていました。それは「悲哀」という言葉です。現代日本から姿を消してしまっている深い悲哀の心が、私の心を打ち続けていました。ジェイムズ・ヒルマンという人の「魂のコード」をふと思い出しました。生まれたときから魂は、人の一生を導いている。何も知らない幼い頃にその人の一生をかけて何をしようとしているのかを、垣間見せてくれることをしているというのです。やむにやまれない思いが、私たちの人生をつき動かすと・・・。米澤さんの魂のコードには、何が書かれているのだろうか。そんなことを考えています。』〈高橋玄朴〉

この文章を読んで、悲哀の気持ちがますます深まりました。〈米澤幸三〉

＜連載「万葉の風」（その１）＞　　（塾ジャーナル 03 年 7 月号より転載）

―大津皇子と山の辺の道―

ひびき（茨城、つくば市）
布浦　万代

万葉集に魅せられ、全国の万葉故地の一人旅を続けて早や四十数年が過ぎた。とりわけ大和路はどこを歩いてみても、心を澄ませば万葉人の息吹が懐かしく伝わってくる処である。

中でも、飛鳥と平城を結び、大和盆地の山裾を南北に走る山の辺の道は、万葉人の心に深く惹きつけられる古道である。それは、若かりし頃、万葉歌の中で愛しくも、敬慕の情止むところの無かった大津皇子と出会える道だからである。万葉集を懐中に、私は何度この道を歩いたことだろう。

山の辺の道は、日本の古代国家の頃から存在していたと言われている日本最古の道である。国家形成以前の前三～四世紀の頃には、既に在ったという諸説さえある。現存する山の辺の道は、奈良から桜井迄とか、春日山の麓から海柘榴市跡迄や、桜井から石上神社迄等々、古道説は様々である。私は、三輪山の麓にある大神神社から、石上神宮迄を二、三日かけてこの道を歩くのが好きだ。

早朝、蒼古閑寂な大神神社に詣で、旅への一歩とする。大神神社は、国造りをしたという大物主大神を祀る日本最古の神社と言われている。うっそうたる神木の杉木立の境内はひんやりとして清々しく、荘厳な雰囲気である。まるで、そこは古代から時が静止したかのような錯覚さえ覚える。この神社は古来より神聖視されてきた三輪山を御神体としているために、本殿は無く拝殿のみがある。秀吉の検地の折にさえも禁足地として、この三輪山への入山は許されてはいない。

大神神社を後にし、狭井神社に拝し、山の辺の道へと入る。踏みしめる古道沿いには、記紀万葉の歌碑が点在し、どの碑にもその歌が詠まれたであろう所に建っているのが嬉しい。読み読み行けば時の経つのも、足の疲れも忘れてしまう。そして、古寺社や苔むした石仏達と出会う度に、幼き頃、母から聞いた神話や伝説を思い出し、時はいつしか古代に還って行く。竹薮を通り抜け、細い川を渡り、細く頼りなく山中に入れば、標識さえもない。出会う人も殆どいない。しかし、ここは志賀の都を目指した中大兄皇子も額田王も、遠く大宰府の師として下向した大伴旅人も、国守となって因幡・越中に赴い

た大伴家持も、吉野に遷宮した後醍醐天皇も、西行の旅路を追った芭蕉も、間違いなく通った道なのである。

また、この道沿いには大小様々な古墳や池が点在している。中でも景行天皇陵や崇神天皇陵は、濠を巡らし堂々とした前方後円墳である。井寺池のほとりに佇めば、西には

大和は　国のまほろば
たたなづく　青かき
山ごもれる　大和しうるわし

と古事記に詠われた大和平野が開け、左手に大和三山、更には葛城、金剛、二上山の山並みの遠望が美しい。東を仰げば三輪山が古代さながらの静けさで間近に迫っている。柿本人麻呂が好んで詠んだ巻向の山辺も、指呼の間に美しい。

この辺りは、目に映るもの全てが、いや、通り過ぎてゆく風にも空気にさえも、万葉人が感じたであろう世界と一体感になってしまう雰囲気がある。

山の辺の道の所々から遠望できる二上山の雄岳の山頂には、私が思慕する大津皇子が眠っている。大津皇子と私の最初の出会いは勿論、万葉集の中であるが、学生時代に読んだ国文学者であり、民俗学者もであった折口信夫の「死者の書」によって、それは更に深められた。日本で最も古い神の伝承地域とされる大麻・葛城・二上を背景に、古墳の雫が落ちる岩床から目覚めた大津皇子が、藤原郎女の魂と交感する世界を描いた古代史小説である。彼は、二上山の夕陽の余りの美しさに触発されて書いたと言う。

天武天皇の妃であり、大津皇子の母でもあった大田皇女は、大津皇子と大伯皇女の幼い二児を残し他界する。その妃の妹であった鸕野讃良皇女（後の持統天皇）が、天武天皇の次の妃となってから、大津皇子の悲劇が始まるのである。

天武天皇と鸕野讃良皇女との間に生まれた草壁皇子は、幼少より体も弱く人望も薄かった。しかし、天武天皇の亡き後、持統天皇となった鸕野讃良皇女は、次の天皇を我が子、草壁皇子と決めていた。この為に、持統天皇は草壁皇子に比して文武両道に長け、人望も厚かった大津皇子を、謀反を起こしたという理由で、反論の機会さえも与えず、捕えた翌日に処刑してしまうのである。時に大津皇子、二十四歳であった。しかも皇族以外の墓に葬られたのである。この謀反は持統天皇とその側近者による陰謀であり、無実であったが故に、大津皇子は悲劇の皇子として万葉集に登場してくるのである。しかし、処刑の後、持統天皇の最愛の皇子であった草壁皇子が病死し、疫病や姻戚関係によ

る皇位継承争いが益々激化する等、次々に不幸が持統天皇を襲う。これ等の事件は大津皇子の処刑の祟りと恐れた持統天皇は、大津皇子を二上山の山頂に葬り直すのである。

雄岳と雌岳が寄り添う二上山の遥か彼方を死者の眠る国だと信じていた古代の人々は、この山を古代より神聖視していたのであろう。西方のこの山に眠る死者たちを慰めるに、これ以上のものは無いだろうと思えるほどに、二上山の夕陽は美しい。

悲劇の皇子と言うことも然ることながら、幼少時より学に武に秀で、政り事を真摯に学び、周りの者に耳を傾け、一族の権力闘争の中にあっても、曲げず、屈せず、諂わず、凛として己の魂を磨き上げていった大津皇子の生き方に、私は深い共感を覚えるのである。万葉歌人の中で、最も個として生きた人物は大津皇子ではなかっただろうか。

奈良時代の懐風藻の書に「五言・臨終・一絶」と題して、既に囚われの身となった大津皇子の漢詩が収められている。

金鳥臨西舎　鼓馨催短命
泉路無賓主　此夕離家向

また、大津皇子は処刑場へ向かう最期の心境を、

百伝ふ　磐余の池に　鳴く鴨を
今日のみ見てや　雲隠りなむ
（万葉集・巻三・四一六）

と辞世の歌を万葉集に残している。

大津皇子の妃であった山辺皇女は、黒髪を振り乱し、素足で刑場に走り赴き、大津皇子の後を追い殉死したという。

そして、大津皇子のたった一人の姉君であった大伯皇女は、二上山に葬られた弟を

うつそみの　人なるわれや　明日よりは
二上山を　いろせとわが見む
（万葉集・巻二・百六十五）

と非業の死を悼み、姉としての哀傷切々たる心情を詠んでいる。

大伯皇女の歌碑がある吉備池辺りから、遥かに残照の美しい二上山が眺められる。大伯皇女と大津皇子の姉弟の万葉の歌が、風に乗って聞こえてくるような気がしてならない。

Exam forces students to cram irrelevant facts

By JULIAN DIERKES
Special to The Japan Times

VANCOUVER, British Columbia — I have been studying academic *juku* (for-profit supplementary schooling) for many years and have visited over 50 individually operated *juku* throughout Japan.

I have been thrilled by the dedication of charismatic educators, and dismayed by the relentless focus on standardized test results and by the lack of a diversity of offerings beyond the narrow confines of the curriculum in an era of hypereducation.

In January, thousands of students in Japan sat for the central university entrance examination (center *shiken* or center test). For ambitious students, the exam is merely a requirement to check off on their way to the entrance examinations for specific fields of study that follow later.

For others, the exam is a convenient way to avoid multiple examinations. The exam is one of the ultimate goals that supplementary education through primary and secondary schooling focuses on.

When I read the exam questions that were reprinted in newspapers, I felt dismay and a concern for Japan's future. The linchpin of the education system tests is knowledge that I, as a university professor, am not looking for in my students and that is unlikely to serve the Japanese nation and businesses in the postindustrial era.

Yes, for a student who will go on to a doctorate in literature, it is important to know whether Erasmus wrote before or after Cervantes and Petrarch (question No. 9 in the World History B portion of this year's test). But this knowledge is only relevant in rare circumstances and does not speak to any kind of skill.

The very nature of the exam — short answers selected from a list of options — pushes the education system toward a pursuit of factual knowledge that is rarely linked to any communication and analysis skills. It is one of the great strengths of *juku* that they seem to prepare students well for this kind of exam. This may also be at the root of the consistently high ranking of Japanese

students in international comparisons of educational achievement like PISA.

To make education more relevant to the skills of the 21st century, the core of the central exam has to be reformed. The Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology should experiment with a limited essay format that requires students to provide an analysis of a topic discussed in a short reading or through the presentation of specific data in social studies' subjects, Japanese, and English.

This experiment should be announced ahead of its implementation initially without an impact on students' results. After some tweaking of the essay format, this critical thinking skills portion of the exam could be gradually expanded to take its place alongside the current focus on knowledge acquisition.

The English portion of the exam should be shifted from testing arcane grammatical points to an emphasis on communication paralleling the introduction of an essay format.

With a long-term plan in hand, current elementary school students could anticipate changes in the central exam by the time they sit for it. This will allow them, parents, teachers and *juku* teachers to adjust their teaching methods.

Through such a gradual transition, the central exam as the linchpin of the Japanese educational system could be transformed from its current role as an enforcer of test-taking English, arcane knowledge and cramming strategies into a meaningful test of relevant skills and knowledge.

Julian Dierkes is associate professor and Keidanren chair in Japanese research, Institute of Asian Research, University of British Columbia, Vancouver.
[The Japan Times: Friday, Feb. 3, 2012]

編集後記

13 号に続いて本 14 号も内容の濃いものになったと自負している。
特に今回はたくさんの会員外の方々のご協力なしでは成り立たなかった。
ここに厚く感謝申し上げたい。

またＪＫＫ会員のお一人おひとりの内容の濃さによるところも多々あったように思う。30 年近いＪＫＫの活動そのものの生真面目さがこの味を出していると言えるのかも知れない。人に教える立場の人間の有り様が此処に出ているとも言える。今回此処に記事を寄せた方々はもちろん、そうでない会員の直接・間接の影響は計り知れないものがある。ＪＫＫの活動とはそういうものなのだろう。

それにしてもまだまだ会員の思いは出し切れていない。いやまだまだ新たな思いが湧き出してくるに違いない。ＪＫＫがそんな姿勢の人々の集まりであることに誇りを感じている。そしてこれからも一層活発な活動をすることによって此処に集う人々が益々元気になってそれぞれの生徒達を引っ張っていってほしいものである。まだまだ学び続けなければなるまい。この活動の延長戦上にこれからの教育のあり方が見えてくることを信じて。(林)

「響」１４号（ＪＫＫ）

発行日　２０１２年７月 10 日
発行者　塾教育研究会（JKK）　代表　皆倉　宣之
事務局　小林　和光
千葉県柏市柏 2-7-22-202　看護進学会
TEL　04-7164-1850
E-mail　info@kangohope.com
編集責任者　林　政夫
東京都杉並区永福 3-55-1　青藍学院
TEL　03-3325-8642
E-mail　info@seiran.cside.com
共同編集者　平林　一之
東京都大田区大森東 4-18-13　稲穂塾
TEL　03-3761-9469
E-mail　zwt01362@nifty.ne.jp

進研の合格判定テスト!

弊社は60年以上にわたり高校入試に携わってきました。発足以来、首都圏、近畿圏、東北エリアをはじめとして、全国の5000以上の塾で進学研究会の「Vもぎ」「進研テスト」が採用され、判定精度には高い評価をいただいております。

進研Vもぎ® 中学3年生対象 高校入試 会場もぎテスト

首都圏最大級の会場模擬テスト「Vもぎ」は都立・千葉県立・私立に対応し、本番同様の臨場感を体験できる正確な志望校判定として、年間25万人の受験生に受けていただいております。

Vもぎ実施予定	11月			12月			1月	
都立もぎ	4日	11日	そっくり 25日	2日	そっくり 9日	16日	そっくり 13日	20日
自校作成				2日				20日
県立もぎ	そっくり 4日	11日		そっくり 2日	9日		そっくり 13日	20日
私立もぎ			25日			16日		

塾内専用商品 小学4~6年・中学1~3年生対象 進研テスト

「進研テスト」は受験指導のための学力診断としてご利用いただける標準学力テストです。東京・千葉・埼玉・茨城・山梨を中心に、圧倒的シェアを持っております。

成績表のタイトルを貴塾名にカスタマイズできます！

貴塾のロゴを入れることも可能です！

進学研究会 http://www.shinken.co.jp

ご連絡頂き次第カタログをお送りします。

東京本社 〒165-0023 東京都中野区江原町2-12-20 TEL.03-3952-4171 FAX.03-3950-2661
多摩営業所 〒183-0057 東京都府中市晴見町1-6-1-1F TEL.042-306-7720 FAX.042-364-8715
千葉支社 〒273-0852 千葉県船橋市金杉台1-4-1 TEL.047-447-7211 FAX.047-448-9562
茨城営業所 〒310-0841 茨城県水戸市河和田3丁目2546-5-101 TEL.029-309-1520 FAX.029-251-1780
山梨営業所 〒400-1514 山梨県中央市浅利3028 TEL.055-269-2489 FAX.055-269-2635

今の時代、本当に学ぶべきことは何か。

学校はひとつの社会。自由学園では、生徒が責任をもって、学校という社会を自治しています。緑あふれる１０万㎡のキャンパスは、学びと実践の場。自分の考えをしっかり持ち、総合的に考え実行できる人、自分の属する社会のために、友と協力できる人を育てます。

JIYU 学校法人自由学園

女子部（中等科・高等科）
男子部（中等科・高等科）

創立９０周年　１９２１年　羽仁吉一・もと子創立

寮があり、地方からも入学できます。

〒203-8521　東京都東久留米市学園町 1-8-15　TEL 042-422-3111(代)

URL http://www.jiyu.ac.jp

子供たちの輝く未来を応援する育伸グループ

Hope
Human Orbit of Publishing and Education

“教育”という無限空間を
希望という名の船で廻りながら
私たちは子供たちと共に明日に向かって
確かな人間の軌道を描き続けています

- 真の学力向上を保証する各種教材のラインナップ
  通年教材/ワーク教材/入試対策教材/補助教材/各種講習会教材
- コンピュータ診断学力テスト
- 各種教育情報・入試情報の提供
- 経営・教務支援の各種コンサルティング

株式会社 育伸社
http://www.ikushin.co.jp

本 社：東京都台東区台東3-46-9
TEL. 03-3831-9591 / FAX. 03-3839-8577

KEIKA

100年の時を超え、永遠に羽ばたく

京華	京華商業	京華女子
中学・高等学校	高等学校	中学・高等学校

京華学園広報室
〒112-8612 東京都文京区白山 5-6-6
TEL 03-3941-6493 FAX 03-3941-6494

東洋女子高等学校
TOYOJOSHI
SENIOR HIGH SCHOOL

Girls, Step Forward!
未来へ羽ばたくあなたの、架け橋として

塾対象説明会：7月10日（火）・11日（水）
東京都文京区千石3-29-8 TEL 03-3941-2680
FAX 03-3941-6928 HP:www.toyojoshi@ac.jp
E-mail:koho@toyojoshi.ac.jp

常総学院中学校・高等学校

説明会ご案内

中学校

- ■オープンスクール 6/23(土)・7/7(土)・8/21(火)
- ■柏会場個別相談会 (三井ガーデンホテル柏) 8/25(土)
- ■入試説明会 10/28(日)・11/23(祝)
- ■柏会場入試説明会 (三井ガーデンホテル柏) 12/8(土)

高等学校

- ■学校見学会 7/22(日)・29(日)・8/25(土)
- ■授業見学会 10/13(土)
- ■入試説明会 10/27(土)・11/3(祝)・18(日)

■詳しくはホームページをご覧ください。

◆お問い合わせ◆ (入試広報部) 中学校 TEL:029-842-0708(代) 高等学校 TEL:029-842-8771(代)
〒300-0849 茨城県土浦市中村西根1010番地
URL https://www.joso.ac.jp/

HINODE

JR 山手線
東急目黒線
東京メトロ南北線
都営地下鉄三田線
目黒駅 徒歩5分

学校説明会日程

日程	中学校	高等学校	日程	中学校	高等学校
9/29（土）	11:00～	10:00～	12/1（土）	11:00～	10:00～
10/13（土）	13:00～	14:00～	12/ 8（土）	11:00～	10:00～
11/17（土）	13:00～	14:00～	1/12（土）	11:00～	10:00～

学校法人　日出学園
日出中学校・高等学校

〒153-0063 東京都目黒区目黒 1-6-15
tel 0120-686-077　fax 03-5759-7584
パソコンから http://www.hinode-s.ed.jp
モバイル版　http://www.hinode-s.ed.jp/m/

大反響!!

『塾ジャーナル』定期購読のご案内

手がかりと情報・生徒募集の9,000円ツールです。

■お申込方法

お申し込みは、お届け先の①ご住所 ②お名前 ③塾名 ④電話番号をお電話またはFAXでお知らせください。下記、HPからもお申し込みができます。

■お届け

お申し込みいただいてから1週間程度でお届けいたします。

■お支払方法

年間購読料9,000円〔送料込〕は、初回送本時に郵便振込用紙を同封しておりますので、そのときで結構です。
（※1号目からの購読期限を明記しておりますのでご確認できます。）

㈱ルックデータ出版
「塾ジャーナル編集部」
〒540-0012 大阪市中央区谷町1-3-23 大手前愛晃ビル304
TEL:06-4790-8630 FAX:06-4790-8640
URL:http://www.manavinet.com E-mail:lookdata@manavinet.com

公中検 模試

公立中高一貫校 適性検査 対策模試

①全国最大・業界最大の受検者数！（2011 年は年間のべ22,000名が受検）
②今年で7年目！過去の追跡調査結果を反映させた志望校データを表示！
③データ発送時、フォローアップ問題集を提供！（6月号～ 12 月号）

	2月号	4月号	6月号	9月号	10月号	11月号	12月号
小6	○	○	○	○	○	○	○
小5	○	○	○	○	○	○	―
小4	―	―	○	○	―	○	―

←― 6月号～ 12 月号は会場模試も実施します。詳しくは弊社ホームページをご覧ください。 ―→

中学生 個別指導対応 通年テキスト

アポロン 中学 数学

完全スモールステップ方式で、基礎・基本から定期テスト対策、入試で問われる活用力問題まで、必ず数学を『得意科目』にします。

・中1：213P
・中2：203P
・中3：209P
・各 1,365 円
・A4判

・アポロン確認テストCD-ROM
・中1:86 枚・中2:70 枚・中3:77 枚 収録 / 各 2,100 円

塾専用教材出版販売 ～塾と生徒の未来をつなぐ～

㈱日本教材出版

お問合せ TEL 04－7158－6311
ご注文 0120 FreeDial FAX 0120－795911
URL http://www.nihonkyouzai.jp/

一人ひとりの…未来のために！

「21世紀に生きる子どもたち」を育てるために「生徒が自ら進んで学習をたのしむことができる教室」を

茨城県学習塾協同組合

事務局　〒308-0021
茨城県筑西市甲817-1（志学塾内）
TEL0296-25-0075
FAX0296-25-0596

茨城県内最大級の受験者数！
高校受験のベストパートナー

茨城統一テスト2012®

対象：中学生（全学年・志望校判定4校）

今年度実施予定

受験会場：統一テスト協議会加盟塾

中学3年生対象 【第3回】8/25(土)～9/2(日)　【第4回】10/6(土)～10/14(日)
中学2年生対象 【第3回】8/25(土)～9/2(日)
中学1年生対象 【第2回】8/25(土)～9/2(日)

お問合せ・お申込み　お近くの茨城統一テスト協議会加盟塾又は事務局
受験料　3,000円（税込）

【第1回】
●日　時／10月14日(日) 集合8:10～
●会　場／聖徳大学附属聖徳女子高等学校
茨城キリスト教学園高等学校
水戸短期大学附属高等学校
土浦日本大学高等学校
明秀学園日立高等学校
江戸川学園取手高等学校
会場もぎ
第1回のみ 中学3年生対象
※第2回(11/18)、第3回(1/6)、第4回(2/3)は1・2・3年生全学年対象
●受験料／4,000円（税込）
会場は実施回により変更になる場合がありますので、必ず確認してください。

※㈱進学研究会は、お客様の個人情報を法令に従い、適切に保護することを宣言いたします。弊社が入手する個人情報は、成績処理・志望校判定用統計資料以外の目的には、一切使用しません。
※茨城統一テスト協議会では、電話による進学先のお問い合わせ、教材・予備校への勧誘は、一切行っておりませんのでご注意ください。

お問合せ
主催 茨城統一テスト協議会 事務局　TEL.029-257-2327
〒311-4152 水戸市河和田3丁目2546-5-101 メールibatou@cyber.ocn.ne.jp（営業時間／9:30～17:30）
協賛 株式会社 進学研究会 茨城営業所　TEL.029-309-1520
〒311-4152 水戸市河和田3丁目2546-5-101 メールibaraki@shinken.co.jp（営業時間／9:30～17:30）

「響」14号

ＪＫＫ